

季刊

Darjeeling Days

Volume 19



Hood
雨や雪をしっかり防ぐフード。

Windproof Inside Flap
防風のための内翼。

Hood Closure Cono-look Drawcord
フードが外れないように占めることのできる紐。丸い皮がストッパーになる。

Small Pocket
便利な胸ポケット。メモやコンパス、ちょっとした小物を潜ませておける。ベルクロで止めるフラップは、手袋をしていても開けやすい。

Zipper & Button Closure
前開部分はジッパーとボタンでしっかりと留めることができ、雨風をしよげる。

Hand Warmer
ポケットの裏側には、手袋したまま手を入れることのできるハンドウォーマーが付けられている。このハンドウォーマーは、野外では大活躍する。

60/40 cloth
60/40クロスが使用され、防水性や揮発性が確保される機能的なパーカーとなっている。

Cargo Pocket
大容量のポケットは、あれこれ入れられるのでとても便利。フラップは胸ポケット同様ベルクロ仕様。

Velcro
袖部分はベルクロでしっかり止めることができる。

特集 アウトドア・ものローグ

Darjeeling Days

Volume19 2019.2

C O N T E N T

特集

04 アウトドア・もののローグ

06 ときには星の下で眠る

08 ヘビーデューティーなファッションで外に飛び出す

09 MOUNTAIN PARKA (SIERRA DESIGNS)

10 Novelty Nuptse Vest (NORTH FACE)

11 Rugby shirt (Eddie Bauer)

12 GRAMICCI PANTS (GRAMICCI)

13 3EYE CLASSIC LUG (Timberland)

14 DANNER LIGHT Khaki (DANNER)

15 Bean Boots (L.L.Bean)

16 MOUNTAINEER FRAME PACK3 (KELTY)

17 Day Pack (KELTY)

18 GLOVES Basic Model (GRIP SWANY)

19 Paisley Bandannas (HAV-A-HANK)

20 野山でキャンプをする

21 キャンプ道具

21 Half Moon III (SIERRA DESIGNS)

22 XP Hexa Tarp S (Coleman)

23 Down Hugger900 #3 (mont-bell)

24 NEOAIR™ XTHERM™ (Therm-a-rest)

25 PRIMUS 2245 Lanthanum (IWATAN PRIMUS)

26 料理をする

26 LIQUID FUEL STOVE (Colman)

27 Oven II (Colman)

28 Titanium personal cookerset (snow peak)

29 Gravy BBQ Gridiron #2 (Captain Stag)

30 Paella Pan (WAHEI FREIZ)

31 Traveler (VICTORINOX)

32 珈琲を淹れる

32 SVEA 123R(OPTIMUS)

33 WHISPER LITE (MSR)

34 PERCOLATOR (snow peak)

35 SIERRA CAP (Sierra Club)

36 OLD 5 BLEND (Cocktail-do)

37 Herb & Fruit Tea (Pompadour)

38 野山で遊ぶ

39 雪で遊ぶ

39 CARIBOU (SOREL)

40 RENDEZVOUS 25 (ATLAS)

41 SUOERLITE CROWN EF (FISCHER)

- 42 SHORT 7 + XPRESS 10 (ROSSIGNOL)
- 43 ESCUDO (SUZUKI)
- 44 川や湖で遊ぶ
 - 44 430 Trek (FUJITA CANOE)
 - 45 Helios 3 Flyrod & Battenkill 2 Fly Rell (ORVIS)
- 46 鳥と遊ぶ
 - 46 BARD CALL (AUDOBON)
 - 47 MONARCH7 8×42 (Nikon)
 - 48 Wild Birds of Guide of Japan (Yama-kei Publishers)
 - 49 FIELD-FLEX BOUND BOOK(Rite in the Rain)
- 50 星を眺める
 - 50 STAR CHART (Watanabe Kyogu)
 - 51 ADJUSTABLE FLEX-LITE(FLEX-LITE)
- 52 ウィルダネスを歩く
 - 52 Trekking Map (山と高原地図八ヶ岳 昭文社)
 - 53 NO.3 BLACK COMPASSES (SILVA)
- 54 写真を撮る
 - 54 Super A (Pentax)
 - 55 CONTAX T (KYOCERA)
- 56 焚火をする
 - 56 MATCH SAFE 2898 (MARBLES)
 - 57 Fire Stand (UNIFLAME)
- 58 駆る
 - 58 XLX250 (HONDA)
 - 59 SR400 (YAMAHA)
- 60 備えよ常に
 - 60 FAST AID KIT (karrimor)
 - 61 GENESIS DRY 8.5 (MAMMUNT)
 - 62 EMERGENCY TOOL
 - 63 PACKED MEAL
- 64 アウトドアを読む
 - 65 遊歩大全、バックパッキング入門、ヘビーデューティーの本
 - 66 山の絵本、定本野鳥記、山のパンセ
 - 67 北八ッ彷徨、雨の日の釣師のために、日本の川を旅する
 - 68 コーヒーもう一杯、われらは怪しい探検隊、低山徘徊
 - 69 カヌーで来た男、八ヶ岳の森から、カントリースタイルの食卓

写 真

70 Travel Photography

ヨセミテ

73 スナップの愉しみ

太陽を見る

74 花図鑑

カタクリ

75 お茶の快樂

TEA BREWER BAG

76 カフェ巡り

OTSU COFFEE (東京・神田明神)

77 旅のスィーツ

利久堂のゆきげ杏 (長野)

78 今日一枚

土堂の突堤 (尾道)

79 Voice From Editor

連 載



特集

アウトドア・ものローグ



長野県の戸隠キャンプ場にて
PENTAX Super A, Velvia400

僕が高校時代、雑誌ポパイが創刊され、そこに登場するカリフォルニアの若者の生活の、底抜けに明るい生活にずいぶん憧れたものだった。創刊されたポパイに登場するキーワードとして、「アウトドアライフ(野外生活)」、「ウエスダネス(人の手の入っていない土地)」、「バックパッキング(バックパックを背負って徒歩で野山を旅すること)」、「ヘビーデューティー(酷使に耐える、頑丈な)」など、当時の僕らには耳慣れないものが目白押しだった。

1970年代後半、日本のアウトドアライフはまだまだ登山を基本としたハードなもの、高尾山へハイキング的なソフトなもの、と完全に二分されていて、さらに、登山なら登山、釣りなら釣りという具合に、目的が特定され、硬軟取り混ぜたあれこれ楽しんでしまうアメリカ発のアウトドアライフとは大きな隔たりがあった。

もちろん、新しい物好きの僕らが、そんな魅力的な響きを持つ言葉を実体化した素敵なあれこれに、すぐに飛びつかないわけがなかった。もともと小学校低学年からボーイスカウトに入団していた僕にとって、アウトドアライフの基本はすでにそこで学んでいた。そんな下地もあったからか、すんなりと仲のいい友人達とアウトドアライフを満喫する日々を過ごすことになるのは必然だったし、それらが僕らの遊びの中心に据えられたのは言うまでもない。

アウトドアライフに包含される様々な素敵な遊びに出会ったおかげで、10代後半から30代前半までの時期は、本当に充実していたわけで、

僕という人間形成の大きな部分は、このアウトドアライフにインスパイアされたものだった。

インスパイアといえば、これらの遊びには師匠とでもいう何人かの大人たちの影響があった。

もっとも大きく影響を受けたのは、八ヶ岳山麓甲斐大泉でペンションをしていた加藤則芳さん。角川書店で片岡義男氏の編集者をしていたが、会社を退職し、ドンキーハウスというペンションを建てたのだ。たまたま片岡さんのラジオ番組に加藤さんが登場したのを聞いていた僕らは、すぐにドンキーハウスを訪問し、ドンキーハウスが閉じるまでの間、何度も通い詰めた。加藤さんは、ペンションを畳んだ後も、6年前に病気で逝去されるまで、米国のロングトレイルを紹介するなどアウトドアと密接に関係する仕事を続け、日本を代表するバックパッカー兼アウトドア作家となった。

もう一人は、釣り人であり、作家だった芦澤一洋氏。『遊歩大全』というバックパッキングの教科書を日本に紹介するとともに、自らも『バックパッキング入門』など何冊もの書を世に出した。

さらに、カメラマンの佐藤秀明氏。片岡作品の表紙を多く手掛け、ドンキーハウスの常連でもあった。直接何度か写真の撮り方を教えてもらったが、今なお、あんな風に写真は撮れない。

その他にも、ドンキーハウスを中心に作家のC.W.ニコル氏、われら怪し探検隊の椎名誠氏、カヌーイストの野田知佑氏、そして片岡義男氏など、多くの遊び上手な大人たちが師匠だった。

そんなアウトドアライフな時代を過ごせたことは、僕にとって最高に素敵な宝物になっている。



○ ときには星の下で眠る

綺麗に晴れた美しい一日だった。日差しが輝いて、風の煌く午後が終わり、夕方の時間へと入って行きつつあった。

林道から溪流に沿って林の中へとオートバイを進めているうちに、今晚一晚を素敵に過ごせそうな小さな場所を見つけることが出来た。溪流よりも一段高くなった、林の端の平坦なちょっとした空き地だ。オートバイを止め、サイドスタンドを出し、車重をそれに預けると、僕はキーを引き抜きジーンズのポケットに放り込んだ。単気筒の低いエキゾーストノートが止むと、小鳥の声があちこちに聞こえた。

張り終えたテントの前でコーヒーを沸かしながら、吹いていく風をしばらく楽しんだ。草色のセーターを肩にはおって丁度いいくらいに空気が冷えている。片手をジーンズのヒップ・ポケットに突っ込んだまま、アウトドア用のコンパクトストーブのノズルを閉じると、今まで対流していた周りの空気が完全に静止したような感じになった。一杯目のコーヒーが今湧き上がったのだ。

コーヒーをセラカップに注ぎ、フレッシュでとても熱いコーヒーの最初の一口を啜った。コーヒーの湯気の向こう側に溪流がきらきらと輝き、周りの林からはさっきまで鳴いていた鳥の声に替わってヒグラシの物憂げな鳴き声が聞こえてくる。林と林の間にぽっかりとあいた暮れ色の空には、夏の名残の雲が浮かんでいた。

こんな静かな空間を独り占めするのは、なんと贅沢なことなんだろう。こんな時間が僕はとても好きだ。吹き抜けていく少しの風がとても心地良かった。この風にも、秋行く季節の、一番最初の前触れがはっきりと感じられた。

風を感じるには、オートバイが一番だ。ここへ来る途中、ふんわりとした午後の時間を、僕は一人で峠に向かってオートバイを走らせ、登り坂になっているS字型のワイングロードを綺麗にこなしながら、夏の薫りを残している風を十分楽しんだ。時折ヘルメットの中にまで飛び込んできたりする。これは、車のようにスペースごと移動している状態では絶対に感じることで出来ないものなのだ。外界とは遮断された車の内部から見るテレビ画面のように切り取られ

た光景は、どうしても退屈で意味のないものになってしまう。ところが、オートバイの場合は、自分が風景の中にむき出しのまま放り出されている。自分を包む空気が、そのまま空に続いているのだから、開放感が充実している。足を伸ばせば大地に足がしっかりと着く。そして、カーブを一つ曲がるごとに冷たくなる空気やすれ違ったオートバイが作る微妙な空気の流れを当然身体の表面の感覚で素直に感じる事が出来るのだ。

オートバイに乗る楽しみのもう一つは、時々単気筒のオートバイに乗った女性がVサインと共にヘルメットのシールド越しに笑顔を送ってくれること。それだけで上等な気分になれるというものだ。

そういう過程を経ることによって、都会から自然の中へ入っていったときの精神的ギャップを埋めることができるというわけだ。

オートバイの脇に設えたテントの前で、僕は夕食を作った。ここに来るまでの道程で、少しだけ遠回りをして寄った自家製のパンを焼いている店のパリパリのバケット、すりつぶして煮込んだジャガイモのポタージュ、厚切りのハムと、炒めたシメジとほうれん草のソテー、いつも行くフランス惣菜屋で買ったパテ。そして現地調達した野菜サラダという手軽なメニューだ。

ゆっくりと時間をかけて味わっているうちに、あたりはもう暗くなっていた。溪流の上にある空には、無数の星が輝いている。昔学校で習ったいくつかの星座の形を星の群れの中に見つけることができた。

時間が経過するにつれ、星の数もより増し、天の川が林上にかかった。星明りの洪水を見上げながら、僕は様々なことに思いを馳せる。こんな自然の中にと、その不可思議さや偉大さを思わずにはいられない。まず、都会の中での時間の感覚を根本から覆される。最初の一時間が三時間ぐらいに感じ、次の一時間が10分ぐらいに感じるなんてことがしばしばあるのだ。感覚の次に思考も時間を超越したことへと向かっていく。

例えば、こうして見上げた星を思う。はるかなる時と空間を越えて、その光を僕に浴びせて



いるのだ。僕の目の中で認識した光は、何億年も前に星から放出されたものかもしれない。だから、この瞬間、その星の実体はすでに存在しないことだってあるわけだ。そんなはるかなることをぼんやりと考えていると、ふと自分が見えてきたりする。

自分を見つける作業のためにあったはずの大学という人生の執行猶予の間には、結局自分を見つけることなど出来なかった。にも拘わらず、そんな自然の中にいると、自分が何をしたいのか分かったりする。それを僕が自然の中に駆り立てる理由の一つかもしれない。

僕は、溪流に流れ込む湧き水を汲みコンパクトストーブで沸かした。沸いた湯で今度はダージリンを入れた。マスカテルフレーバーを思い切り旨に吸い込む。僕は土曜の良く晴れた午後には、時々近くの山や海にオートバイで出かける。そんな時はいつもデイバックにストーブやシェラカップとともに自分でブレンドしたコーヒーやヌワラエリアを詰めて行く事にしている。ヌワラエリアの香と午後の空気がとても似合う気がするからだ。だけど、小さなガスランタンの火を見ながら飲む熱いお茶として、このダージリンオータムナルに勝るものはない。

ゆっくりと、眠りに付くまでの時間をこうして無数の星を見ながらすごす。肩に羽織ったセーターに袖を通し、ダウンベストを重ね着すると、顔と手に触れる空気だけが冷たかった。

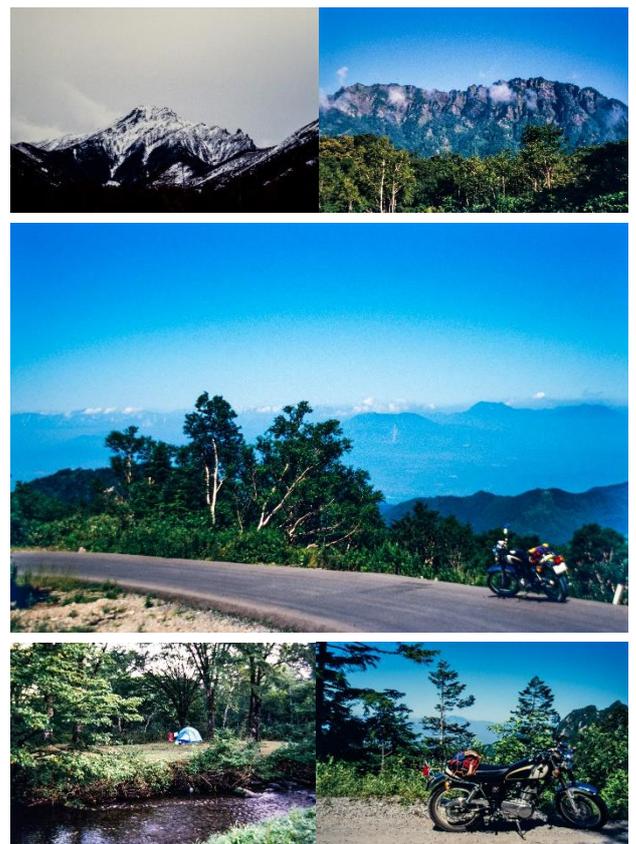
一週間のうちのほとんどの朝と夜がおなじものであるというのは、僕にとって苦痛だ。その上、週末を家でごろごろ過ごすなんていうのは拷問に近い。都会のやたら人のいる場所が苦手な僕にとって、そんな拷問のような状況から抜け出すということは、自然の中へ、風や光のなかへ出て行くことなのだ。

冬はクロスカントリースキーで森の中を歩きまわり、動物の足跡や真っ白な風景を楽しみ、春から秋にかけては野や山を彷徨したり、オートバイを駆って自然を満喫する。ロッド、フライ、ピノキユラー、それにお気に入りのカメラなどをもっていけば、思いがけず出会った溪流で釣りが出来たり、見知らぬ鳥を見つけることだって出来てしまう。木にハンモックをかけ、

のんびりとした時間の中で、好きなハードボイルドを読むことだってとても素敵なことだ。眠くなったらそのまま寝てしまえばいい。そして、こんなことを通じておなじように自然を愛する友達に出会うこともできる。彼らと森の中のペンションで薪ストーブの燃える音をBGMに語り合ったりすることも、また楽しいひとときだ。

初秋の冷気をパートナーに、夜が僕の周りで、舞った。ランタンの灯りを消してシュラフの中にもぐりこむ。溪流の音だけが自然の空気のように聞こえた。自然の中に住むのは無理かもしれない。都会の中で生活しているから、こんなに自然に足が向くのかもかもしれない。理由はどうであれ、ときには星の下で眠りたいと思う。新鮮な朝の空気のもとで、その日一杯目のコーヒーを美味しく飲む、ただそれだけのためにでもだ。

社内報『道程』（1983年6月）より



ヘビーデューティーな ファッションで外に飛び出す

米国で生まれたヘビーデューティー (Heavy Duty)。「丈夫な」とか「頑丈な」という意味だが、北米先住民の知恵や開拓時代の創意工夫が生み出したヘビーデューティーは、必要でしかも十分なもの、良く機能するもの、本物という意味をも含有する素敵な言葉なのである。

そのヘビーデューティーの技術や道具を造り出したセルフエイド的な生き方に直結する服装は、アメリカのアイビーリーグの学生たちによって、アウトドアファッションの先端へと育てられた。

機能性豊かで、アイビーファッションを取り込んだヘビアイファッションで、さあ街や森に飛び出そう。



雨や雪をしっかりと防ぐフード。

フードが外れないように占めることのできる紐。

前開部分はジッパーとこのボタンでしっかりと留めることができる。

ポケットの裏側には、手袋したまま手を入れることのできるハンドウォーマーが付けられている。このハンドウォーマーは、野外では大活躍する。



便利な胸ポケット。メモやコンパス、ちょっとした小物を潜ませておける。ベルクロで止めるフラップは、手袋をしていても開けやすい。

60/40クロスが使用され、防水性や揮発性が確保される機能的なパーカーとなっている。

大容量のポケットは、あれこれ入れられるのでとても便利。フラップは胸ポケット同様ベルクロ仕様。

○ MOUNTAIN PARKA (SIERRA DESIGNS)

マウンテンパーカー

昔は、登山用に作られたフード付きジャケットのことを「マウンテンパーカー」と呼んでいたが、現在は、アウトドア限定ではなく、ヘビデューティーな都会のファッションの代表としても知られている。米国のIVYリーグの教授などが、このマウンテンパーカーを着ている姿を、映画などでもよく見かけたものだ。

もちろん、アウトドア用に作られているので機能性と耐久性に優れ、胸と両脇に付けられた大きなポケットは、ハンドウォーマーも含めとても使いやすい。また、最近のモノはシンサレートやゴアテックスなどの新素材も使われ、防水機能や発汗機能などがとても優れている。

歴史をたどると、もともとは、アラスカのイヌイトがアザラシの皮で作る上着を模したアノラックが原型だといわれている。

マウンテンパーカーを語る時に忘れてはならないのがシエラデザインの60/40クロス「ロク・ヨン・クロス」のマウンテンパーカーだ。

横糸に、30番手という太めで強度のあるコットン糸を使い、縦糸には、分子密度が高くこれ

また強度のあるナイロン糸を利用するという、新素材だ。その混紡比率が、コットン58%・ナイロン42%であったことから、「60/40「ロク・ヨン」」と呼ばれるようになった。この混紡比率は、「水分を含むと膨張する」コットン（天然繊維）の特徴と、「分子密度が高く、水に強い」ナイロン（化学繊維）の特徴を踏まえた上で、緻密に計算され生み出されたもので、雨や雪といった悪天候時には、6割のコットンが膨張して生地の間隙を埋め、生地全体の密度が増す。残り4割のナイロンはもともとの性質上、水を弾き、風をシャットアウトしてくれるわけだ。つまり、見事なまでの撥水性と防風性を備えた、歴史上稀に見る「機能素材」だったわけだ。

この「60/40クロス」は、Gore-Texなどのハイテク素材が存在しない1960年代後半にあっては、非常に画期的なものだったのである。

僕は、このマウンテンパーカーを入手するために、夏休みを半分潰して電気の配管のバイトに明け暮れた。そのおかげで上部写真と全く同じものを入手し、その後20年間愛用した。

ダウンベストには寒い時にしっかりと防寒してくれるしっかりとした衿が欲しい。

バックパック等が干渉する肩部分は、ナイロン素材で補強してある。

昔から変わらないノースフェイスのロゴが格好いい。

外側は50デニールのリップストップナイロンに撥水加工を施し、内側には環境に配慮したリサイクルダウンを使用。

登山などを目的とする遠征向けに開発された1990年代のノースフェイスを代表するヌプシジャケットのデザインを踏襲している。

メインのポケットの後ろには、ハンドウォーマーが付いている。

メインポケットのジッパーの開閉部には、手袋でも開けられるように紐が付いている。



○ Novelty Nuptse Vest (NORTH FACE) ダウンベスト



フェザーダウンがもこもここと入ったダウンジャケットは、冬のキャンプには欠かせないアイテムの一つだ。そのダウンジャケットから両腕部分を全部取り除いてしまったのが、いわゆるダウンベスト。野外で動き回る時、ダウンジャケットだと暑いので、こまめにレイヤードして気温調節するためのアイテムとして生まれたのではなかったか。

僕はNorth Faceのダウンジャケットをマウンテンパーカーの下に来て動き回ることが好きだった。

ダウンジャケットは1930年代にエディ・バウアーによってスカイライナージャケットとして開発されたといわれている。エディ・バウアーは今でも人気のアパレルメーカーで、比較的HDな品揃えが多く、いまだに僕も大好きなブランドなのだが、でも、ダウンベストといえば、ノースフェイスのモノがお気に入りだった。

日本には1970年代のヘビーデューティ・ファッションの流行とともに持ち込まれ、ポロやブルックスブラザースのボタンダウンシャツ

に、ダウンベストを羽織ってデニムやコットンパンツにワークブーツやマウンテンブーツといったスタイルをするのがとっても格好良かったものだった。

真冬のアイテムとしては、ちょっと力不足なので、マウンテンパーカーなどが必要になるけれど、今でも初春や晩秋の時期になると、ダウンベストが活躍する。当時みたいなHDな仕様のダウンベストを着ることは無くなったけれど（今着ているものは、BEAMSのもの）、やっぱりこれがあると、ずんずん歩いてしまえるのが嬉しいアイテムの一つなのである。

当時はあまりカラフルなものよりも、落ち着いた配色のモノがすきだったのだが、今入手するとしたら、きっと派手な、まさに上部写真のようなオレンジ色のダウンベストを入手するに違いない。

ボタン一つのニュー
ジーランドスタイル
がいい感じだ。もち
ろん柔らかいラバー
ボタンが使用されて
る。

衿はツイルを使用。
白だと汚れが目立つ
ので、色付きを着る。
衿、前立て、裾はヘ
リボーンテールで補
強されている。



胸にはロゴが刺繍さ
れている。昔、エ
ディーバウアーの象
徴であるグースの刺
繍のあるラグーシャ
ツがあったけれど、
あれは恰好よかった。

ゆったりとしたサイ
ズを選ぶと、脱ぎ着
がしやすく、動きや
すい。

ラグーシャツはスト
ライプが好きだ。ネ
イビー、グレー、臙
脂、黄など、色の組
み合わせもいろいろ
あって、楽しい。

○ Rugby shirt (Eddie Bauer) ラグーシャツ

アウトドアで何を着るのか、それはとっても重要な問題だ。室内と違って、外は気象条件によってさまざまな変化が起こるからで、それに対応する服でなければならないのは、僕がいまさら語る必要のないことである。

例えば昔のバックパッキングの教本を紐解くと、野外で着る服の色は、汚れが目立たない物で鮮やかな色はエマーゼンシーカラーのブライトレッドのみなんていう、かなりストイックなことが書かれていたものだが、今の時代は、なんでも好きなものを着てしまおう。

ただし、基本はある。それはレイヤーシステムを考慮すること。つまり気象条件の変化に合わせて脱ぎ着できる服を選ぶことだ。なので、アウトドアでのパーカーなどのインナーとしては、基本コットンシャツやウール（フランネル）シャツということになる。

コットンシャツなら、ミウラ&サンズ（現シップス）やビームスのダンガリーやウエスタンシャツが当時は定番だったし、ウールならペンドルトンやパタゴニアが定番だったそんな時

代、僕がこよなく愛したのは、米国西海岸のバックパッカーに愛されていたラグーシャツだったりした。元来、格闘技を織り込んだ球技であるラグビー用なので、コットンといってもヘビーデューティーで荒い扱いにも耐えられるのが嬉しかった。

ラグーシャツは、意外とアウトドアブランドものが当時も発売されていたのだけれど、僕が好きだったのは、エディーバウアーのラグーシャツだ。

エディーバウアーは、1920年にドイツ系アメリカ人のEddie Bauerが、シアトルで創業したアウトドアブランドだった。世界で初めてダウンパーカーを考案したメーカーとして、特にアウトドアの世界では有名だったが、今では比較的年齢層高めの人向けのファッションブランドに変身している。

エディーバウアーのラグーシャツは、ボタン一つのニュージーランドスタイルの奴が格好いい。しっかりとしたウェイトのある生地、一枚で着ても、コーディネートしても使える、ストライプラグビーである。今でもこのラグビーシャツは僕のお気に入りなのである。

ゴム入りの胴回りは、動きやすい。調整ベルトもついているので、ずれないのも嬉しい。

チノパンはコッパン（コットンパンツ）という異名を持つ通り、コットン100%の素材で作られる。だから汚れも何のその、ガシガシ洗えてしまうのも特典が高い。

股下はガゼット・クロッチ仕様で、ガバッと180度開脚してもビリッと破れない本気のクライミング仕様。

ゆったりとした造りで歩行の邪魔をしないし、ストレートタイプのスタイルなので、着いても格好いい。

○ GRAMICCI PANTS (GRAMICCI) チノパン

アウトドアで活動的に動き回る際、実はジーンズは意外と邪魔だ。生地が厚く伸縮性に欠けることや、雨に濡れると重くなり、乾きにくい。だから、アウトドアライフを楽しむときには、チノパンが欠かせない。

チノパンとは、「チノ・クロス」と呼ばれる、主に綿やポリエステルを綾織りにした生地で作られたパンツのことで、生地の耐久性や着心地のよさから、もともとは軍の作業着や制服などに使われてきたものだ。

僕らの世代でチノパンと言えば、一般的なカラーはカーキやベージュで、これ以外の色はあまり考えられなかった。今では、いろんな色のものが作られ、街着としても人気だが、やっぱりアウトドアで着るのだったら、断然カーキかベージュがしっくりくる。

チノパンも、様々なメーカーから出されていて、特にアウトドア用ともなると、モンベルやノースフェイス、パタゴニアなどからいい感じのものがあれこれ出ているのだが、僕が好きなのはグラミチ(GRAMICCI)のチノパンだった。

グラミチは、1982年に米国カリフォルニア州で創業した。1970年代にカリフォルニアのヨセミテを中心に数々のルートを開拓し、伝説のクライマー集団「THE STONE MASTERS」の一員としてアウトドア界にその名を轟かせたマイク・グラハムが創業者だ。180°の開脚を可能にする「ガゼットクロッチ」や片手で調整できる「ウェビングベルト」が有名だった。

彼は2000年にグラミチをバイアウトして、新たにクライミングウェアブランド『ROKX』（ロックス）を立ち上げたという。ROKXは僕にとっては未知のブランドだが、グラミチは、今でもグラハムの頃からの定番商品をちゃんと守りつつ、着心地のよさやデザイン性がタウンユースでも評価され、ライフスタイルブランドとして、とても人気がある。

グラミチのチノパンは数枚持っていて、防水処理をしておくとも多少の雨ならばじいてくれる柔軟な綿布は、とても歩きやすく履き心地もよかったし、各種コーディネートの中でローテーションしやすかったので、町でもよく履いたものだ。

360° レーシングシステムは、網揚げの締め皮と連動しており、足全体を靴にフィットさせる。ライニングはグローブレザーが使われている。

ティンバーランドの焼き印が押されているのがとっても良い感じだ。

原皮の外観をほぼそのまま残して仕上げたプレミアムフルグレインレザーのアップパーは、手縫いのモカシン製法によって縫合されている。



ビブラムソールのようなしっかりしたラバーソールを装着しているのので、街歩きのみならず、森の中でもしっかり歩ける。



UGGのカジュアルな雰囲気のモカシンDakota

○ 3EYE CLASSIC LUG(Timberland) モカシン (ブーツ)

キャンプサイトで履く靴としては、モカシンがしっくりくる。街からそのまま森に行くときに、重装備のブーツだとなんだか物々しい。車をふらりと走らせて森に来る時に、違和感なく履けるものとして、革製のモカシンがいまだに僕は好きだ。

ただ、本来のモカシンと、僕の履くタウンシューズ兼アウトドアシューズは、ちょっと違う。もともとモカシンは、アメリカの先住民が履いていた、一枚革で作られたスリッポン形式の靴のことを指したという。皮は柔らかい鹿の皮などが使われ、見た目は室内履きにも見える作りだ。ふわふわのファーが付いたものや、スエードやムートンなどを素材としたものが原型に近いだろうか。いまでもこの系統のモカシンは、1945年米国で創業したミネトンカがその伝統を受け継いでいる。さらに、南カリフォルニア発祥のUGGのモカシンやナイキが出したスニーカー AIR MOCシリーズは、現代のモカシンとしてその名を知られている。

一方で、僕の好んで履くモカシンは、もっと

ハードで、しっかりとした皮製のモノだ。

例えば、モカシンの作り方で造られ、ソールに滑らない素材が付けられるとデッキシューズになるし、イギリス風のスエードで作られるとワラビーに進化する。さらにハードな皮をモカシン縫いをしてビブラムソールを付けたものは、アウトドアシューズとなるのだ。そして、その代表的な靴が、ティンバーランドの3EYE CLASSIC LUGだ。

ティンバーランドは、1952年にネイサン・シュヴァルツがボストンで創業した靴メーカーだ。アウトドア用のブーツやシューズを中心に製造してきたが、今ではアメリカでHIP-HOP系のミュージシャンがブーツを愛用したことから、昔僕らが愛用し始めた頃とはだいぶ違うブランドの雰囲気が漂っている。しかし、幸い3EYE CLASSIC LUGは健在で、街で履くシューズとしても、森の中でキャンプをする場合のカントリーシューズとしても最適なのである。

ちなみにUGGの柔らかいDakotaモカシンは、テントの中で履くテントシューズとしても最適でおすすめだ。



結びやすくしっかりと足をフォールドする網揚げ用の靴紐が嬉しい。

とても柔らかい皮なので、靴づれはしない。

デイパックを壁のフックなどにかける便利な紐。

通気性がありながら防水性に優れた素材、ゴアテックスが使われているので、蒸れ難く、さらにブーツそのものを軽くしてくれる。

ビブラムソールなので、しっかりと衝撃を吸収してくれる。

○ DANNER LIGHT (DANNER) ダナーライト (ブーツ)

登山靴は武骨だ。そして重さも重量級だ。それほどハードに山に登らない人間からすると、わざわざそんな登山靴を履こうという気にはならない。でも、スニーカーだと足のフォールドなどが心もとない。スニーカーと登山靴の中間の、山を歩ける軽やかなブーツはないものだろうかと山歩きを始めた頃に思ったものだ。

そんな時に打って付けだったのが、アメリカのDANNER社が開発したダナーライトだ。

1979年、ダナー社は、それまで靴に採用する事が難しいと言われていた防水・透湿性能に優れたGORE-TEX®を皮と組み合わせることで、防水の皮ブーツでありながらとても軽い優れたアイテムを生み出したのだ。

今ではさまざまなアウトドアアイテムに活用されているゴアテックスだけれど、当時靴に利用してしまうという発想は、本当に驚きだった。「防水透湿」という特徴のある、つまり、微細な孔を無数に持つゴアテックスは、水は通さずに水蒸気は通過させるという性質の素材で、多くのウエアに利用されるようになっていた。

さらに、いまでは一般的になったビブラムソールを早くから取り入れていたのもダナーライトの特徴だ。ビブラムソールは、イタリアのビブラム



(Vibram) 社が1935年に生み出したグリップ力と安全性を持ったゴムソールで、従来の革と釘で出来た靴底に取って代り、登山靴、ワークブーツ、スニーカーなど様々な靴のソールに使用されている。この優れたブーツを生み出したDANNER社は、1932年米国ウィスコンシン州チペワフォールズでチャールズ・ダナーが創設した靴メーカーだ。安い仕事用ブーツを作り、一足4ドルで売ることから始まり、その後オレゴン州ポートランドでビジネスを展開。1959年にアメリカで初めてビブラムソールを用いたシューズを開発し、一躍アウトドアシューズのプレミアブランドとなった。すっかり出番は無くなったが、こいつだけは手放しがたく、今でも靴箱の片隅に納まっている。

高品質のフルグレイン・レザーが雨や雪をはじき、アウトドアを歩くには最適な状態を作り出す。



ゴムソール部分は、完全防水を確保してくれるので、ぬかるみや水たまりもへっちゃらで歩けるのが嬉しい。

この部分が栗饅頭に見えたため、「くりまんシューズ」と僕らは呼んでいた。

ソール部分は、職人が今でも一つ一つ型を使って成型するため、フィット感が素晴らしい。

車のチェーンのようなステッチが、雪道やぬかるみで滑りを押さえてくれるので、安心してある国ことができるのが嬉しい。



僕が履いていた網あげ紐の無いBean Boots

○ Bean Boots (L.L.Bean) ビーン・ブーツ

L.L.BeanのBean Bootsを僕らは「くりまんシューズ」と呼んでいた。このL.L.Beanを代表するブーツは、ロングブーツ、ハーフブーツ、そしてモカシンが用意されているのだが、仲間の多くはモカシンを履いていて、それを前から見ると「栗饅頭」のように見えたからだ。

僕は、網あげ紐の無い、いまは廃盤になってしまっているBean Bootsのハーフブーツを長年レインブーツとしても愛用していた。

L.L.Beanは、1912年にレオン・レオンウッド・ビーンによって創業されたが、もともとはこのブーツを製造販売する会社として創業されたといわれている。アウトドアマンであったレオン・レオンウッド・ビーンは、米国メイン州でのハンティング経験を元に、作業用のゴム靴にレザー・トップを縫い付けた画期的なハンティングシューズ「メイン・ハンティング・シュー」を製造し人気を博したが、ゴム底とレザー・トップが剥がれ大半が返品されるという事態に陥ったらしい。

その失敗を元に、テストを重ねて出来上がった

たのがこのBean Bootsだったというわけだ。

これをもとに彼はL.L.Beanを立ち上げ、一躍アウトドアメーカーの代表格に躍り出た。いまだに、L.L.Beanが「100%満足保証」を行っているのは、この伝統によるものだという。

ゴム製の職人の手になる精巧な足型を使用したボトムは、完全な防水性を確保し、フィット感が抜群だ。ソール部分には、チェーン・パターンの溝が入っているので、ぬかるみや雪道でも滑ることが無くホールドされる。土踏まず部分には、スチールの補強材が挿入され、安定感とサポート力も抜群。

また、アッパーに使用した高品質のフルグレイン・レザーが雨や雪をはじき、アウトドアを歩くには最適な状態を作り出す逸品なのである。

そのため、現在もこのBean Bootsは、L.L.Beanの人気アイテムの一つとしてロングセラーを続けているのである。

上部はコードで止めてあるフラップをめくると大きな口が出現する。物の出し入れがとてもスムーズだ。

憧れのKELTYのロゴ。

背面にはショルダーハーネスとウェストベルトが付いている。

両サイドに2つずつ、センターに1つ、計5つのポケットがある。

下部のポケットは、フラップを開けずに開けることができ、表面にはストラップを使ってアタッチメントや荷物を括り付けられるレザーパッチが付いている。

このスペースには、ストラップを使って寝袋やマットなどを括り付けることができる。



軽量化されたアルミのチューブラーフレームが背負子のように構成されている。

○ MOUNTAINEER FRAME PACK 3 (KELTY)

フレームザック

ボースカウトでキャンプに行くときに、いつも背負っていたのは、いわゆる帆布を使用したキスリングというリュックサックで、お世辞にも恰好いいものではなかった。横に広いので歩くときにバランスを取るのも難しかったのを記憶している。

そうこうするうちに、日本に紹介されたのが、軽量化されたアルミのチューブラーフレームにナイロンバッグがセットされたフルフレームのバックパックだった。これを見たときには、なんて格好いいんだと、心弾んだものだった。

フルフレームザックの発案者はディック・ケルティだといわれている。彼は1952年、南カリフォルニア・サンバレーにある自宅ガレージでザックメーカーである「KELTY」をスタートし、アルミフレームと格闘し改良を重ね、この年完成させた29個のフレームパックは、世界で初めてのバックパックとなったという。

タイオガと名付けられたケルティのフルフレームザックは、憧れの的だったが、貧乏学生の僕には手が届かず、日本のメーカーのザック



を入手した記憶がある。

今までもケルティは、トレッキング用のフレームパックを製造していて、中でも最もヴィンテージ感を残したモデルが、このMOUNTAINEER FRAME PACK 3だ。収納が上下2つに分かれた2気室構造で、両サイドに2つずつ、センターに1つ、計5つのポケットがあり、収納力抜群だ。

その後、フルフレームザックは、内部にフレームを組み込むインターナルフレームザックへと進化していき、僕もオートバイに括り付けられるインナーフレームのザックを購入した。Lowe alpineという1967年に登山家のグレッグ・ロウとジッフ・ロウ兄弟により米国コロラド州で創業したアウトドアブランドのモノだった。Lowe alpineは今でもザックを製造しており、オスプレー、カリマー、グレゴリー、マムート、ノースフェイスといったトップブランドのザックに肩を並べている。

デイパックを壁のフックなどにかける便利な紐。

「豚鼻」と呼ばれる菱形の革パッチは、本来はピッケルをかけるための紐通しだ。

下層を開けるためのジッパー。

上下二層式になっているのが、特徴。

大抵この部分ブランドロゴが張られている。これはKELTYのデイパック

レザーコンビと呼ばれるその部分は、タウンユースされるようになった際に、教科書などを入れても大丈夫なように補強された部分だ。一説によるとJAN Sportsが発祥だといわれる。

ピッケルの先端をこもループに通し、落ちることのないようループをねじって固定する。

○ Day Pack (KELTY) デイパック

デイパックは、もともとは、ベースキャンプを必要とする長期間の登山の際に、最後に頂上にアタックする際に利用された「アタックザック」が原型といわれ、一日だけの山行や、身軽が必須のロッククライミングの際の最低限必要なものを入れるためのザックとして活用された。

一日の必要なものを入れるためのザックということで、デイパックという名前が付けられたわけだ。涙の形を模したティアドロップ型のデイパックが定番といえるだろう。

デイパックの生みの親は、アメリカのアウトドアブランド「ケルティー」だといわれる。高校時代の憧れは、このケルティーのデイパックだった。まだ、マジソンスクエアバッグ全盛時代にあって、カリフォルニア大学バークレー校の学生がデイパックを背負っている姿を雑誌で見かけたときには、なんて格好いいんだと思ったものだった。

仲間以外ではデイパックを誰も背負っていない時代、教科書を入れたデイパックで通学するのが、ひそかな自慢だった。

デイパックの有名ブランドといえば、ケルティーのほかにもいろいろあった。たとえば、NORTH FACE、L.L.BEAN、EASTPACK、JAN Sports、GREGORYなどが有名だ。日本でも、モンベルやスノーピーク、フォックスファイヤー、ワイルドグーズなどというブランドが流行っていたものだった。

あれから30年たつ現在も、ケルティーを始め、各メーカーのデイパックは健在で、昔よりも多様なデイパックが巷にあふれている。デイパックを背負っていても、「リュックサック背負って何処へ行くの？」などと聞かれることも皆無で、すでに一般的なファッションに同化しているのを見ると、隔世の感を否めない。でも、それはとても嬉しいことだった。

出勤途中、スーツの上にカーキ色のマウンテンパーカーを着てデイパックを背負ってるサラリーマンを見かけると、うらやましく感じる。流石に昔みたいなデイパックを背負うことはできないけれど、そんな気分が味わいたくて、数年前から僕も通勤時には皮のザックを背負っている。

アウトドアでは、至る所で手袋が必要で、そんなときには、皮製の手袋が最高にフィットする。

使えば使うほど、手になじみフィット感が向上するのがうれしい。

二重に補強されているので、オートバイのグリップを握っても強度は抜群だ。



熱いBBQ網を持ってもOKな皮製だ。

アメリカ産牛皮革（ケブラ）なので、ソフトで柔らかい。



○ GLOVES Basic Model (GRIP SWANY) 皮手袋

キャンプをするときには、皮の手袋が必須だ。例えば、スチール製の取っ手のパーコレーターやBBQ用の焼き網、ダッジオープンを移動したり火起こしや焚き火などをするとき、素手でというわけにはいかないわけで、それなりの手袋が一式あるととても便利なのだ。

バイクツーリングに出るときには、オートバイ用のグローブが必須なのは言うまでもないが、バイクツーリング兼キャンプの際には、どうせならそれらが兼用できてしまうととても便利なのだ。

そこで、僕らがいつも使っていたのは、実は工事現場などで使用する作業着やヘルメットを売っている店（例えばワークマンのような店）で買った、作業用の皮手袋だった。

そういう店で売っている皮手袋は、溶接とかにも使える頑丈で、それでいて手にフィットする柔らかいものが多く、何よりも価格が安いのが嬉しかった。これがあれば、オートバイに乗る時やキャンプの時に百人力だった。革製の手袋なので、使えば使うほど、手にフィットして

くるのもいい感じだった。

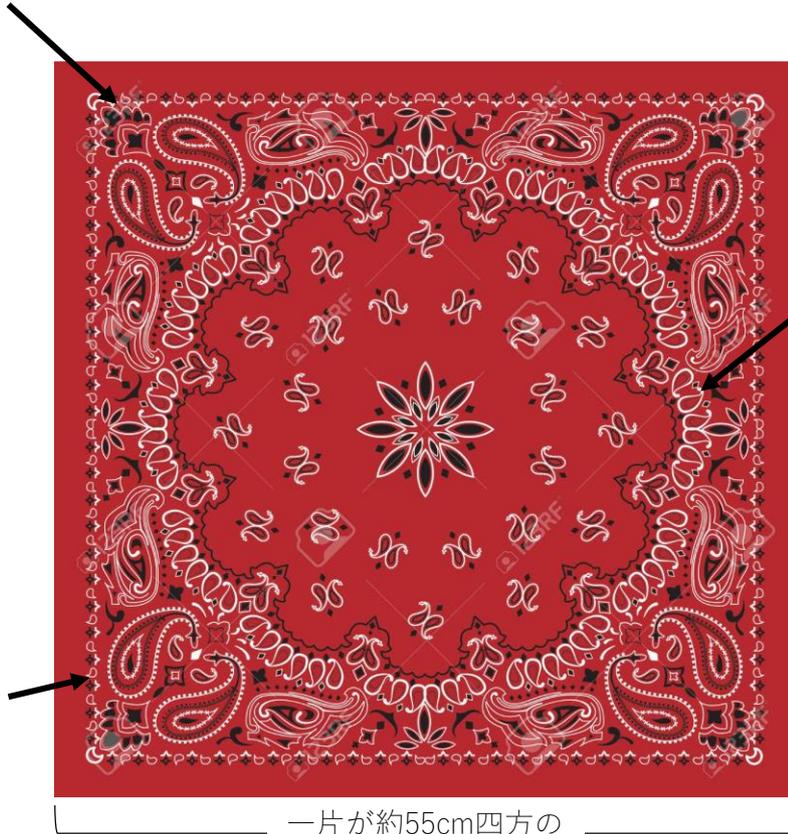
いまでも、おそらく同じような店にいけばそんな手袋が入手できるだろう。あるいは、Oregonian Camper、CAPTAIN STAG、snow peakといったアウトドアメーカーで、キャンプグローブとかファイヤークラブといった名前の手袋を販売しているので、そういうのを選ぶ手もある。

いまやそれなりにいいものを丁寧に長く使いたいと思うことが多くなってきたので、僕としてはGRIP SWANYの手袋を使いたい。

GRIP SWANYは、1848年にゴールドラッシュで一攫千金を狙う採掘者向けのバッファローズキンのグローブメーカーとして誕生し、その後、改良を重ね黄色に染めた牛革手袋を世界中に送り出してきた。日本には1983年に持ち込まれ、1985年には日本人向けに改良されたイエローカラーのGRIPS WANYグローブが国内生産され、アウトドアシーンを牽引していくことになったという。

上等な皮とハイテクな縫い糸を利用したGRIP SWANYの手袋は、一生モノの逸品だといえよう。

大きめのコットンの一枚布であるため、様々な用途に用いることが出来る、とても便利なアイテムだ。外遊びする際に一枚持っているとなんとも便利。



ヒンディー語の絞り染めを意味する「バンドゥヌ」(Bandhnu) が語源。

バンダナにはペイズリー柄がプリントされているものが多い。19世紀にイギリスのペイズリー市でこの柄の織物が量産されるようになり、模様は生産地の名前を取った「ペイズリー」と呼ばれるようになった。

一片が約55cm四方の四角い布だ

○ Paisley Bandannas (HAV-A-HANK) バンダナ



バンダナを一枚持っている、外で遊ぶときには、とっても便利だった。ハンカチの替わりになるのはもちろん、頭にかぶったり、ネックチーフの替わりにしたり、あるいは紐の替わりに何か結ぶ時にも使えるし、時には、バンダナで包んだ珈琲豆を、石で叩いて挽くなんてことに使えたりもした。

バンダナとは、一般的には、絞り染めや更紗模様で染めた木綿のカーチフ（頭にかぶる布）のことだ。ペイズリー模様が人気で、僕もさまざまな色のペイズリー柄のバンダナを持っていた。

バンダナという言葉はヒンディー語の絞り染めを意味する「バンドゥヌ」(Bandhnu)が語源だそう。主に米国の開拓時代に利用されるようになった布切れだが、この時代はイギリスのインド支配時代でもあり、そんなところから、ヒンディー語がつかわれるようになったのかもしれない。

開拓者や労働者が首に巻いたり汗を拭く用途で用いられたのがバンダナで、当時はインド

などから輸入された安い綿布を1ヤード（90cm）四方に切ったものを使っていたというから、相当大的なものだったらしい。今でいうところのストールみたいなものだったのかもしれない。現在は大体55cm四方ぐらいの大きさだろうか。

1970年代になると日本でもミュージシャンが使ったり、バックパッキングの一アイテムとして次第に知名度が上がり、ぼくも大学時代によく首に巻いたり、ジーンズの後ろポケットに、ポケットの深さの分だけ前にたらしたりして愛用していた物だった。

そんなバンダナは、HAV-A-HANK (ハブアハंक)というブランドが有名だ。1947年に米国South Carolinaで創業された「CAROLINA (カロライナ社)」のレーベルで、元々はアメリカ軍にハンカチを販売したことから始まり、多くのブランドが生産を海外に移す中、今もMADE IN U.S.Aを残す貴重なバンダナメーカーだ。創業70年の長い歴史で培われた、確かな品質と米国最大のシェア率を誇っている。このサイトを見るとバンダナを買ってみようかと思ったりする。

野山でキャンプをする

アウトドアライフというと、まず思い浮かぶのが“キャンプ”だ。どこかに出かけて野外で天幕を張って寝ることは、とても楽しかった。バックパックにテントを背負って歩いたり、オートバイや車にテントを積んで出かけたり、様々な形で僕らはキャンプを楽しんだ。

そんなキャンプにも必要なアイテムがあれこれ存在する。35年ぐらい前に僕らが使っていた基本的なアイテムは、実はこんなに時間がたった今でも、基本のコンセプトは大きくは変わっていない。勿論新素材が使われたりハイテク化したりして、すっかり進化を遂げているものの中にはあるのだけれど、野外で過ごし、寝て、料理をする行動には違いがないからだろう。

僕らが愛した多くのキャンプグッズあるいはその後継アイテムを、ここではひっぱり出してきて眺めてみることにする。



ポールをテントの四隅に設置し、テントをポールに吊り下げるだけで自立する、とっても建てやすいテントだ。

すっぽりとかぶせるグランドシートが別に用意されており、雨や夜露からテントを守ってくれる。

素材は通気性のよいナイロン100%。

比較的大きな入り口はテントの出入りがとても楽

2人がゆったり過ごせる居住性の良い空間



○ Half Moon III (SIERRA DESIGNS) テント

何はともあれ、キャンプをする場合は、テントが必要だ。ボーイスカウト時代は、2本のポールを基軸に、四角い布をかけロープとペグで止める、ウィンパー・テントと呼ばれる、いわゆる三角屋根のテントが主流だったのだが、米国の建築学者バックミンスター・フラーが、建築工学を駆使し、1975年にノース・フェイスと開発したオーバル・インテンションという名前のジオデシック・ドームテントは、当時衝撃的なものだった。その発想は、その後のドーム型テント開発にも様々な応用された。そのため僕が大学に入るころには、ドーム型テントと呼ばれるものがすっかり主流になりつつあった。

X字に組んだ数本のフレームの末端を床の四隅に固定し、フレームの復元力で本体を張り立たせる自立式であるドーム型テントが主流になり、僕らでも手が出せるような値段のテントへと一般化していったのは、嬉しいことだった。

当時のドームテントは、テントの屋根部分に作られたベルト通しのような部分に、フレームを差し込んでいくタイプが一般的だった。ただ、

これだとフレームとテントの接合部分から雨漏りがするというデメリットがあった。そんな欠点を補ったのが、1971年にダンロップが開発した「カラコルム・テント」だった。布地の本体部分をフレームに吊り下げるユニークな方式だ。その方式を採用し、さらに軽量化したテントが、僕がずっと使い続けたシェラデザインのハーフドームだった。

青と白のさわやかなデザインに、シェラデザインのロゴのついた本体は、グランドシートとともに小さな袋に納まるし、軽量の折り畳み式フレーム（フレームの中にはゴム紐が通され、フレームがバラバラにならない仕組みになっていた。）と数本のペグもとってもコンパクトに収納できるので、オートバイに各種道具を積んでも、このテントは余裕で持参できたし、高原や森の中でも、一人で簡単に建てることのできる、本当に優れたもののテントだった。

家族が増えた過程で、コールマンのタフワイドドームⅣに乗り換えたが、いまだに我が納戸にはこのテントが非常用として保管されている。

六角形のタープ本体は、UV効果や防水効果のあるポリエステルタフタが利用されている。

ポールを固定するために、地面にペグをハンマーで差し込み、そこにロープを張る。できれば両サイドで同時に作業をすると、タープがゆがまず綺麗に張れる。

タープの向きは、風向きや居住性を考えて工夫する。



1.91mの高さのあるスチール製のポールは二股に分かれて安定を確保する仕組みだ。

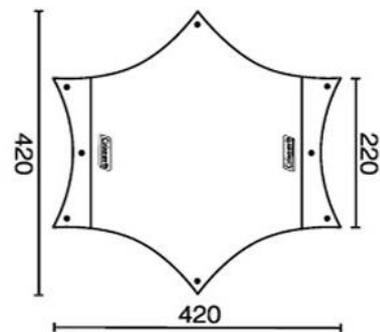
タープの片側も基本は地面にロープで固定するが、時と場合によっては、車などに結びつけ、高く持ち上げて利用することも可能だ。

○ XP Hexa Tarp S (Coleman) タープ

もし、車でキャンプに出掛けることができるのであれば、是非用意したいのがタープだ。何故なら、キャンプ場にいわゆるリビングとかダイニングを作ることができるからだ。

タープは、日差し・雨を防ぐための広い布のこと。布の形状が四角形のスクエア型や六角形のヘキサゴン型またはヘキサウイング型があるが、主流はヘキサゴンタイプ。僕がずっとつかってきたコールマンのXPヘキサタープもこの形に属する。

タープの原理は、ウィンパー・テントとほぼ同じ。二本のポールにタープ本体をかけ、ポールとタープをそれぞれロープで地面につないで固定する。自立型のタープもあるが、やはり空間を広く利用するには、この形のタープがおすすめだ。ただし、一人では立てるのに苦労するので、数人以上の賑やかなオートキャンプに向いているだろう。こうして、テントの近くにタープを立て、そこにアウトドア用のテーブルと椅子を並べれば、自然の中にリビングやダイニングを作れるというわけだ。



タープを広げるとこんな風に六角形になる。

タープもロゴス、スノーピーク、モンベルなど、様々なメーカーから出されていて、それぞれ特徴がある。カラフルなもの、形状を工夫したものなど、各種各様。でも、僕としては、この武骨なコールマンのヘキサタープが好みだ。

ただ、最近はタープも進化していて、焚火の上に張れるテンマクデザイン(tent-Mark DESIGNS)の焚き火タープコットンヘキサなんていうのがあるらしい。ちょっと注目だ。

#3は、ダウンハガー900の中でも、保温性と軽量性を併せ持ち、快適性も極めたフラッグシップモデル。夏の高山から冬の低山キャンプまで一年を通して使えるトータルバランスに優れたモデルだ

900FPという高品質なダウンが使用されており、保温性抜群で、軽さも保持している優れたもの。重量が494gというのはとても嬉しい。



生地には、ナイロン糸高度な技術で織り上げた強度の強いバリスティックエアライト®が使われ、ポルカテックス®という撥水加工が施されている。

手足を上下左右に伸ばした時に、生地が「伸びる」スリーピングバッグ。特許のスーパースパイラルストレッチシステムが採用されている。

○ Down Hugger900 #3 (mont-bell) スリーピングバッグ

野外で夜を明かすには、寝袋は必須だ。以前はドイツ語のシュラフという言葉が一般的だったが、最近はスリーピングバッグという英語で専ら呼ばれている。

僕がボーイスカウトで使っていた寝袋は、レクタングラー型と呼ばれる四角い封筒のようなもの。重くかさばるものだった。高校時代になってあちこち山遊びをするようになって、各種のアウトドアカタログなどを見るようになった時、僕が一番欲しかったのが、ジャンSPORTのプラスベッドというシリーズの寝袋だった。単色の寝袋が全盛だった時代、JAN SPORTの寝袋はなんと4色というカラフルさ。ただ、これは内部に使われているダウンの質が良くないと専門家からは酷評されたようだった。

結局入手したのが、天山という日本のブランドのダウンのスリーピングバッグで、マミー型と呼ばれる今では主流の寝袋だった。マミーとはミイラを意味するMummy (マミー) に由来しているとおり、体の形に合わせた形状をしていて、とても寝やすく暖かった。



僕が使っていた天山ブランドの寝袋のロゴ。2008年頃には廃業してしまったのが残念。

いまや寝袋で人気なのは、モンベル、ナンガ、イスカ、ロゴスといった国産メーカー。他にはコールマンやノースフェイス、マーモット、マウンテンハードウエアなどが有名どころか。寝袋は中綿に「化繊」か「ダウン」が使われているが、僕としてはやはり軽さとコンパクトさ重視のダウンがお勧めで、防水性能や保温性も重視したい。モンベルのダウンハガー900 #3は、そんな条件を完璧にクリアしているハイエンドなスリーピングバッグだ。

収納サイズは
23×10cmで、登山
用のザックにも手軽
に収納可能なのが嬉
しい。

重量は長さ183セン
チのレギュラーサイ
ズで430グラムとと
ても軽量だ。

素材はリップ HTと
いうナイロンが使わ
れている。耐水性・
保温性に優れている
のが特徴だ。

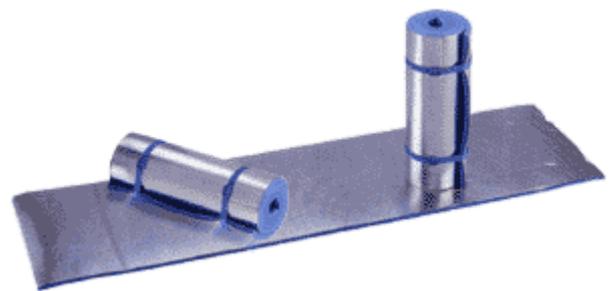
内部に保温性を高め
る2枚のサーマキャ
プチャーと呼ばれる
反射板がマット層に
使われていて、地面
からの冷えを遮断す
ると共に、体温を反
射してくれるので、
ダブルの効果で暖か
さが確保できる。

バルブから空気を入
れる。ミディアムポ
ンプサックという専
用の空気入れがある
ので、2分もあれば
空気を入れることが
できる。

○ NEOAIR™ XTHERM™ (Therm-a-rest) テント用マット

テントを張るのは、そこで寝るためなのだが、テントにシュラフ（寝袋）だけというのは、どうも寝にくい。芝生やふかふかの土の上にテントを張れば別だけれど、毎回そういうわけにはいかない。日中、アウトドアで様々な遊びをして疲れた体を、ちゃんと休ませてあげるには、睡眠もそれなりの環境で取りたいと思うのは必然だ。

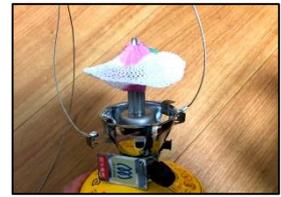
そこで、登場するのが、シュラフの下に敷くマットレスだ。テントの床部分はグラウンドシートと呼ばれる防水布が敷かれることになるのだが、それでも湿気や冷気が上がってくるので、マットレスはインシュレーター（断熱材）の役割が求められる。そこで、僕らが外遊びしていた時に専ら使っていたのが、片面にアルミホイルがコーティングされた銀マットと呼ばれるエンソライトマットだった。いわゆる発砲ポリウレタン製なので、くるくると丸めて持ち歩ける軽くて保温性のあるマットだ。オートバイでも山歩きでも手軽に持ち歩ける優れたものだった。



僕らが使っていたエンソライ
トマットレス。

時代もあれから30年。今では手軽に持ち歩ける、もっと寝心地の良いマットレスがあれこれ登場しているようだ。先日アウトドア用品の店で見つけて、もし今度キャンプするならば是非欲しいと思ったのが、1980年代にシアトルで有名になったアウトドア用エアマットメーカーのサーマレストが発売しているNEOAIR™ XTHERM™ だ。とてもコンパクトに持ち運びできるうえに、寝心地が抜群で、保温性も申し分ない。

すりガラスのホヤが、優しい光を作ってくれる。

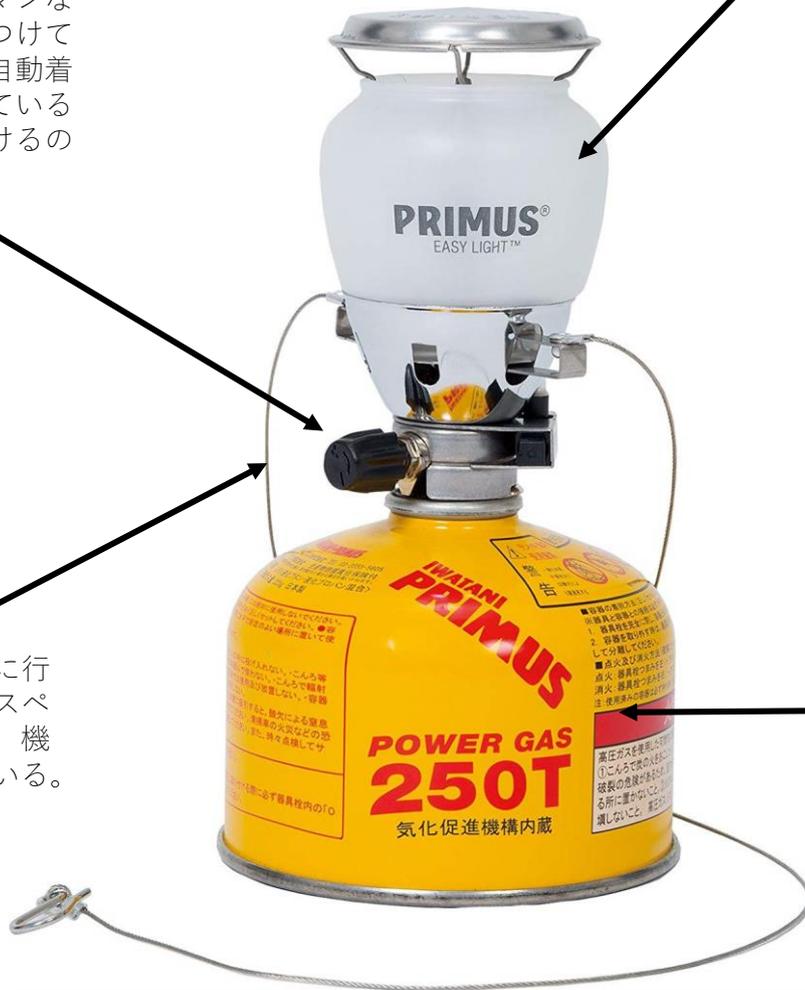


ホヤを外し繊維のマントルを装着したところ。これをあらかじめ燃やして灰にしておく。

液体になったガスが封入されたガスカートリッジ。冬でも使えるように、特殊繊維の内張で気化促進効果の高いハイパワーガスを使う。

昔はチャッカマンなど外から火をつけてたが、いまや自動着火機能を備えているので、火をつけるのは簡単だ。

吊り下げが簡単に行えるワイヤーサスペンダーを採用し、機能性を向上している。



○ PRIMUS 2245 Lanthanum (IWATANI PRIMUS) キャンプ用ランタン

キャンプに行くと、一番最初にやることは薪を集めることだった。キャンプにおける焚火の位置づけは、僕らにとってはとても重要なことで、焚火をしないキャンプなど考えられないくらいだった。だから、夜は大抵焚火さえあれば過ごすことができたのだが、それでも夕食を作ったり食べる時には、焚火以外の光も必要なので、その際に活躍するのが、ガスランタンだった。

もちろんキャンドルライトや電池のヘッドライトもいろんな場面で登場はしたのだが、キャンプでもっとも利用したのは、スウェーデンのプリムスが発売していた「プリムス2220」というランタンだった。

このランタンは、外側に擦りガラスのホヤがあり、中のマントルがガスの光で発光する仕組みだ。マントルは、硝酸トリウムと硝酸セリウムが含まれた綿素材で作られていて、使う時には空焚きをして繊維部分を燃やし、これらの混合物を酸化させるのだが、これに火をつけると白く発光する仕組みになっている。



愛用していたPRIMUS2220

初期の2220は、黄色いプラスチックケースの中にCB缶といわれる縦長のガス缶を入れ、ランタンのヘッド部分を装着したものだ。マントルが崩れやすく、ガラスのホヤも割れやすかったため、数年の間になんとか買い換えた記憶がある。

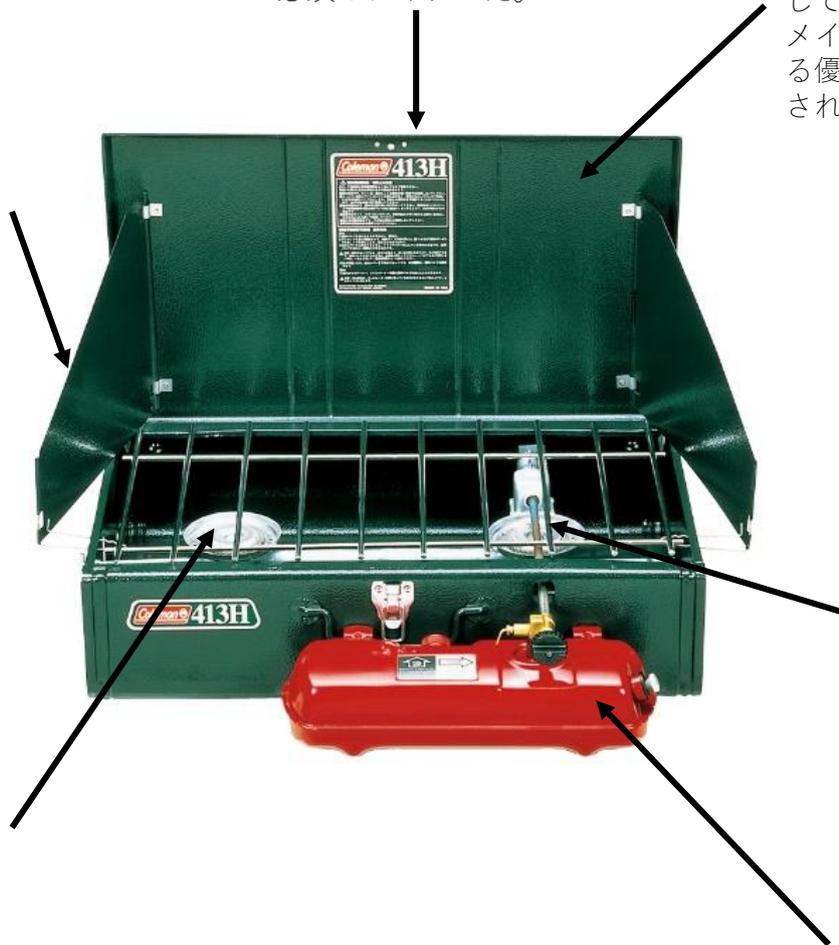
現在は、プリムスと統合したイワタニから、この2220の後継機種である2245が発売されている。あちこち改造され使い勝手が良くなっているようだが、基本的な構造は、以前のまなのが、何とも懐かしい。

料理を
する。

蓋の内側に収納された風よけは、コンロの横部分を覆うことができるので、多少の風であれば全く問題なく料理をすることができます。

折りたたんで収納すると、アタッシュケース程度にコンパクトな大きさとなる。オートキャンプには必須のアイテムだ。

蓋を縦て、コンロとして利用する際に、メインの風よけになる優れた機能が具備されている。



補助コンロ。メインコンロよりも若干火力が弱いので、煮込み料理などに利用する。

メインコンロ。結構な火力を確保できるので、煮たり焼いたり、普通に料理ができるのがとっても嬉しい。

ホワイトガソリンのタンク。ポンプがついていて、ホワイトガソリンを圧縮することで、火力を強くする。

○ LIQUID FUEL STOVE (Colman) ツバーナー

僕は高校を卒業した17歳の3月に自動車免許を取得したので、大学時代には車で野外に出ることも多かった。オートバイや徒歩のキャンプに比べると、格段に収納できるキャンプ道具の数が増え、快適なキャンプができるようになったのだが、オートキャンプの時の一番の違いは、料理道具が充実したことはないだろうか。

あとで登場するコンパクトなストーブにくらべ、大きなコンロを持ち出すことができるので、料理のレパートリーが格段に増えるわけだ。アウトドア仲間には、料理の上手なやつもいて、僕らのキャンプに参加すると「フレンチ風の料理が食べられるらしい」と話題にもなった。

多くのオートキャンパーがそうであるように、そんなとき僕らがいつも愛用していたのが、コールマンのツバーナーだった。

コールマンは1901年、W.C.Colemanにより、ランプのレンタル会社として米国オクラホマ州で起業された。1920年代に自動車の普及に伴い、世界で最初のオートキャンプブームが到来し、コールマンは、キャンプ道具全般について取り



海外限定の425は、日本で一般的な413Hよりもやや小ぶりだが、外見はほぼ同じ。

扱うようになったという。日本には1976年に進出し、アウトドアが大好きな若者の間でも名前が知られるようになった。ツバーナーは、コールマンが1923年に「キャンプストーブ」として燃焼器具を二つ並べた製品を発売したのが元祖だ。

ツバーナーの最大の利点は、コンロが二つあり、それぞれで火加減の調整ができることだ。それにより、鍋とフライパンを同時に利用でき、料理時間を圧倒的に短くすることができた。

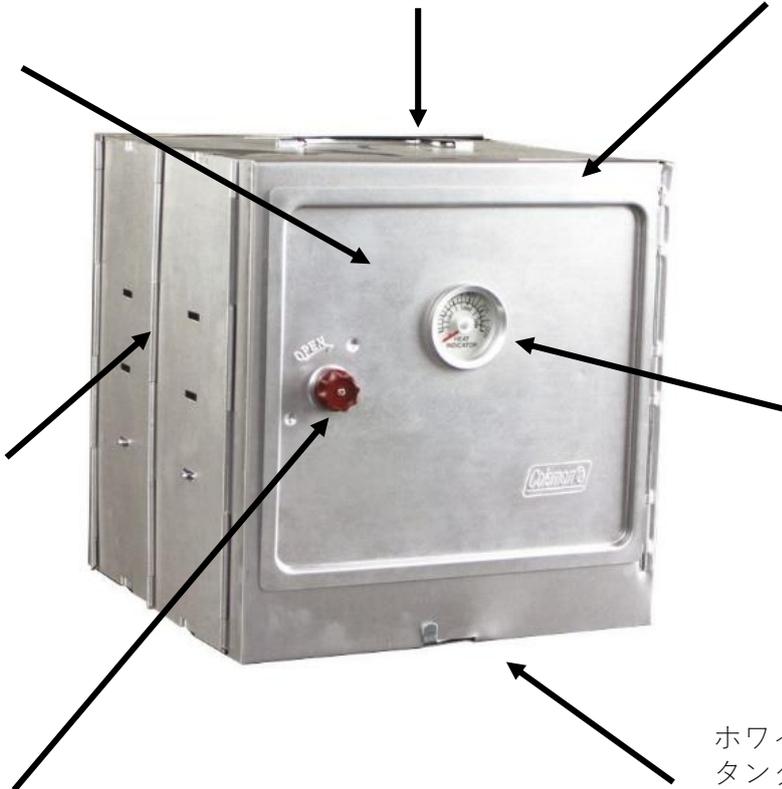
初期の頃は本体の厚みがかなりあったが、改良が重ねられ、今では当時と比べるとその厚みが薄くなった。車で運ぶとはいえ、少しでも荷物を軽くしたいのはキャンプの命題。流石コールマン、その点がよくわかっている。

スチール製の網が2つ付属しているの、オープンの中は、2段に仕切ることができる。温度の調節を考えながら、高さ調整ができるのが便利だ。

天板には取っ手が付いているので、コンロから降ろすのに便利だ。

スチール製のボディーは、頑丈で、しっかり温度を上げてくれる構造になっている。

折りたためるので、野外に持ち出すのがとっても楽なのが嬉しい。



扉部分には温度計が設置されているので、これを目安に、ツバーナーで温度調整をする。

樹脂製のドアノブは、本体が熱くても扉を開けることができる。

ホワイトガソリンのタンク。ポンプがついていて、ホワイトガソリンを圧縮することで、火力を強くする。

○ Oven II (Colman) キャンプ用オーブン

キャンプだって、いろいろと料理を楽しみたい。そこで、ツバーナーにぴったりのアウトドア用のオーブンも買った。見た目武骨なスチール製のオーブンなのだが、実はこれがかなりの優れモノだった。

まず、胴体の半分から蛇腹式に折りたためるので、持ち運びには便利だ。そして、組み立てもわずか数秒。温度計と扉が付いた金属製の箱をツバーナーの上に置き、バーナーに火をつけるだけという、構造的にはいたってシンプル。

扉の温度計は、若干不安定だし、中の温度も下が長く上が低いので、若干の慣れが必要だが、神経質に温度調節が必要というものでなければ、段を変えたり火力を変えたり、あるいは扉を開けて焼き具合を確認すればOK。

キャンプに行った時に、一番利用できるのはピザを焼くこと。本当は生地をこねて、具材を乗せてちゃんと焼けばいいのだろうけれど、面倒なら、キャンプ場へ行く途中、スーパーやコンビニなどで食材を仕入れるときに、冷凍のピザを買っておけば、このオーブンで焼けるわけ



だ。焼きたてのピザをキャンプで食べられるというのは、かなり嬉しい。

気になっていた内部の温度も、ツバーナーなら、250度までは確実にあがる。シェラカップに水を入れて、オーブンの一番下の段に置いておけば、スチームオーブ的な使い方もできるわけだ。

残念なのが、この手の簡易アイテムの宿命だが、エッジ処理がやや雑なので、組み立て途中などで、指や手を切らないように注意した方が良くもされない(経験者は語る)。

これ、スモーカー(燻製器)としても使えるのでは?と思ったら、現在発売されている扉の赤いオーブンは、キャンピングオーブンスモーカーという名前になっていた。なるほどね。

大ききの違う鍋が二つ用意されている。大きい方なら、インスタントラーメンもOKだ。

全体をコンパクトに一つにまとめることができるセットなので、機動性にも優れている。

熱伝導率の低いチタン素材なので、直火で料理に利用できる。取っ手が付いているので、料理しそのまま器としても利用できる。

小さい鍋はスープ用とか珈琲のカップとしても利用できるし、場合によっては、そのまま食器としても利用できる。



こちらにもフライパン代わりになるが、むしろ、おしんこやおかずを並べる皿として使える。

これは大きな鍋の蓋なのだが、目玉焼きやちょっとした野菜炒めなどでもできるフライパンとして活用可能だ。

○ Titanium personal cooker set (snow peak)

キャンプ用調理器具

オートキャンプなら、自宅の鍋やフライパンをそのままキャンプ場へ持ち込むことができるのだが、バックパッキングやオートバイでキャンプをするときは、コンパクトな調理器具が必要だ。

カブスカウト時代にはアルミの食器セットを持っていたが、鍋やフライパンは別に用意される場合が多かったので、調理用具としてではなく、複数のアルミの器が一つにまとめられ、コンパクトに持ち歩きできる食器アイテムとして利用していた。

しかし、バックパッキング、オートバイ、あるいはクロスカントリースキーなどの野遊びをする場合は、鍋やフライパンとして使えるアルミ製のコンパクトなクッカーセットが必要となった。

社会人になって、アウトドアグッズにもお金をかけることができるようになると、アルミ製より丈夫でちゃんと料理のできる器具が欲しくなる。そこで、シェラカップなどで使われるようになったチタンという素材のものに目が向く。

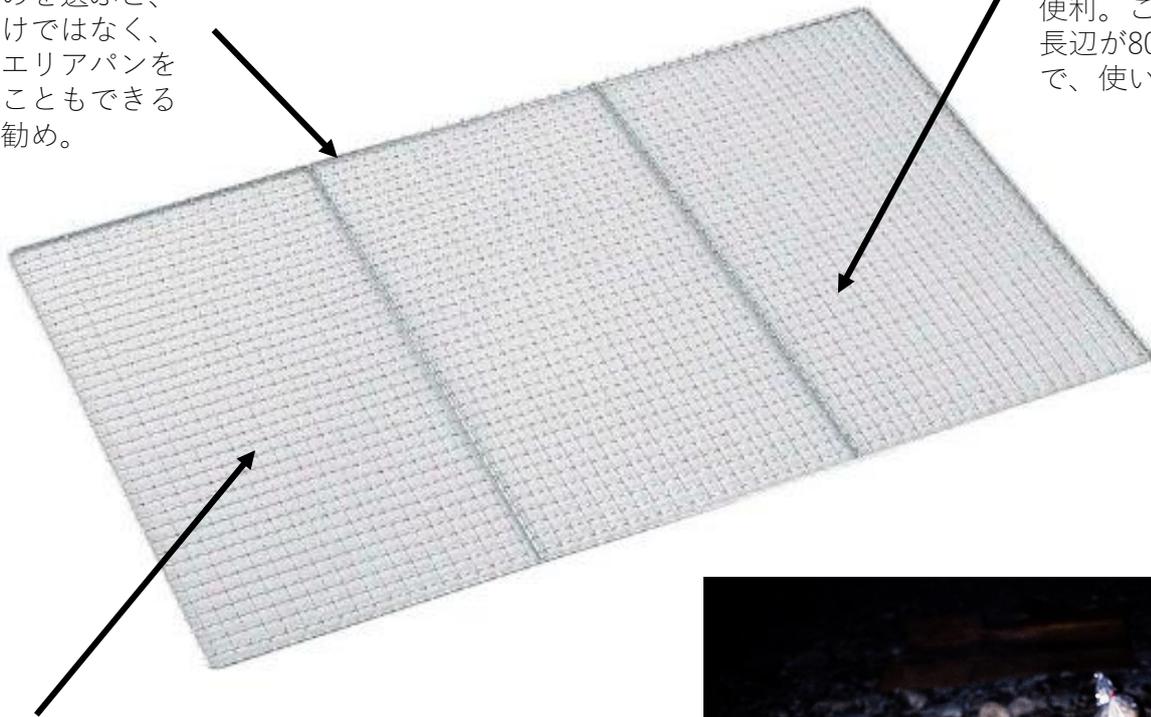
当時いい感じのチタン製のクッカーセットを発売しているメーカーとしては、1958年創業のスノーピークがあった。スノーピークは新潟県燕三条でオリジナルの登山用品などを手掛けていたが、1986年からキャンピングセットの分野を改革すべくこの世界に参入した。ファミリーキャンプという切り口で、今でもこの分野を牽引している日本の一流メーカーだ。

スノーピークのチタンの調理器具は、軽量で、強度もあり、耐食性にも優れている。金属臭もなく熱伝導率が低いのでカップなどにも採用されている素材だ。燕三条の職人の手で開発されただけあって、おもちゃのようなキャンプ道具ではなく、実に実践向け、フィールドで使っても全く違和感がなく、それでいてお洒落な物だった。

僕が買ったのは、今でも販売されているチタンパーソナルクッカーセット。鍋が2つにフライパンとしても使える蓋が2つ。これらがコンパクトにセットされたアイテムだった。食器としても使えるので、オートバイでキャンプに行く際の主力の調理器具になったのは言うまでもない。

フレームがしっかりしたものを選ぶと、食物だけではなく、鍋やパエリアパンを乗せることもできるのでお勧め。

焚火の四隅に大きな石を置いて、この網をかぶせるだけで、コンロができるので、大きめの網があると便利。このBBQ網は、長辺が80cmあるので、使い勝手が良い。



小さい網目のモノが、各種いろいろなものを焼けるので便利。



○ Gravy BBQ Gridiron #2 (CAPTAIN STAG) BBQ用焼き網

オートキャンプをする場合、必ず持って行く
と便利なのが焼き網だ。炭火を起こす場合も、
焚火を起こす場合も、そこで調理をしようとす
る場合、必ず使うのが焼き網である。

なにもちゃんとしたBBQコンロが無くても、
この焼き網さえあれば、周りを石で囲んだ、あ
るいは四方に大きな石を並べただけの即席のか
まどの上に、この焼き網を乗せるだけで、立派
なグリルになるのだ。

焼き網の大きさは、出来れば大きいサイズの
ものを選ぼう。肉や野菜を焼くだけではなく、
その傍らに鍋を置くこともできるし、パエリア
パンで料理する場合も、この網の上に乗せて料
理すると、安定感も増していい感じなのである。

この焼き網は、ホームセンターなどで安く売
られているもので十分。炭や薪を使うと、網の
裏に煤がかなり付くし、肉の油も付着するから、
丁寧に洗わないとすぐ使えなくなる。鉄製のモ
ノが多いので、錆も湧く。そうなると、数回で
買い換える羽目になるのだ。

ただし、どんな焼き網でもいいかというと、

多少のこだわりを持っていたい。

まずは、先に述べたように大きめの網だとい
うこと。長辺が60cm以上あるのが望ましい。そし
て網目が細かい物が良い。細かい網目だと、食材
を直接置いても網目からこぼれ落ちることはない。

更にフレームが頑丈であること。簡易なかまど
に網をかぶせたとき、鍋などを置くことが出来る
ので、とても便利なのである。

僕がお薦めするものは、1976年にバーベ
キュー用コンロを開発・発売開始したCAPTAIN
STAGのグレービー・バーベキュー・アミの2号だ。
80cm×50cmの大きさがあり、フレームもしっか
りしている。

もともとはパール金属のブランドだった
CAPTAIN STAGは、BBQに焦点を絞ったアウトド
アグッズブランドとして知られているが、2012
年にパール金属から分社化しブランド名が社名と
なった。40年以上BBQにこだわった会社だけあ
って、その製品は十分に信頼できるものだった。

炭火や焚火で焼いた肉や野菜はとても美味しい
ので、是非この焼き網は入手しよう。

パエリアレシピ

有頭えび…5尾、白身魚（切り身）…小1枚、あさり（砂抜き済）…15～16個、いか…小1パイ分、玉ねぎ…1/6個、にんじん…3cm大程度、セロリ…8cm程度、にんにく…2片、塩…小さじ1/2、トマト缶（ホール）…1/2カップ、サフラン…10本、オリーブ油…1/4カップ（50ml）、米…1合 レモン、イタリアンパセリ…お好みで、水…600cc

魚介は食べやすいサイズに、玉ねぎ、にんじん、セロリ、にんにくはみじん切りに。ホールトマト缶のトマトはつぶしておく。いかに焦げ目がつくまで中火で焼き、野菜を加えて玉ねぎが透明になるまで炒る。そこにホールトマトを入れ煮詰め、水と有頭えび、あさり、白身魚、水、塩、サフランを入れて強火で煮る。ひと煮立ちしたら魚介を取り出しておく。フライパンに米をサラサラとふり入れ、最初の5分は強火で炊き、残り12分は弱火で炊き上げ、強火に戻しておこげを作る。最後に取り出した魚介をフライパンに戻して、レモンとイタリアンパセリをのせたら完成。

キャンプの人数にもよるが、多少大きめのものを持っていると、大人数に対応できるので便利だ。

用途はパエリアだけでなく、さまざまに使えるのが嬉しい。朝の食卓の目玉焼きから、焼きそばやお好み焼きまで作れてしまう優れもの。

厚みのあるしっかりしたパエリアパンは、丁寧に扱えばかなり長く使えるのがありがたい。



Paella Pan (WAHEI FREIZ)

パエリアパン

キャンプに行くとあれこれ料理を作りたくなるものだが、手軽に、でもキャンプらしく見た目も豪華で、しかもみんなでワイワイとたべられるメニューがうれしい。そうすると、候補として上がる料理の中に、必ずパエリアが登場する。

そこで、パエリアパンを一つ持っている、パエリアはもちろんのこと、それ以外の料理にも使えてとっても便利なのである。

パエリアパンは大きさはいろいろあるが、ファミリーキャンプだったら30cm程度のパエリアパンが適当ではないか。あまり大きいとツーバーナーに収まらないし、持ち運ぶのも料理するのも大変だ。もちろん、最初から炭火あるいは焚火専用で使うのだというのであれば、60cmぐらいの大き目のパエリアパンでもOK。

取扱いが粗雑になり、煤などで汚れてしまう野外での使用を考えれば、安い物を選ぶということでも十分だけれど、美味しい料理を作りたいし、キャンプのあとはきちんと手入れをして自宅でも使うというのであれば、それなりのも



スペインEL CID社製のパエリアパン

のを購入することも十分ありだと思う。

僕が長年使っているのは、新潟の燕三条発祥の和平フレイズという調理用具メーカーのもの。造りがしっかりしているので、多少粗雑に扱ってもOKだ。

アウトドアでもお洒落にちゃんと料理したいという方には、スペインの家庭やレストランで最も愛用されているEL CID社製のパエリアパンがおすすめだ。最初は銀色だが、使っていると家庭でも黒くなる。でも、エンボス加工が施されているから、焦げ付きにくく、おいしいパエリアが出来上がること間違いなしだ。



○ Traveler (VICTORINOX) スイスアーミーナイフ

バックパッキングのときも、オートバイツーリングのときも、ポケットに潜ませておくと便利なのが、スイスアーミーナイフだ。一つのナイフに様々な用途の器具が装着されているもので、種類によって装備されている道具が異なるが、1880年にスイスで創業されスイスアーミーナイフの代名詞といわれるビクトリノックス社のナイフは、通常のみディアム・マルチツールだけでも77種類も用意されている。僕が昔いつも持ち歩いていたのは、大小二つのナイフブレードに、栓抜き、マイナスドライバーなどが装備された「リクルート」というモデルだった。

昔もいまも、スイスアーミーナイフの定番といえば、トラベラーだろう。僕が使っていた物よりも、いくつか機能がプラスされているので、バックパッキングやキャンプ等に出る場合、トラベラーは何かと役に立つはずだ。僕の場合はワインは飲まないのだから、コルク栓抜きは不要なのだが、それに代わってプラスドライバーが付いたモデルもあるので、自分に合ったものをさがすとよいだろう。



VICTORINOXのアウトドアクッキングナイフ

ただし、あくまでも軽量装備の山歩きやオートバイツーリングの際に、缶の蓋を開けるとか、野菜を切るとかの用途には使えるが、本格的な料理をする際のクッキングナイフ（包丁）としてはいささか役不足であるのも事実である。

そこで、オートキャンプなどの時におすすめなのが、同じくビクトリノックスから現在発売されている「アウトドアクッキングナイフ」だ。ブレードの長さ15cmは、家庭用包丁とされる包丁よりも小ぶりのサイズだが、野菜、肉、小魚など一般的な食材の調理には十分なサイズだ。

珈琲を
淹れる

五徳部分は、外側にも向くので、多少大きめの鍋でも乗せることが可能だ。

燃料タンクからノズルに燃料を送るつまみ。これにより、火力を調整できる。

蓋はそのまま火にかけるので、一杯分の紅茶を沸かすことが可能だ。

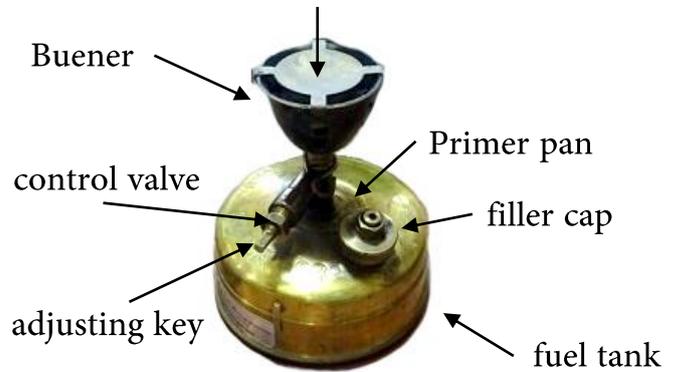
外側がフードで覆われており、これは取り外しが可能だ。

取っ手は取り外しができ、本体のフードの内側に収めることが可能だ。

補助コンロ。メインコンロよりも若干火力が弱いので、煮込み料理などに利用する。



Flame spreader



フードの内側はこんな感じ。

○ SVEA 123R (OPTIMUS) コンパクトストーブ

高校時代、一番欲しかったアウトドアグッズは何かというと、もちろん、スベア123Rだった。このコンパクトストーブは、1955年に製造開始されてから現在に至るまで、60年以上たった今でも現役で、1970年代にバックパッキングに嵌った人間にとっては、まさに三種の神器的な存在だったといえるだろう。キャンプに行くときには、必ず一人一台持参し、珈琲を沸したり、レトルトのカレーを調理したものだ。

ソリッドブラスの本体は使い込むほどに独特の風合いを増し、永く愛用すればするほど愛着の湧く逸品である。

スベアブランドは、スウェーデンのカール・ナイバグによって1880年代後半に家庭用の灯油キッチンストーブとして開発されたが、その後1969年にOPTIMUS (オプティマス) 社が買い取り、液体燃料を利用した強力で高い信頼を誇る登山用ストーブとして改良製造したものが元祖なのだという。

本体の下部が燃料タンクになっており、そこにホワイトガソリンを注入し、タンク上部に設

けられたプライマーパン (primer pan) に注いだ少量の燃料に着火して燃料タンクを予熱し加圧する。adjusting keyを回し、control valveを開き、マッチやライターで火をつけると、ジェットエンジンのような音を立てて、バーナーに火が付くのだ。このジェット音のような咆哮が、スベアの最大の特徴だったかもしれない。

一度山梨の四尾連湖で、年越しキャンプをした時には、あまりにも寒くてスベアに火が付かず、焚火で温めようと、K君が燃え始めた薪の火を大きくするためにホワイトガソリンを注いだ瞬間、ホワイトガソリンの容器まで火が伝わり、それを振り回したため、危うく一面が火の海になりそうになったという逸話もある。

ホワイトガソリンを圧縮し、噴出させるためのポンプが付いているので、強い火力が得られる。

ホワイトガソリンを満タンにしておけば、結構な時間利用できるので、とても便利だ。

燃料ケーブルは曲げることができるので、いろいろな場所で使うことができる。

五徳部分を折りたたみ出来るので、本体はとてもコンパクトになるため、バックパッキングには最適だ。

このままだとむき出しだが、同梱でアルミの風よけが付いている。

○ WHISPER LITE™ (MSR) コンパクトストーブ

スベアの最大の欠点は、寒いところでは火力が弱いということだった。実は重さもそれなりにあり、出来ればもう少し軽いストーブがあるといいなと思っていた。確か社会人になった翌年のことだと思うが、山と渓谷社から発行されていた『Outdoor』という雑誌にMSRのウイスペーライトが登場したのではなかっただろうか。その写真を見たとき、かなり愕然としたのを覚えている。何しろ、バーナーヘッドに3組のワイヤーフレーム、ひとヒネリされたジェネレーターチューブが、ボトルのポンプにつながっているだけなのだから。

しかし、これはツーリングにもバックパッキングにもとっても効果を発揮することはすぐに分かった。なにしろ軽量だ。装備は軽い方がいいに決まっている。いままで、ホワイトガソリンのボトルを別に持参したが、その必要もない。社会人になっていた僕がこのストーブに飛びつかないわけはなかった。

記録によると、MSR社は、1969年にクライミング用品の安全性と信頼性を研究するために、

ラリー・ペンバーシーが創設した会社だ。1984年に軽量バックパッキングストーブの代名詞となるウイスペーライトを発売したということなので、僕の記憶は間違っていなかったことになる。

ウイスペーライトは、燃料ボトル部分にポンプが付いているので、あらかじめ20回ほどポンピングしてからバルブを開けて、燃料を少量噴き出させ、一旦バルブを閉じて、バーナーのガソリンに点火しプレヒートする。ジェネレーターチューブに熱が伝わると、中のガソリンが噴き出して来て炎を上げるので、この炎が収まった頃にバルブを開けて全開にする。スベアに比べるとかなり静かな音で、より強い火力が得られるのは、とても素晴らしい。

あれから35年、今では、プリムス、ソト、オプティマスなどから類似のガソリンバーナーが発売されているが、いまだにこのウイスペーライト（他の燃料を使えるインターナショナルなどのバリエーションも追加されている）は、しっかり現役の座を確保するだけでなく、ガソリンストーブの先端を走っているのである。

湯が沸騰すると、ここの部分にコーヒーがぼこぼこと跳ね上がる。透明なガラスなので、その様子が楽しく見れる。

取っ手は樹脂製のものも多いが、snow peakのモノは、スチール製なので、手袋が必須だ。

注ぎ口が細いので、パーコレーターの中身を装着せず、湯だけ沸し、ペーパーフィルターで珈琲を淹れるのにも適している。



頑丈なステンレス製なので、直火にかけても全く問題ない。

パーコレーターの内側には、このような容器が装着され、サイフォンのように珈琲を淹れることができるようになっている。。

○ PERCOLATOR (snow peak)

パーコレーター

パーコレーターは、珈琲沸しだ。中にサイフォンの原理を応用した器具を装着し、挽いた豆を入れておけば、湯が沸けば珈琲も湧くという優れもの。バックパッキングやオートバイツーリング、はたまた、オートキャンプでも役立つ必須アイテムだ。

僕らが野遊びを頻繁にしていた頃は、1900年代前半に創業したアメリカを代表するアルミ製の調理用具製造メーカーmirro社のパーコレーターが定番だった。アルミ製のショックメーカーのモノなので、ザックに潜ませておくと、結構ぼこぼこに変形したりしたものだ。

残念ながら、mirroのパーコレーターは廃盤になってしまい、いまではオークションに出ているぐらいで、アウトドアメーカーのものは、ほとんどステンレス仕様のパーコレーターに変わってしまった。ちなみにキャプテンスタッグがmirroのパーコレーターの形状や機能をライセンス取得し、ステンレスで製造しているのだという。なるほど、そういえば昔懐かしい形をしている。



定番だったmirro社のパーコレーターだ。アルミ製で、胴体がへこんでいたりする。

ただ、どうせ珈琲を沸かす道具として利用するのなら、パーコレーターのサイフォン機能を使うよりも、湯を沸かす道具として利用し、キャンプの現場でも、ハンドドリップの美味しいコーヒーを楽しみたい。であるのなら、いま僕が勧めたいのは、snow peakのパーコレーターだ。ボディーに設置された取っ手が金属製ではあるのだが、注ぎ口の形状やデザインが秀逸で、眺めているだけでいい感じの逸品なのである。

シェラクラブの会員向けに作られたオリジナルのカップであることを表示しているロゴマーク。現在は違うデザインになっている。

淵が膨らんでいるので暑い飲み物も口を付けることができる。



頑丈なステンレス製なので、直火にかけても全く問題ない。

取っ手の先端が曲がっているので、ベルトやザックに引っ掛けることができる。

○ SIERRA CUP (Sierra Club)

シェラカップ

ボーイスカウト時代には、あちこちを歩き回るオリエンテーリングを何度も経験した。今というデイバックのような小ぶりのリュックサックに、ちょっとした荷物（風よけのウインドブレーカーや、夜食代わりにチョコレートと水筒など）を積めて、夜通し歩くナイトハイクも体験した。キャンプに行けば食器のセット、ハイクの時は水筒を持って歩いたのだけれど、コップと食器を別々に持って歩くのは、なんだか面倒臭いなあと思っていた。

高校生と一緒に遊ぶ友人たちが出来、アウトドアライフをするようになった時に、一番最初買ったのが、食器にもコップにもなる「シェラカップ」だった。

軽くて持ち運びが便利で、火に直接かけて鍋代わりに使えるし、コップのように飲み物を注いで飲むことも可能な、この優れたもののカップは、米国の自然保護団体「シェラクラブ」が会員向けに配ったアイテムだった。シェラクラブは、自然保護の父と呼ばれるジョン・ミューアにより1892年5月28日にカリフォルニア州

サンフランシスコ市で創設された。

シェラカップはステンレス製のカップで、実際に考案したのはジョン・ミューアではなく、W.E. コルビーという会長だったといわれている。会員向けに作成されたものの、その人気はバックパッカーの間に広まり、市販もされるようになり、いまではアウトドア必須の道具になっている。

ちなみに、ジョン・ミューアは、『自然保護の父』と言われ、ヨセミテ渓谷から端を発する「ジョン・ミューア・トレイル」にも名を残しているナチュラリストだった。彼の偉業については、僕らのアウトドアライフの師匠の一人だった加藤則芳氏の書いた『森の聖者 自然保護の父ジョン・ミューア』に詳しい。

現在でも、このシェラカップはアウトドア用品店で購入可能だ。ただ、当時と違い、真鍮やステンレスだった素材が、チタン製のものにとってかわられている。勿論チタンは軽いので、持ち運びも便利。最近のモノは目盛りもついているので、軽量カップとしても利用でき、用途が広がっているのが嬉しいところだ。



Old 5 は、コクテール堂の定番ブレンドの一つ。100g400円台のリーズナブルなエイジングコーヒーだ。僕はもう30年以上飲み続けている。

フレンチローストなので、黒く光る豆は、とても良い香りがする。

○ OLD 5 BLEND (COCKTAIL-DO)

コクテール堂の珈琲豆

高校時代に喫茶店に入り浸った僕が当時飲んでいたのは、実はコーヒーではなくて紅茶だった。コーヒーの苦みというのが当時は今一つなじみず、トワイニングのダージリンばかり飲んでた。大学時代、八ヶ岳の美味しい湧き水で友達が淹れてくれた焙煎の深いコーヒーを飲んで、その美味しさにすっかり魅せられたのだった。それまでコーヒーには砂糖とミルクは必須だった僕が、それ以降不思議とコーヒーはブラックメインになっていったのだから、何がきっかけで人生が変わるかわからない（ちょっと大げさ）。

それからというもの、当時通い詰めていた町田のカフェ・グレで出されていたコクテール堂のOLD5ブレンドを好んで飲むようになった。OLD5ブレンドは、まるやかさの中にコクと透明感のある甘く芳醇なコーヒーするために、わざわざ山梨県韮崎市の生豆熟成倉庫で十数か月エイジングさせた豆を、深煎りのフレンチローストにしたブレンドコーヒーだ。

当時僕が住んでいた町田には、コクテール堂の豆を販売する小さな店があり、そこで買ってはキャンプやツーリングに持って行って、森の中で芳醇なコーヒーの香りを楽しんだものだ。町田の店が無くなった後は、カフェグレで購入したり、虎ノ門の本店に時々足を伸ばしたりもした。

とにかくコーヒーの持つ独特の酸味が苦手なので、アフリカ系の豆は敬遠しがちになる。唯一アフリカモカ系のコーヒーで僕が美味しいと思ったのは、NIFTY SERVEで知り合った、現在コーヒー商社“石光商事”の社長をしている石脇智広さんが、当時東大大学院の研究室で自らその場で焙煎して淹れてくれたイルガチャフェのみだ。だからマンデリン、ブラジル、コロンビアなどに手を出すことになるのだが、その場合も浅煎りよりも深煎り。極端にいうとフレンチローストが好みだった。

幸い、近隣の橋本（神奈川県相模原市）にコクテール堂があるので、まさに直球ストレートのど真ん中の深煎りコーヒー、OLD 5ブレンドを現在でも堪能しているのである。

さまざまなハーブティーやフルーツティーが発売されているが、これはフルーツティーをのアソートボックスだ。

各種フルーツをミックスしたMixed Fruit

リンゴと各種フルーツのApple & Fruit



ラズベリーとバニラのHot Love

ストロベリーとチェリーのSweet Kiss

○ Herb & Fruit Tea (POMPADOUR)

ハーブティ

キャンプやツーリングに持参する紅茶は、なんといってもトワイニングのダーズリンが多かったのだけれど、片岡義男氏の『コーヒーもう一杯』や『彼らと愉快地に過ごす』といった本の中に、ハーブティーが登場したのを読んで、時々だけれどハーブティーを忍ばせて行ったことがあった。

当時ハーブティーというと原宿の「生活の木」でブレンドしたものを買うとか、紅茶専門店にわざわざ出向いて探したりしないと、入手が難しかった。唯一、紀ノ国屋とかの高級スーパーで、ティーバッグのハーブティーが売られていたのを記憶している。

ハーブティーといえは、やはり一番に名前が上がるのはポンパドールのモノではないだろうか。片岡義男氏も『彼らと愉快地に過ごす』の中で、「ポンパドールのものがもっとも美しいように僕は思う。」と書いている。この本で片岡氏が掲げているポンパドールのハーブティーは、その後あちこちのスーパーなどで見かけるようになった。最近はパッケージデザインなども随

分変わってしまったのだけれど。しかし、美味しさという面では、当時と何ら変わりない。

ポンパドールはPOMPADOURと記載するのだけれど、ドイツのティーメーカー、ティーカネン社のティーブランドだ。ティーカネン社のお茶は、TEEKANNEブランド（1882年発売）とPOMPADOURブランド（1913年発売）の二つあったようだが、日本ではポンパドールブランドが圧倒的に知られている。現在日本では、TEEKANNEは社名としてパッケージにその名前が記載されていて、ポンパドールのブランド名は、外箱に記載されている。

様々なハーブやフルーツの茶がポンパドールから発売されているが、僕としては、オーソドックスなミントティーやカモミールティーに加え、ルイボス、レモンバーベナ、ペパーミント、カモミール、フェネル、その他の厳選ハーブをブレンドした、味わい豊かで香り溢れるトラディショナルミックスか、レモンやリコリスをブレンドし生姜の味わいでスパイシーに仕上げたジンジャー&レモンがお勧めだ。

野山で遊ぶ

アウトドアライフの基盤をなすのは、やはり「野山で遊ぶ」ということではないかと思う。従来のように、“釣りに行く”とか“登山をする”というのではなく、野山にでて、様々な遊びを楽しんでしまうことこそ、アウトドアライフの醍醐味なのである。

そこには、様々な具体的な“遊び”がある。それは雪の中を歩くことだったり、スキーを楽しむことだったり、あるいはキャンプをしながら星空を愉しむことだって含まれる。オートバイに乗って温泉を巡り、途中気に入ったクレークでフライフィッシングなんてことももちろんあるわけで、およそ野外で楽しむ遊びは、僕たちにとって楽しい時間を満喫するための手段だったのだ。

ここでは、そんな遊びのカテゴリーごとに、遊びのためのツールのあれこれを紹介してみることにする。



雪で遊ぶ

フェルトインナー
ブーツがすっぽりと
仕込まれているので、
とても暖かい。

太目の網揚げ紐は手
袋をしていても閉め
やすく、金具でしっ
かりとホールドされ
ている。

外側がフードで覆わ
れており、これは取
り外しが可能だ。

SOREL CARIBOUの
ロゴがいい感じ。

アウターはラバーな
ので、完全防水に
なっている。

ラバーソールで、
しっかりとした溝も
刻まれており、足元
を確保。スリップも
しないので、雪道も
ザクザクと歩ける。



○ CARIBOU(SOREL) スノーブーツ

雪の中で遊ぶ。それはとても幸せなことだ。真っ青な空の下、広いすそ野を持った大きな山の麓の緩斜面や林道などをぶらぶら散歩するだけで、気分はとっても晴れやかになる。

雪の中での楽しみは、沢山ある。動物の足跡を追いかけるアニマルトラッキングや、バードウォッチング。時にはスノーキャンプをしたり、クロスカントリースキーなどもできてしまう。

そんな雪道を楽しむためには、レイヤーシステムで着こなししたアウトドアウェアに加え、雪道を歩けるスノーブーツは必須だ。

僕らがアウトドアに嵌っていた時に、雪靴だったらこれしかない！というブランドがあった。それがソレルだった。おそらく今でもスノーブーツといえば、ソレルが代名詞になっているのではないかな。1970年代後半から80年代前半には、ソレルは、雪遊び大好き人間たちの憧れだったといっても過言ではなかった。折しもバブル真っ只中のあの時代、僕らはディスコなどに行く代わりに、ソレルのブーツを手に入れて、森へと向かったのだった。



ソレルは1962年にカナダで誕生したブーツの専門店。世界に先駆けてレザーアッパーにラバーボトム、着脱可能なフェルトライニングという革新的なコンビネーションのウインターブーツを発表した。そして1972年には、このコンビネーションを採用したソレルの代表モデルCARIBOU（カリブー）が誕生したのだった。

雑誌でこの靴を見たとき、「こんな暖かそうなブーツだったら雪道もへっちゃらだろうな」と思ったものだった。そしてこれは買うしかないという衝動にかられたわけだ。手元に届いたカリブーは、雑誌で見たとおり、ぶ厚いサーモプラスフェルトインナーブーツが、革のアウターの中に装着されており、さらにL.L.BEANのビーンブーツのようにラバーシェルがつま先部分を覆っていた。一度履くと雪道はこれしかないという完璧なブーツだった。我が家の靴箱には、いまだ現役でカリブーが収納されているのは言うまでもない。

シェルを持たずベルトのみで締め込む非常に軽量のストラップ・バイディング・バイディング。

裏側には、焼き入れたスチールを使用した、耐久性・グリップ力のあるテーパードスチール・ツイントラクトウ克蘭ボン（靴前方のアイゼン）を採用。

耐久性が高く、軽量性・柔軟性にも優れていて、雪が付着しにくいいため歩きやすく、冬の低温下での使用に最適な素材、ナイテックスを使用したデッキが装着されている。

後部のテールを滑らせるように歩行ができ、自然な歩幅でストレスがあかからず、更に雪の跳ね上げも少なく快適な歩行を実現するライトライド・サスペンションを使用。

裏面後部にはヒールクリートと呼ばれる、さまざまな地形を走破する安定性とけん引力のある克蘭ボン（アイゼン）が用意されている。

スノーシューのテールをV字形状にすることで、足運びを自然に保ち、深雪でもまっすぐ進みやすくなる。

RENDEZVOUS 25 (ATLAS) スノーシュー



たとえば、南八ヶ岳の麓の天女山の森や、北八ヶ岳の坪庭あたりの雪野原を歩くときに、いつもスノーシューを借りたものだった。カントリースキーで歩くのも良いのだけれど、ハイキング気分ですくには、平地走行用のスノーシューが最高に楽だった。

当時のスノーシューは、木製のもので、革製のビンディングで靴を固定するものだった。いわゆる日本の「かんじき」や「わかん」みたいなものだったが、スノーシューの方が、なんとなく舶来品的なデザインで、格好よかった。登山で使う「わかん」はもっと小型で、急な山道には向いているけれど、小さい分浮力が弱いので、膝ぐらいまで雪に埋もれることもあった。一方、スノーシューは総面積が大きい分、雪に沈みにくくて、平地だと歩きやすい。

もともとスノーシューは、カナダの原住民が狩りなどに使っていた物が原型だといわれており、木枠に皮のガットを張ったものだった。カナダの伝統的なスノーシューにはいくつかの型がある。地域の環境に合わせて違う形が発達し

したらしい。たとえば、藪が多く、雪の深い地域に住む人たちのスノーシューは、円い“うちわ”タイプだ。体重を分散させ、ふかふかとした雪に身体が沈むのを防ぐ。しかし、幅が広いだけに、これを履くと、脚を大きく開いて「ガニ股」になってしまう。そのため、長い距離は歩きづらい。一方で、比較的開けた土地に住む人たちは、細長くて、前後の端が尖った紡錘形タイプを愛用した。長距離を楽に移動できるが、長いだけに、茂みが多いところで向きを変えようとするのが厄介だ。そしてその後一般的になったのは、水滴型。後ろに突き出た部分があるので、安定し、長距離を歩ける。また、前が丸いので藪での方向転換も楽だ。

現在のスノーシューも、ほぼこれが進化したものだといえるだろう。僕が八ヶ岳で遊んだスノーシューは、まさにそんなプリイティブでトラディショナルなものだったが、今では、まるでスキーかスノボかというぐらい進化をとげ、機能性も向上している。

かかと部分は固定されていないので、走りやすい。

ワンタッチでシューズの脱着ができるビンディングは、大幅に改善されている。

今のクロスカントリースキーの板は、まるでレース用のようなデザインだが、これは、ツーリング用の板。

中央部分のソールには、うろこ状の滑り止めが施されている。

昔の細かったクロスカントリースキー板よりも、若干横幅が広がっている。



○ SUPERLITE CROWN EF (FISCHER)

クロスカントリースキー

クロスカントリースキーを初めて履いたのは、八ヶ岳山麓の甲斐大泉にあったペンション・ドンキーハウスでのことだった。

ドンキーハウスのランドクルーザーに乗せてもらい、仲間たちと天女山の林道まで行き、そこで、交代にクロスカントリースキーを履いてしばし雪野原を思う存分楽しんだ。

アルペンスキーは10歳からやっていたし、社会人になってからも毎シーズン奥志賀高原をベースに、あちこち出かけて滑りまくっていたのだが、クロスカントリースキーはまるで別物だった。踵が上がるという不安定さで方向転換一つとっても、最初はなかなかうまくいかず、坂を上げるのも一苦労だった。しかし、このスキーの面白さは、アルペンスキーとは異なり、自然とのんびり戯れることができる点にあった。

一般的なクロスカントリースキーの板には、裏面の中央部分にうろこ状の突起物が並んでいて、そこをうまく雪に接地させて坂を上げる仕掛けだった。ただし、その突起物のせいで、下りはあまりスピードが出なかった。競技用のクロ

スカントリースキーは、そのデメリットをカバーするためにワックスで対応する。スキーは弓の

ようにしなっているので、普段雪に接地している部分には、前方向に滑るグリッドワックスを、踏ん張った時に接地する足の真下部分には、後ろ方向にストップをかけるグリップワックスを塗ることになる。そんなワックスがけが必要な面倒くさいクロスカントリースキーの板に憧れ、僕が入手したのは、フィッシャーという有名なスキーマーカーの競技用クロスカントリースキーの板だった。一度だけ、そのスキーを履いて霧ヶ峰の競技大会に出たことがあった。完走したものの次から次へと地元の中学生に抜かれ、すっかりだ。それ以降、大会には出ることは二度となかった。やっぱり雪の原をハイキング気分で気軽に滑るのが僕に向いていた。



ショートスキーは各メーカーから出されているので、好みで選ぶとよいと思う。



板の長さがとても短いので、こぶをこなすのもとっても楽な上に、安定性もあるので、滑りやすい

ビンディングの種類は「クリップタイプビンディング」「セーフティタイプビンディング」の2種類ある。これはセーフティタイプ。

長いスキーよりも幅が広く、安定性が良い。1m以下の長さのものも選択肢に入れよう。



○ SHORT 7+XPRESS 10 (ROSSIGNOL) スキーボード (ファンスキー)

10歳からアルペンスキーを始めたことは前のページに書いたとおりだ。高校までは毎シーズン、長野県志賀高原の一ノ瀬スキー場をベースに、スキーをしていた。大学時代には長さ200cm近いロシニョール板を履いていたこともあったが、社会人になると、もう少し短いオーリンという1981年公開の007シリーズの「ユア・アイズ・オンリー」にも登場するスキーメーカーの板を履くことになる。結構当時は高級スキー板で話題になっていたけれど、高いからというよりも曲がりやすいからという理由で、僕は履いていた気がする。

1990年代になると、カービングという170cmぐらいの短めのスキーが流行り出したのだが、一度これを履いてしまうと、もう長い競技用の板などには乗る気がすっかり失せてしまった。さらに、子供がスキーを始めると、その面倒を見なければならないので、いっそのこと、滑ればいいということで、さらに短いスキーボードに乗り換えてしまったのだった。

スキーボードというのは、長さが極端に短い

スキー板で、スキードダンス用として開発されたものだった。サロモンがスノーブレードという名前の90cmぐらいの長さのショートスキーを1997年に開発・販売を始め、一度試したら、もうこれしかないという感じに快適で、楽にターンが出来るし、子供を遊ばせながら自分も遊ぶにはもってこいのスキー板だった。何しろ短い分、回転が楽にでき、こぶを滑っていても、自分がめっちゃくちゃうまくなったような錯覚に陥るのだ。本来スキーボードはストックを持たないスタイルなのだが、それを無視し、普通のスキーの様に滑るのがとても面白かった。

90年代はまだカービングがメインで、スキーボード (ファンスキーとも呼ばれる) を発売するメーカーがあまり無く、僕はソロモンのスノーブレードに乗っていたのだが、いまや、各種メーカーのスキーボードが売られているのに驚いた。ヘッド (HEAD) の17-18 RAZZLE DAZZLEや、スワロースキーのZUMA(ツマ)など。お勧めは、ROSSIGNOLのSHOT7 + XPRESS10という120cmのスキーボードだ。

これは初期型のデザイン。今はもう少しスポーティー。当時はジムニーと比較してすごく洗練されたイメージだった。

車体の色は紺一色だった。ブリティッシュグリーンとかイエローとか、ジムニーのようにもう少しカラーバリエーションがあると嬉しかったのだが。



ホールドの良いアウトドア仕様のタイヤだが、振動はそれほどなかった。

車高が高いので、雪道もダートもへっちゃらだった。

4WDは、スタッドレスを履けば、大抵の雪道も難なく踏破する。

○ ESCUDO (SUZUKI) 4WD 自家用車

社会人になってすぐオフロード用のオートバイを購入した僕は、2年乗った後、別のオートバイに乗り換えた。さらに、社会人5年目ぐらいで初めて自家用車を買うことにした。当時は、時代がバブルに突入していた時期で、景気も良く、社会人5年目の僕でも、身の丈にあった車なら買うことが出来た。その時の選択肢は、もちろん四駆だった。

アウトドアライフをメインにしていると、どうしても山道、雪道を走る機会が多いので、四駆は必須だった。しかし、当時憧れていたトヨタのランドクルーザーとか日産のサファリなどは到底買えない。一方、ジムニーという小型で可愛い四駆や日産のダットサントラック4WDなどが選択肢としてあって、あれこれ悩んでいるときにスズキからエスクードというクロスカントリーセダンが発売になったので、思わず勢いでそれを買ってしまったのだった。

エスクードは、小型ながら本格クロスカントリー車としての機能を持ち、市街地や高速道路での走行性も高めた乗用車としても使えるSUV

の先駆けだった。

大型の4WDは、燃費や乗り心地を無視しているのに対し、エスクードは従来の四輪駆動車並みの強固なラダーフレームを採用しつつも、パートタイム式四輪駆動や、2速の副変速機を備えるなど、より日常遣いに配慮したパッケージングを確保していたのだ。

4WDの車高の高い車は、遊ぶのにはとても良かった。雪道が全く怖くなく、スキーやスノーキャンプにも威力を発した。

エスクードはその後5ドアのノマドが発売され、マイナーチェンジが何度か行われたが、2005年（平成17年）にフルモデルチェンジされ、今では見た目も別の車になってしまっているのが残念だ。



川や湖で遊ぶ

黒丸のハッチは、組み立て時のフレームのはめ込みや、パッキング、ウェアや携帯食の出し入れに使用。

キャンプツーリングも可能なボリュームのある船体が特徴



船体は引き裂き強度・体摩擦性にすぐれたリップストップ入りのテトロンターポリンを使用。



デッキラインは、ツーリング時の荷物を固定。ラインを通すループは小物の固定に使用。また、エアチューブは左右に2本のエアチューブを内蔵。船体に張りをもたせると同時に浮力体にもなる。



バケットシートは凹型に立体裁断を施し、背もたれはFRPの芯材とフォーム材を内蔵。フィット感があり、長距離ツーリングでも快適。

430TREK (FUJITA CANOE)

ファルトボート (カヤック)

カヌーに初めて乗ったのは、1983年の秋のことだった。カヌーイストの野田知佑氏の『日本の川を旅する』(1982年発行)を読んで、一度カヌーに乗ってみたいと思った。

そこで、当時千葉の亀山湖をベースにしていた野田氏にオートバイで会いに行ったのだった。たまたま亀山湖でカヌーを浮かべていた野田氏は、まだ日本で浸透していなかったカヌーを広めようとしていたので、僕のようなこの人間かもわからない奴も暖かく迎えてくれて、その場で彼のファルトボートに乗せてくれたのだった。

カヌーというと、通常、ボートのような構造のカナディアンカヌーのことを指し、シングルパドルで漕ぐのが一般的だ。一方で、最近競技カヌーで有名になった一人もしくは二人用の、中にすっぽり人が入るタイプのカヌーをエスキモーカヤックという。そして、そのエスキモーカヤックのうち、折り畳み式のフォールディングカヤックをファルトボートと呼ぶ。大きめのザック程度の大きさの荷物に纏めることが出来、



西湖でカヤック

車のトランクに積んで川や湖に持ち込み組み立てると、全長4メートル前後のカヤックが出来上がる。僕らが遊んでいた頃のカヌーは、木製のフレームがメインで、組み立てたフレームに船体布と呼ばれる袋をかぶせるとカヤックの形になるフジタカヌー製のものだった。

その後、野田氏はすっかり有名になり、カヌー犬ガクとともにBe-Palなどのアウトドア雑誌にしばしば登場するようになるが、僕らはオートバイ、山歩き、雪遊び、焚火など、さまざまに遊びがあったので、カヌーも時々近所の相模川や西湖(富士五湖)で乗るぐらいだった。でも、湖面に近い場所に座り、自力で前に進むカヤックの浮遊感は、なんとも自由で楽しかった。

ヘンウィックのフェラライト・バック・イン・ロッドとかイーグル・クロウのトレール・マスターなどのロッドが憧れだった1980年代初期。渓流では、携行性と釣り場を考え、7ftぐらいのロッドがいい。これは1856年にチャールズ・F・オービスによってバーモント州マンチェスターで創業したORVISのロッド。

三番ロッドには見合うリールやラインの太さなどが自ずと決まってくる。あとは機能性とか見た目とか、そういう自分の好みで道具選びが進む。



大学時代、サンフランシスコのダウンタウンで初めて入ったORVISの店で、すっかり魅せられたBattenkill。ORVISのリールの形状は、芸術的だ。

○ HELIOS 3 FLY ROD & BATTENKILL DISC FLY REEL (ORVIS)

フライフィッシング

フライフィッシングは格好いい。渓流でロッドを自由自在に操り、フライ（毛鉤）を飛ばす姿を見ると、是非あの技は覚えたいと思う。正直にいうと、フライは10回ぐらいしか飛ばしたことがない。自分の思うところにフライを落とすのは至難の業だった。でも、ルアーに比べるとフライは道具も見た目がとってもいい感じなので、物から入るアウトドア青年にとっては、憧れのアウトドアスポーツだった。

フライフィッシングは欧米で古くから行われている釣りの様式だ。昆虫に見立てたフライ（毛鉤）という疑似餌をリールの付いたタックルでキャストし魚を釣る。日本にも伝統的なテンカラ釣りがあるが、リールを使わない点でフライフィッシングとは一線を画す。

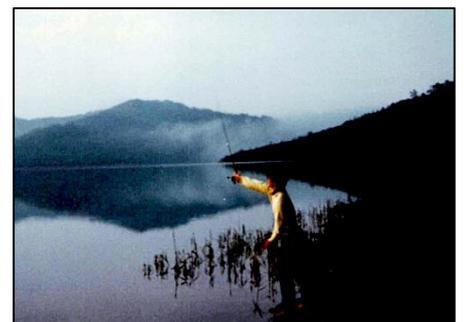
フライフィッシングに必要な基本的なアイテム（釣り用語ではタックルと呼ぶ）はフライフィッシング専用のロッド・リール・ライン・フライの4点。これさえあればすぐに渓流に行くことができる。

軽い毛針を投げられる専用のフライロッドは、

渓流釣りの場合7フィート程度の3番ロッド。当時はヘンウィックのロッドが憧れだった。コンパクトに携帯できるのがいい。

リールは、なんといってもオービスのバテンキルディスクフライリール。改良を重ね、現在も同じ名前で販売されているロングセラーリールだ。

フライフィッシングのフライラインは軽い毛針をキャスティングできるよう太く重さがある。ロッドの番手に合わせて選び、リールに下巻き用のバックラインをある程度巻いた後に、フライラインを巻く。さらに、フライラインは太いので直接フライを結ぶことが困難なため、リーダー、ティベットの順にラインをつなぐことで、フライを結ぶことが出来る。肝心のフライは、ドライフライという水面に浮くタイプウエットフライという水に沈むタイプがある。僕はドライフライが好き。水面に浮く虫を演出し魚を狙うわけだ。

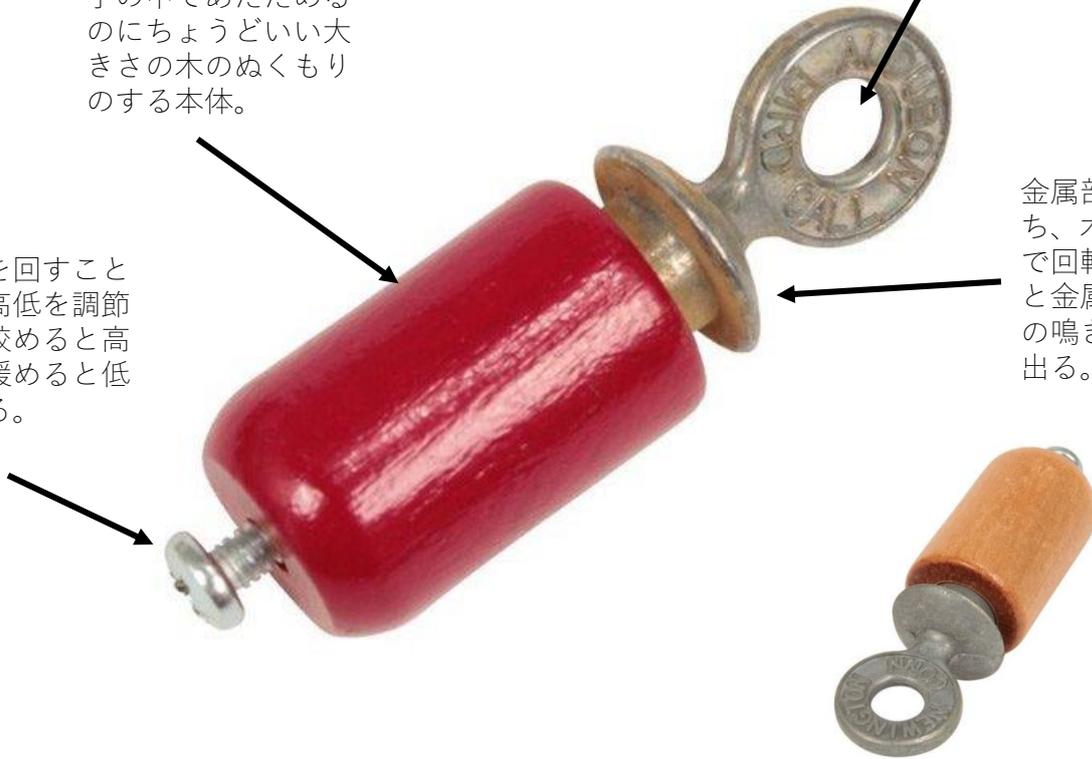


革ひもを通して首からぶら下げることが出来る。

手の中であたためるのにちょうどいい大きさの木のぬくもりのする本体。

このネジを回すことで、音の高低を調節できる。絞めると高い音が、緩めると低い音が出る。

金属部分を左手で持ち、木の部分を右手で回転させると、木と金属がこすれて鳥の鳴き声に似た音が出る。



色の違うバードコール。

○ BARD CALL (AUDOBON)

バードコール

この小さなまるでペンダントヘッドのような木製品は、バードコールと呼ばれるものだ。ボーイスカウトで森遊びをするときに、いつも持っていき、なんとなく鳥と会話しているような気分になったものだ。

最近放映されたテレビドラマ『僕らは奇跡でできている』で、主人公の大学講師相川一樹役の高橋一生が、フィールドワークで学生と森に入り、バードコールを鳴らし鳥と会話する場面を懐かしく見た。

バードコールの構造は簡単だ。どんぐりよりもちょっと大き目の木の筒に金属の金具がはめ込まれていて、金属部分を持って、木筒を回すと、木と金属がこすり合わさり、鳥のさえずりに似た音が発する仕組み。

アメリカでは100年以上も前から狩猟に使われてきたといわれ、アウトドアライフという言葉が日本に入って来たころには、アウトドアショップに必ず並んでいた物だった。発売していたのは1905年発足の米国NYの鳥獣保護団体、「オーデュボン協会」。1940年に全米オーデュ



ボン協会（英語: National Audubon Society）として改組し、現在も活動が続いている。いうなれば米国版野鳥の会といった感じだろうか。

近年ではネイチャー・ゲームのメニューとして、森に出かけて野鳥と会話をする道具等に活用されているらしい。

こんなに小さな木製製品でも、実は案外奥深い。というのも、ただ単に音を鳴らすだけでは鳥は寄ってこない。いかに鳥が鳴いているように音を出せるか。まさに音を鳴らす人のセンスが思いっきりでるわけだ。

赤いもののほかに、木の色そのままのモノや笛のように吹き鳴らすものもあり、ちょっとした森にお出かけするときの御守り兼アクセサリーにもうってつけなのである。

マグネシウム合金を使用し、堅牢性がありながら軽量でスリムなボディで、雪山や水辺などタフなフィールドや、悪天候の状況でもOKなのが嬉しい。

ピント調節つまみ。ある程度目測で調整した後、実際に覗いてピントを合わせよう。

17.8mmとアイレリーフが長いので、眼鏡をかけたままでも見やすく、広い視界が得られる。

対物レンズ。この光景が大きいと、明るくなる。カメラのレンズと同じ。MONARCH 78×42は、対物レンズが42mmと、大口径で明るい優れたもの。



○ MONARCH 78X42 (Nikon) 双眼鏡

森の中をぶらぶら歩いていると、必ずと言っていいほど、動物と出会う。その筆頭が野鳥だ。彼らは小さな体から想像できないほど、大きな声でさえずり、普段都会では耳にしない美しい声を披露してくれる。勿論声を聴くだけで、気分はかなり盛り上がるのだが、野鳥は可愛いので、ついついその姿を目にしたくなるものだ。バードコールで鳥と戯れるときにも、姿をしっかりと見るために、双眼鏡は欠かせない。

バードウォッチング用の双眼鏡として最も優れているのは、8倍から10倍程度の倍率（倍率が高すぎると鳥に焦点を当てるのが厳しくなるので、この程度で十分。）で、なおかつ対物レンズ（目を付ける接眼レンズの逆側にある観察対象物に近いレンズのこと）の大きいものを選ぶのが良い。カメラのレンズと同じで、対物レンズが大きければ大きいほど光がたくさん入ってくるため（だから明るいレンズを大口径レンズと呼ぶのだ）、明るく見えるようになる。

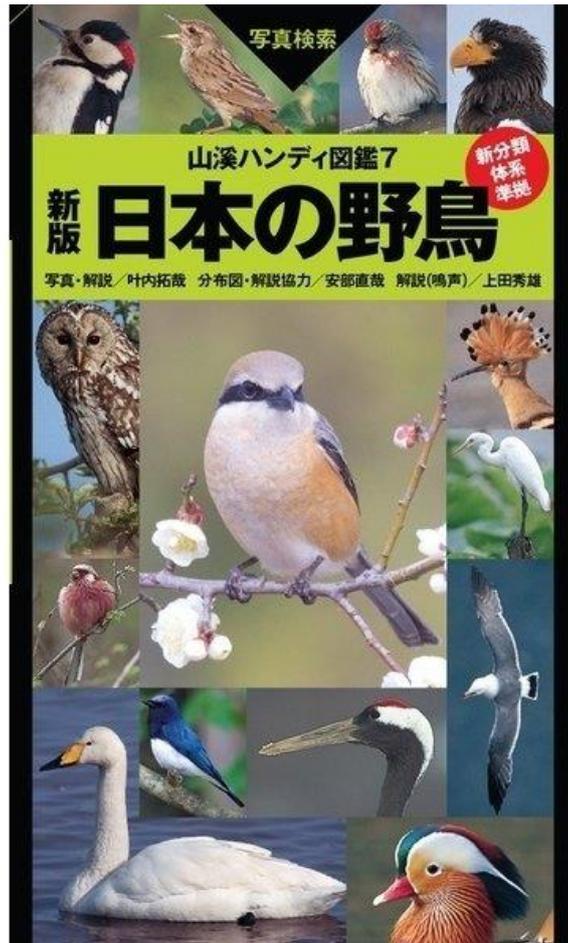
ただ、注意点もあって、対物レンズが大きくなると双眼鏡自体の重さも増えてしまう。だか

ら携行に便利な大口径の双眼鏡というのがアウトドアラيفに欠かせない。

僕は昔からNikon派なので、『遊歩大全』に掲載されていたNikonの双眼鏡が欲しかったのだけれど、貧乏な学生だった時代には、それを入手することが出来なかった。社会人になってあれこれ買えるようになった時に、コンパクトで口径の大きなNikon 8×40D CFという優れたものの双眼鏡を購入した。対物レンズの大きさは20mmから40mm程度のもので明るくて良いので、とっても明るい双眼鏡だった。これを持って会社の山岳部（とは名ばかりのハイキング部）の上高地や奥日光散策などに参加したものだ。

残念ながらこれは廃盤になってしまったが、それを上回る優れたものの低価格な双眼鏡が幾つも発売されている。今一番気になるのが、希望小売価格は10万円越えなのだが、実際にはその半額程度で入手できるNikon MONARCH HG 8x42という双眼鏡だ。8倍の倍率は十分な機能を持っているし、何しろ42口径という大口径でありながら軽量コンパクトという本当に優れたものなのである。

写真を多用しているところがとても分かりやすい。



持ち運びに便利なハンディー図鑑。その場でぱっと、何の鳥かを調べるのにとっても便利だ。

2011年12月に発行された第1版を改訂した新版で、2016年の発行。

○ WILD BIRD GUIDE OF JAPAN (Yama-kei Publishers)

日本の野鳥 (野鳥図鑑)

森を歩くと、野鳥に出会う。声のする方にビノキュラー（双眼鏡）を向けて探してみる。レンズの中に見たことのない鳥が写ると、なんだかドキドキワクワクするのだ。

だけれど、そこで終わらせたらもったいない。実際にいま目の前にいる鳥は何なのだろうか？名前は何？なんの仲間？などという情報とともに、頭にインプットしたいのだ。

そこで登場するのが、持ち歩き可能な野鳥図鑑。僕が愛用していたのは、日本野鳥の会から出版されていた『フィールドガイド 日本の野鳥』というガイドブックだった。392ページの小さな本の中には、様々な野鳥の情報が満載だった。

ただ、イラストの水準がまちまちで、レベルの低いものがあるのが今一だ。イラストを全て同一人物（谷口氏）にしていたら、この図鑑の魅力はさらにアップするはずだ。2015年版も発売されているのだが、今僕が買うとしたら、迷わず手に取るのが、山と溪谷社から出ている『日本の野鳥』だ。

日本のフィールドでの識別に役立つよう、雄と雌、成鳥と幼鳥、夏羽と冬羽といった、種により羽の色が異なる特徴をより分かりやすい写真で紹介した野鳥識別図鑑だ。約520種掲載されていて、かなり充実している。

1種類の野鳥に対して写真数が多いので、鳥の特定がやりやすい。

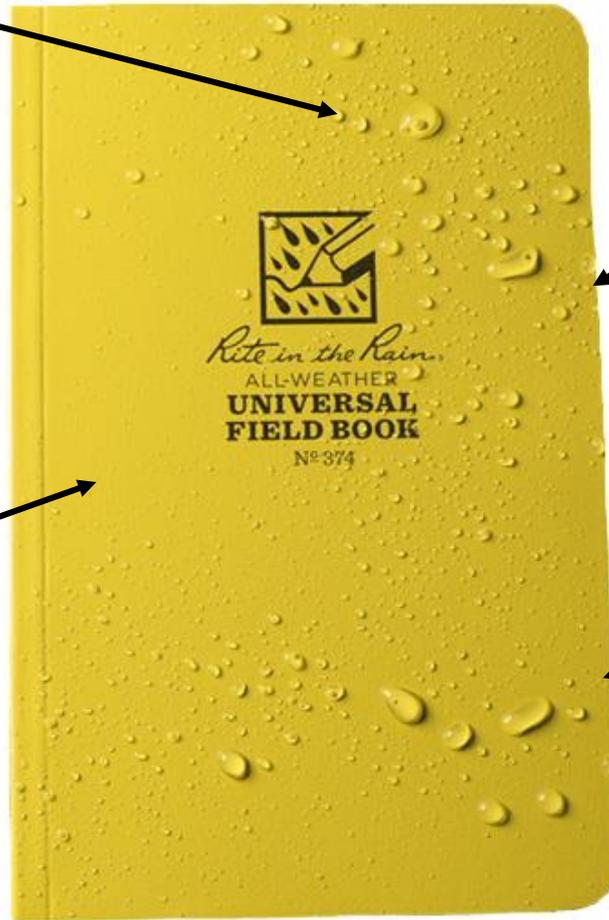
値段が結構高いのが難点ではあるが、ずっとバードウォッチングを続けようと思うのなら、是非購入することをお勧めしたい図鑑だ。

そうしてフィールドで見つけた鳥を、家に帰ってから再度確認する場合には、『決定版 日本の野鳥650』（平凡社）がおすすめだ。野鳥の種数はなんと650種。今後日本で見られるようになると予想されている、外来種の野鳥も含まれてる。こんな図鑑を眺めているだけでも気分が盛り上がる。



水をはじく完全防水仕様のソフトカバーノートだ。

普通のボールペンで書くことができる防水用紙が64枚綴じられている、結構厚みのあるノートだ。



表紙の色は、黄色のほかに、落ち着いた緑、紺、ベージュの四種類ある。野外で落とした時に見つけやすい、派手な色のノートがお薦めだ。

米国の直販サイトでは、1冊14.95ドルで販売されているが、Amazonでは、2000円するのが残念だ。

○ FIELD-FLEX BOUND BOOK(Rite in the Rain)

フィールドノート

野外に出たとき、メモを取りたいと思うことが僕の経験では結構あった。オートバイツーリングで出かけた先で入った温泉の効能とか、雪道を歩いているときに見つけた動物の足の形とか、更に、キャンプに行く途中で買い物するためのメモ、あるいはフィールドに出たときに突然思いついた詩的な言葉などを書き込むために、ハンディーなノートを一冊持っているのととても便利だ。

当時、大学では黄色いミードのリーガルパッドを使っていたのだが、それは薄くてフィールドには向かなかった。そこで一時期ロディアのブロックロディアを使っていた時期があった。上綴じの格好良いメモ帳だった。大きさが何種類かあったのだが、僕が好きだったのはNO.13という縦6インチ(15.24cm)、横4インチ(10.16cm)のメモ帳だった。中身は淡いパープルの方眼野で、いろんなものが書きやすかった。紙を切り取るミシン目は、マイクロカット加工により毛ば立つことなく、メモしたらピッと切れる軽やかさがとてもいい感じだった。

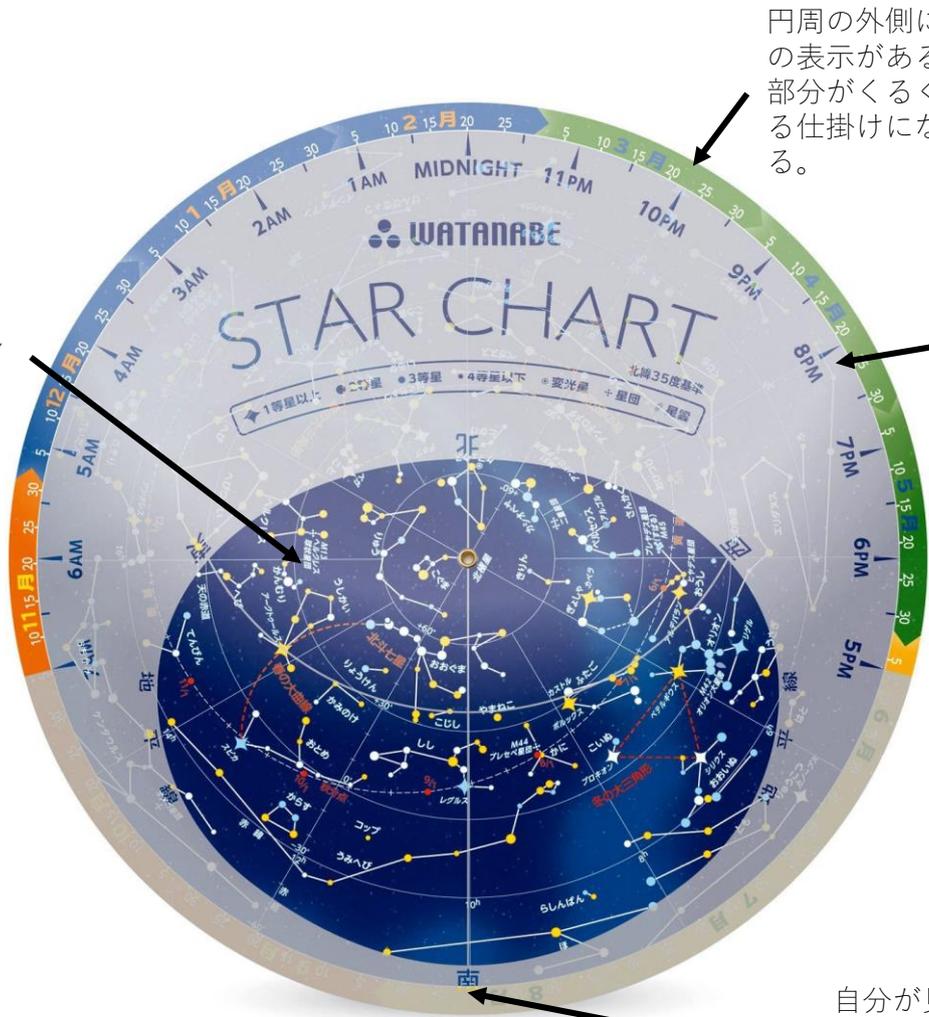
そのうちにコクヨから出ている測量野帳やモレスキン・クラシックノートブックのハードカバーに一時期浮気をしてたのだけれど、最終的に落ち着いたのが、Rite in the Rainという会社が出していたFIELD-FLEX BOUND BOOKというノートだった。

大きさは縦が7¼インチ(18.415cm)で、横が4¼インチ(10.795cm)。ブロックロディアの一回り大きい感じのサイズだ。そしてこのノートの最大の特徴は、水を弾き、どんな天候、場所でも書くことができる、環境にやさしいオールウェザーノートだという点だ。

Rite in the Rainは、1世紀近く前に、米国で伐採業を営んでいたジェリー・ダーリンが起業した会社だ。同業者が悪天候下でも耐えられる耐久性のあるノートを欲しがっているのを知った彼は、妻のメアリーとともに、紙のシートに特殊な防湿シールドをコーティングし、米国で最初の全天候型のノートを作ったのだという。現在はシアトルの南、ワシントン州タコマに本社があり、各種のノートを発売している。

星を眺める

星座や星が表示される部分。



円周の外側には月日の表示がある。この部分がくるくると回る仕掛けになっている。

円周の内側の部分には、時間表示がある。

自分が見ている方向が南なら、南の文字が下に来るように円盤を持ち直せばよい。

○ STAR CHART (渡辺教具製作所) 星座早見盤

キャンプの夜は、焚火を前に、友達と語り合い、酒を飲んだりすることが専らなのだけれど、山の中でキャンプをするときの愉しみの一つとして、“星を見る”ということがある。

普段都会では、空を見上げることも少なく、見上げた空には数個の星が確認できるぐらいだ。ところが一歩街を離れ、山や森に出かけると、満天の星が輝いている。小学校や中学校の頃、結構星が好きで、プラネタリウムなどに出かけては、星座を勉強したものだだったが、最近では北斗七星だのカシオペアはわかって、てんびん座とか牡羊座ってどこにあるの？と思ってしまう。

そんなとき便利なのが星座早見表だ。小学校の頃には、一家に一つはあったのではないだろうか。今ではいろんなものが発売されているのだが、キャンプや山に持って行くのであれば、小さいもので十分だ。通常は直径が20cmをこえる大型のものが多いのだが、それは自宅に備え置くとして、野外に持ち出すのは直系16cmのこのStar Chartで十分だといえる。

現場に行っても使い方が分かりませんなんていうことにならないようにあらかじめ復習しておこう。

星座早見表には、円周部分に月日の目盛りと時刻の目盛りが付いているので、月日の部分をくるくると回し、その時の時間の目盛りと観測する月日の目盛りを合わせるのだ。次に観測地の経度のぶんだけ回転盤を動かして補正する。この早見盤には経度調整目盛りが無いので（明石の135度に合わせた）、星を見ている場所が関東甲信越なら右に、四国九州なら左に微調整する（ちなみに経度は、google mapで自分がいる場所を長押し、下方にある「指定した地点」をクリックすると表示される。そこには例えば、(35.680742, 139.7742341)といった数値が表示されるが、これは北緯35.6度、東経139.7度という意味だ。したがって、厳密には右に4度分回せばよい。)

丸いウィンドウ内に表示されている範囲が、その時間にその場所で見えている星空をあらわしている。自分の向いている方角が下になるように星座早見盤を持ちかえ、星空と見比べよう。その時の星の名前や星座を知ることが出来るわけだ。

夜を
過ごす

この部分を回すとラ
イトが点灯する。

本体は真鍮のような
質感のスチール製

単3電池が2本入る。

首の部分が自由に曲
がるので、フレック
スライトという名前
になったという。
ただ、あまり曲げ伸
ばしすると、断線の
危険があった。

シャツの胸部分に入
れたときに、ホル
ドできるクリップが
付いている。

○ ADJUSTABLE FLEX-LITE(FLEX-LITE)

ペンライト

キャンプの夜は真っ暗だ。焚火にランタンがあるといえども、トイレにいったり、星を見に行くときに、真っ暗なのは心もとない。そんなときにはコンパクトなライトが役に立つ。

僕は当時、釣り用に開発された米国FLEX-LITE社のアジャスタブルフレックスライトを使っていた。名前の通り、首の部分が色々な角度に自由自在に曲がり、先端のライト部分では明るさの焦点調節が可能となっていた。クリップで胸のポケットなどに固定できるので、両手を使う作業などに向いていた。単三電池2本使用でとりあえず夜の用事をこなすことが出来た。

胴体部分の色合いがなんともいい感じで、今も持っていたら、このレトロな雰囲気を受けたのではないだろうか。

2009年にFlex lite社が廃業して手に入らなくなってしまったのがとても残念だった。

その後入手したのが、ロサンゼルスで1968年にドナルドケラーによって開発されたKel-Liteだった。耐錆、耐蝕ノンストップハンドル、エアクラフトアルミニウムとヘビデューティーな



大活躍のミニマグライト

ライトだった。大きさはいくつかあったが、小型のものが使いやすかった。このKel-Liteは、同社をスピンオフしたアンソニー・マグリカによってカリフォルニア州オンタリオで製造されたMaglite (Mag-Lite) にそのDNAが引き継がれている。これは強力なハンディーライトとして現在も広く知られている。

ただし、マグライトは首から下げておくことはできても、アジャスタブルフレックスライトのように両手を開けて使うことが出来ない。

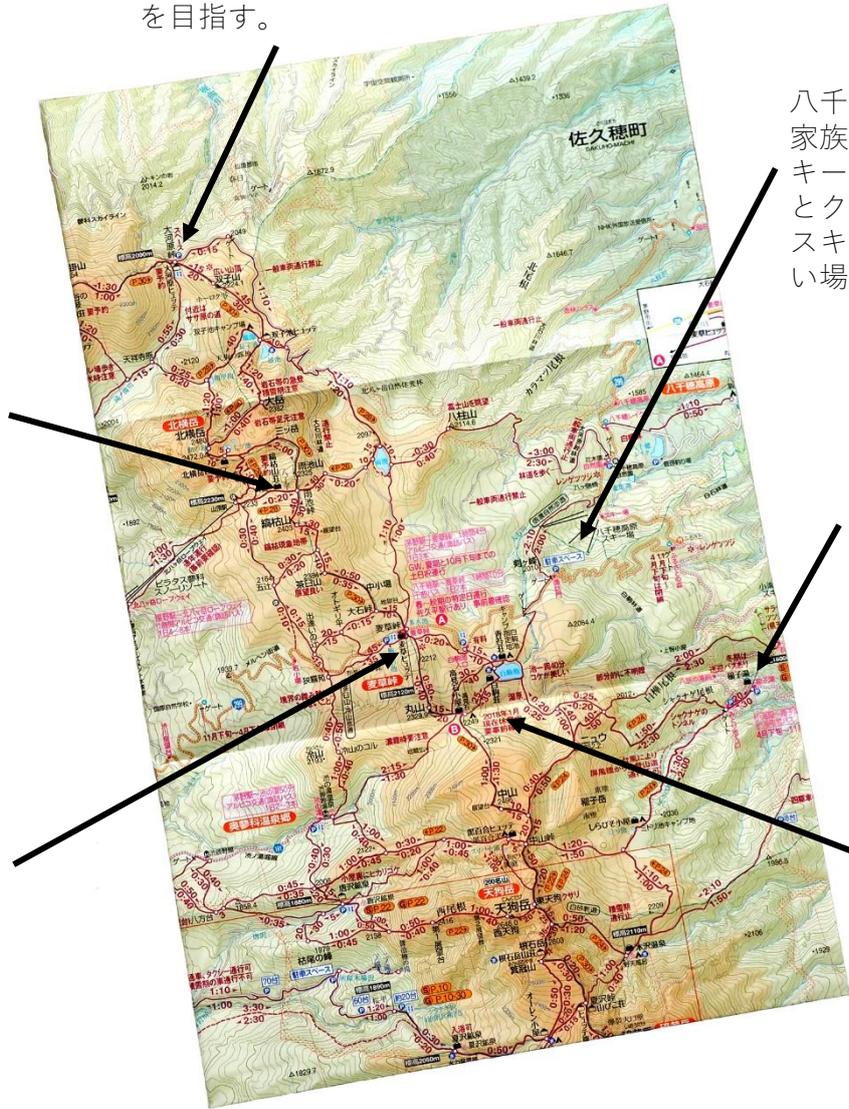
夜が明ける前に、日の出を見に行くときとか、ランタンの無い場所で用事をする場合、やはり両手が使えるヘッドライトなどが便利なのは言うまでもない。コールマン、モンベルなどのアウトドアブランドのヘッドライトがお勧めだ。

ウィルダネス を歩く

八ヶ岳のペンション、ドンキーハウスのお客さん達とピラタスロープウェイを降りると、坪庭からクロスカントリースキーを履き、雨池へ。広がる雪原は若干のアップダウンはあるものの、のんびり雪散歩をするのには最高だ。

オートバイで何度も越えた麦草峠。このワインディングロードが大好きだった。

大河原峠に車を置いて、そこから双子池を目指す。



八千穂スキー場は、家族でアルペンスキーもしたし、仲間とクロスカントリースキーもした懐かしい場所。

稲子湯は山の中の秘湯。オートバイ、エスクード、そして山歩きでも入りに来たいい湯だった。

白駒池一带は、北八ツの魅力がぎゅっと圧縮されたフィールドだ。

○ Trekking Map (山と高原地図 八ヶ岳 昭文社) 地図

山歩きするときや、高原歩きをするときには、地図が必要だ。整備された遊歩道ならば、標識があるから、地図無しでも大丈夫だが、尾瀬とか奥日光でも、地図があると周りに見える山の名前や、あとどのぐらい歩けばよいかなどが分かって、とっても便利だった。

一番最初に買った地図は、日本橋のぶよう堂で入手した国土地理院の5万分の1の地図だった。北八ヶ岳のあたりをブラブラとするための「蓼科山」の地図だ。その時は、ピラタスロープウェイの山頂駅から、縞枯山の山麓をぶらぶら歩き、雨池に抜け、そこから麦草峠へ抜けるルート。このあたりは学生時代から社会人数年目まで、何度か歩いた北八ツのメインフィールドだ。

双子池で一泊したり、高見沢小屋から白駒池経由で、稲子湯まで下ったり。山口耀久著『北八ツ彷徨』に書かれたルートをたどる時には、この5万分の一の地図が大活躍した。

いまでこそ、事前のルートファインディングは、スマホでGoogle mapを開けば簡単にできてしまうが、当時は登山用の地図が役立った。

登山用の地図には、主たるルートと、その上り下りの標準歩行時間が書かれている。ちょうど高校を卒業し、大学に入る春休みに、友人達とバックパックを背負って丹沢の表尾根を塔ノ岳まで登ったことがあった。この時は、登山用の地図を手に、ヤビツ峠から山歩きをした。ヤビツ峠から塔ノ岳までは4時間ちょっと。その日は、大倉まで大倉尾根を下ってキャンプする予定だったので、結構な荷物だった。途中、ブッシュの生える鎖場も登ったりしたのだけれど、地図のありがたみが良くわかったのを今でも覚えている。どうせなら大倉に降りず、丹沢山から蛭ヶ岳まで歩けばよかったなあと感じたりしたが、当時はそのぐらいのハイキング気分の山行が楽しかった。

今では、すっかり山登りからは離れ、専ら街歩きばかりだけれど、そんなときも当時習った地図の読み方が、google mapを見る時に案外役立っているのに気が付く。時代が変わっていろいろ便利になっても、あの頃から変わらないものもあるのだなと思った。

このタイプは、地図に乗せて方角を知るタイプのコンパスだ。

コンパスの長辺に現在地と目的地をセット。こちら側に現在地を合わせる。

目盛り

5万分の1の地図上で距離を測れる（距離測定目盛）。反対側の目盛りは2万5千分の1地図用。

地図上の目的地をここにセット

拡大鏡

地図の細かい部分を確認できる。

進行線

身体を回転させ、Nの針とノースマークが一致する方向に合わせると、この進行線（トラベルライン）の先端が目的地を指す。

回転盤

このノースマーク（N）が磁北線の方角を向くように回転盤を回転させる。

方位磁石

地図にコンパスをセットしたまま、回転盤（リング=ハウジング）のノースマーク（N）に磁石のN針（ニードル）が重なるように体を回転させる。

○ NO.3 BLACK COMPASSES (SILVA) 羅針盤

地図を持っているなら、それをちゃんと読めるようにしなければいけない。さらに、最大限に地図を活用しようとするなら、コンパスは必須だ。コンパスといっても、方位のみを知るための丸いものや、ミリタリーもしくはレンザティックと呼ばれるもう少し精密に方位が測れるもの、そして登山やオリエンテーリングに用いられる透明な定規のセットされたものなどある。僕がボーイスカウト時代にその使い方を教え込まれたのがこのオリエンテーリング用のコンパスだった。

このオリエンテーリング用のコンパスは、フィンランドのSuuntoやスウェーデンのSILVAといったメーカーのものが当時から有名で、僕はSILVAのモノを愛用していた。

このオリエンテーリング用のコンパスは、使い方さえ覚えてしまえば、地図上で行先の方角をすぐに確認することが出来る。5万分の1の地図を例にとると、まず自宅地図上に磁北線を引いておく。真北とコンパスの指す北が微妙にずれるからで、その角度は地図の端などに「磁



GARMIN社のハンディGPS、eTrex30

磁針方位西偏」として記載されている。地図上の現在地と目的地をコンパスの長辺に合わせ、回転盤のノースマーク（N）を磁北線と平行にする。回転盤のNとN針（赤針）が重なるまで体を回転させ、矢印と赤針が重なった時の進行線の指す方向が目的地の方角ということになる。

道がうねうねと曲がっている場合は何度もこれを繰り返す必要があるが、使い方さえ覚えておけば、自分がどの方向を向いているのか、目的地はどちらかを知ることが出来るのだ。

最近では、スマホにコンパスやGPSが装備され、便利になったが、更に精密に位置を知る必要があるなら、コンパクトGPSを使う手もある。地図が表示されるGPSは、とても便利で解り易い。

写真を撮る

シャッターの押しやすいリリース。シャッター音が好きだった。



各種各モードを選択するモードスイッチ

superAのアクセントであるファインダの採光窓。ファインダ内の液晶を外光らせる。

トップカバー左側には巻き戻しクランクと露出補正ダイヤルやISOダイヤル。MEに通じる。

本体は真鍮のような質感のスチール製

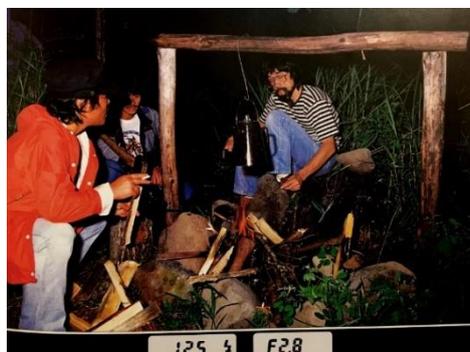
Pentax ME譲りのフォルムは、電子カメラでありながら、機械式カメラのフォルムを残し、いい感じだった。

レンズもコンパクトで、50mmのみならず28mmから300mmまで何本かのレンズを持ち歩いていた。

○ Super-A (Pentax) フィルムカメラ

僕らのアウトドアライフには、いつもカメラがあった。それは高校時代に初めて清里の雪の原を歩いた時から、いつも身近にあった。その時僕はYASHICA ELECTOR 35というレンジファインダーカメラを愛用していた。同行した友人はオリンパス ペンEEというハーフサイズフィルムカメラを持っていた。そういえば、アウトドアライフの仲間たちは、皆カメラを持っていた。だから僕らのアウトドア遊びの記録は、今でもフィルムの上にはいろいろと残っている。

僕は、その後Olympus OM2など幾つかのカメラを手に持つ機会があったのだけれど、一番の気に入りは1983年3月に出たPentaxからSuper Aというマルチモードの一眼レフカメラだった。OlympusのOMに対抗する形で発表された世界最小カメラPentaxのMEシリーズの流れを引くSuper Aは、「小型軽量」や「システムの広い拡張性」といったPentaxの伝統的な路線を変化する事無くそのまま踏襲し、なおかつ必要な機能がすべて盛り込まれた、高性能・高機能なコンパクトカメラだった。このカメラを1983年4月



Super Aのカタログ。ドンキーハウスの加藤則芳氏と友人草野君。写真は佐藤秀明氏。

に社会人になり初任給で手に入れた僕は、それから10数年の間、このカメラを使い続けることになる。

発売当時のこのカメラのカタログは、結構アウトドアの要素が盛り込まれたものだったのだけれど、その後1年ほどたって発行されたカタログには、なんとドンキーハウスが登場し、オーナーの加藤さんやドンキーでバイト中のアウトドア仲間の草野君が登場し、しかもその写真を撮ったのが佐藤秀明さんだったとう、なんとも凄い状態だったのに、とても驚いた。そんなアウトドアな状態を撮るカメラとして、Super Aが位置付けられたのは、とても嬉しかった。



赤い人工サファイアのシャッター。

レンジファインダー。ピント合わせはやや心もとない。

フィルム巻き上げレバーも目立たない。

フィルム巻き上げレバーは胴体に納まっている。

アルミダイキャストのボディは、意外と重さがあり、高級感が漂う。

沈胴式のCarl Zeissのツァイスのソナーという38mm F2.8のレンズが装着されている。

蓋を開けるとレンズが登場する、沈胴式のコンパクトカメラ。

○ CONTAX T (KYOSERA) コンパクトカメラ



1994年発売のFUJIFILMのリバーサルフィルム、PROVIA 100Fは現役だ。

いくらSuperAが小さいからといっても、そこは一眼レフのこと、機動性という面では、若干の制約を受ける。それでもかまわずに僕はSuperAを持ち出していたのだが、ある日、奥多摩の峠をいくつか越え、甲州へ至る際、途中なんどもオートバイを止めてその美しい風景を写真に収めたくなった。そうなるといちいちリアのバッグからSuperAを取り出して撮影しなければならない。そんなとき、ライダージャケットのポケットからカメラをすぐに取り出せたらとっても便利ではないか、そう思ったのだ。

そこで、当時主流だったコンパクトなカメラのいくつかを物色してみた。当時琴線に触れるカメラとしては、オリンパスのXA、コニカのMG/D、ペンタックスPC35AF-MDなどがあり、あれこれ悩んでいたところ、1984年11月に京セラから満を持して発売されたのがCONTAX Tだった。

CONTAXは、ツァイス・イコンのレンジファインダーカメラのブランドをベースに、Carl Zeissと日本のカメラメーカーヤシカ

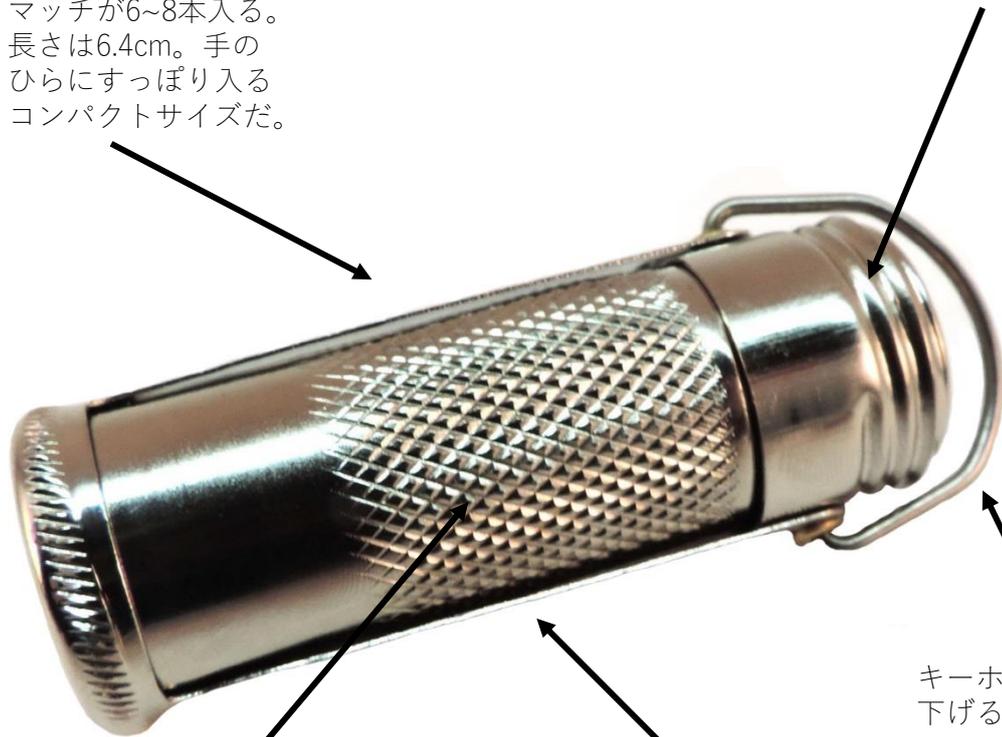
が組んで、1975年に販売が開始されたカメラだった。その後、京セラに合併され、初めて発売されたのが、このCONTAX Tだったのだ。レンズにツァイスの38mm F2.8ゾナーレンズを搭載した小型カメラだ。TとはTiny（小型という意味）だ。

CONTAXは大型の一眼レフメインだったので、こんな小型のコンパクトカメラが発表されたのはとても驚いたことをいまでもよく覚えている。もちろん、すぐさま購入し、現在に至るまで愛用している。なにしろ、マニュアルフォーカスのコンパクトレンジファインダーカメラで、フラットなフロントカバーを前に倒すとレンズが出てくるというギミックが特徴の、実は厄介なカメラなのだが、僕はこれにリバーサルフィルム（PROVIAが1994年に発売されると専らそればかり）をこのカメラに装填してあちこちへ持ち歩いた。

焚火 をする

2.6cmの直径で、
マッチが6~8本入る。
長さは6.4cm。手の
ひらにすっぽり入る
コンパクトサイズだ。

ネジのように回して
蓋を開ける仕様なの
で、マッチが勝手に
出てしまうことがな
い。



キーホルダーにぶら
下げることができる。

このざらざらの部分
を利用してロウマッ
チに火をつけること
も可能だ。

素材はニッケル、ブ
ラスで、防水仕様
になっている。

○ MATCH SAFE 2898 (MARBLES)

マッチケース

ボーイスカウトでは、級が上がる際に、認定テストみたいなのが行われるのだけれど、その中に、マッチ一本で薪に火を付けられるかという課題があった。キャンプの際に、毎回先輩からマッチで薪に火をつけるやり方を叩き込まれていたのだから、その課題はすぐにクリアできた。炭に火をつけるのも、マッチ1本でOKだ。

いまでは、ターボ式のライターや、焚火専用のファイヤースターターがあればこれがあるので、そんなに苦労しなくても焚火に火を付けられるのだが、そこはやっぱりマッチで火をつけたい。

それは僕にとって、ボーイスカウト以来、森でキャンプする際の「儀式」的な行為でもあった。そんなときに使うのは、普通の家庭用のマッチだったのだが、どうせなら、ロウマッチをマッチケースの中に入れて、格好良く薪に火をつけたいものだ。ちなみにロウマッチとは、マッチ箱の摩擦板で擦るのではなく、靴の裏とかコンクリートとかザラザラしたところに擦りつけて発火させるマッチ、S.A.W. (STRIKE ANYWHERE MATCH) マッチのことだ。



どこでも火がつけられる
STRIKE ANYWHERE MATCH

そして、手軽にマッチを持ち歩くためのマッチケースは、100年以上変わらないデザインで昔からアウトドアの世界で有名なマーブルズ社のウォータプルーフのマッチ用セーフティケースにしたい。雨や湿気からマッチを守ってくれる防水仕様で、開閉は本体をネジの様に回して開けるため、勝手に開いてマッチが濡れてしまう心配もない。こいつをポケットに入れておけば、その日一晩野外で過ごすときにも、とっても強い味方になるのである。

スチールメッシュの焚火網は、下から吹き上げる風によって、良い具合に薪を燃やす。

スチールメッシュの面積に収まるように、薪を並べる。並べ方によって炎の上がり方が異なるのもとても面白い。

4本のスチールの足を組み合わせて作られている非常に簡単な構造の焚火台だ。

スチールメッシュの四つ端を、焚火台の足に接続すれば焚火台が出来上がる。

フィールドを保護するためにゴム足が付けられている。

○ Fire Stand (UNIFLAME) 焚火台

僕らがキャンプをするときに、最初にやることは、あちこちに散らばって、薪を探してくることだった。キャンプの夜は、何はなくても焚火をする。だから、そのための薪は必須アイテムなのである。

テントを張って、ちょうど良い場所に焚火のベースを設置したあとで、料理をつくり、ご飯を食べると、いよいよ、楽しい焚火の時間だ。

ひとしきり大きな焚火で楽しむと、そのうち、なぜかみんなその辺に焚火を作り始め、メインの焚火の分家はその辺に出来上がる。それもまた楽しい時間だった。

残念ながら、最近は環境保全のために、直火を禁止するキャンプ場が増えたという。そのため、焚き火ベースとかファイヤースタンドなる道具が売られるようになってきているらしい。バーベキューグリルを兼用するものもあるらしいが、それはそれ、焚火は焚火で楽しみたい僕としては、やはり、純粹に焚火台だけの機能のものを選びたい。そこでおすすめなのが、アウトドアグッズ全般を取り扱うユニフレームのファイア



焚火の無いアウトドアライフなど僕らには考えられなかった。

スタンドだ。四本の脚を広げて網に付いているピンを挿すだけの簡単構造。ステンレスメッシュの網が張ってあるだけなので、持ち運びも撤収もすごく簡単で便利だ。

メッシュ部分に薪を置き火をつける。網戸のようなステンレスメッシュなので、風通しが良く、薪がよく燃える。

林道等を 駆る

Tバー状のハンドルは、取り回しがしやすく、悪路もへっちゃらだった。

HONDA XL250Rを踏襲した形状の大型フューエルタンクは、当時憧れの形状だった。

空冷・4ストローク・OHC・単気筒のエンジンは、半球型燃焼室RFVC、デュアルキャブレターシステムの採用によりハイパワーだった。

サスペンションも素晴らしく、意外と乗り心地も良かった。



オフロード用のタイヤは、オフロードではしっかり地面をグリップし、一度もスリップ転倒をしたことがなかった。

○ XLX250 (HONDA) オフロードバイク

オートバイに興味を持ったのは、高校時代に読んだ片岡義男氏の小説『彼のオートバイ、彼女の島』の影響だった。その時は、そのうち乗りたいぐらいに思っていて、原付のモンキーというコンパクトで可愛いオートバイを友達に借りて乗るぐらいだった。高校を卒業して先に車の免許をとってしまったので、スクーターはのりまわしていたものの大きなオートバイの免許を取ろうという発想がなかったのだが、アウトドア仲間の一人が大学に入学すると、中型免許をとり、YAMAHAのXT250というオフロードバイクに乗り始めて、とっても格好良くて、中型免許を取りたいと思い始めた。ただ、大学時代は、勉強とバイトがとても忙しく、なかなか教習所に行く時間がなかった。就職が決まり、卒論を書き終え、教授にOKをもらった大学卒業の冬に、ようやく教習所に行くことができた。すでに原付は乗り回し、車の免許を持っていたため、教習所では「その辺を適当に走ってて」と教官に放置され、最短時間で中型免許を取得できたのだ。



八ヶ岳のペンション、ドンキーハウスには
オフロードバイクでもよく通った。

めでたく免許を手に入れたのだが、貧乏学生の僕には、オートバイを買うのはなかなかハードルが高い。そこで、初任給を頭金にと思い、それまで、オートバイを物色することにした。そして1983年に登場したばかりのHONDA XLX250をその年の5月に購入したのだ。

今では、オフロードバイクというと、YAMAHAのセロー250とトリッカー、HONDAのCRFシリーズで、どちらもモトクロステイストのオフロードバイクだ。僕らが乗っていたオフロードバイク（YAMAHA XTやDT、HONDA XLなど）が姿を消してしまったのがとても残念だ。

スポークタイヤであることが、このオートバイの魅力の一つになっている。

美しいフォルムのティアドロップ型のフェイエルタンクが特徴。

ハンドルサスペンションはかなりいい感じ。

ドラムブレーキというクラシカルな装備も魅力。

SOHCの短気筒が心地よいエンジン音と振動を生む。

○ SR400 (YAMAHA) オフロードバイク

XLX250をひとしきり乗り回したあと、僕らが興味を持ったオートバイは、単気筒のYAMAHA SRだった。たまたま八ヶ岳のドンキーハウスにオートバイで来ていたカップルがいて、彼らが乗っていたSRがとても格好良かったのだ。

YAMAHA SRは、1978年に発売開始された空冷4ストローク単気筒SOHC2バルブのエンジンやキックスターター、デコンプレッサー、ワイヤースポークなどが装備された、ヨーロピアンな美しいデザインのオートバイだった。当時は、SUZUKI GSX（カタナという愛称が有名だった）のような飛ばしバイク全盛の中で、まるでそれと逆行するかのよう単気筒のクラシカルなスタイルのオートバイは、エンジン音やフェイエルタンクの美しさなどもあり、がっつりと僕らの心をつかんで離さなかった。

SRは、シンプルなだけに、いろいろとカスタマイズできるオートバイとしても人気で、ハンドルやバックミラー、更にはシングルシート化したり、マフラーをいじったりと、手を入れる人が多かった。僕が買ったのは、1985年に発売



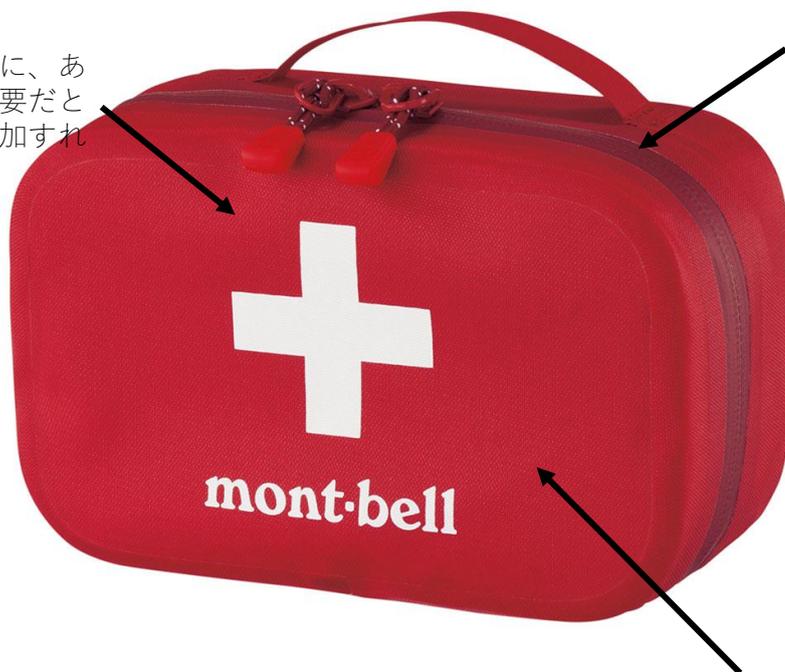
SR400で、奥志賀高原から須坂まで山田牧場を抜けツーリングしたあの夏の日

された、フロントブレーキをディスクからドラムに変えるという、当時としては異例の退行的モデルチェンジを行った奴だった。トルクのある単気筒エンジンを積んだSR400は、山の登り道では、そこいらのレーサーを気取った飛ばしバイクに乗る連中など目にもくれない威力を発揮したが、高速道路では、今にも分解してしまうのではないかと思うほど心もとなかった。

しかし、ダートもそれほど苦にならず、アウトドアライフを楽しめたし、何より低音のエキゾーストノートや、ドッドッドという体の奥深くまで伝わる振動、そしてそのフォルムの美しさにすっかりやられたのだった。

備えよ 常に

基本のセットに、あとは自分が必要だと思うものを追加すればよい。



Mont-bellのものはバッグだけだが市販のFIRST AID KITには、一般的に以下のよなものが含まれている。

- ・安全ピン
- ・綿棒
- ・ハイドロコロイド絆創膏
- ・ウォータープルーフ絆創膏
- ・包帯
- ・滅菌ガーゼ
- ・ビニール手袋
- ・サーマルブランケット
- ・はさみ
- ・冷却ジェル
- ・メディカルテープ

誰でも取り出しやすいように目立つ防水のバッグに纏めておくと便利だ。

○ FIRST AID KIT BAG (mont-bell) ファーストエイドキット用バッグ

ボーイスカウトに入団した際に、「そなえよつねに」というモットーを真っ先に覚えさせられた。ひらがな読みの「そなえよつねに」は、最初意味が分からず、なんだそれ？だった記憶がある。要するに「備えよ、常に」なのだ。

何に備えるのかというと、常に「心の備え」「体の備え」「技の備え」を怠らず、生活することで、人の役に立ちなさいということだった。今なら、さながら常時BCPを意識しろという感じだろうか。英語で書くと「Be Prepared」となるが、これは、ボーイスカウトの創始者のベーデン・パウエル卿が自分のイニシャルをもじったものと噂されていて、なんて目立ちがりやのおやじ！なんて思ったものだった。

しかし、この「そなえよつねに」は非常に重要なことであることは言うまでもない。アウトドアライフを楽しむときに、野外で活動するからこそ、さまざまなリスクが付きまとう。焚火でやけどするとか、薪を集めているときにとげが刺さるとか、テントの中で虫に刺されるとか、小さなけがは日常茶飯事。そんなときに備えて

おけば、安心というわけだ。

では、どのような備えが必要か。基本は市販されているファーストエイドキットを購入してデイパックに放り込んでおくだけで安心だ。

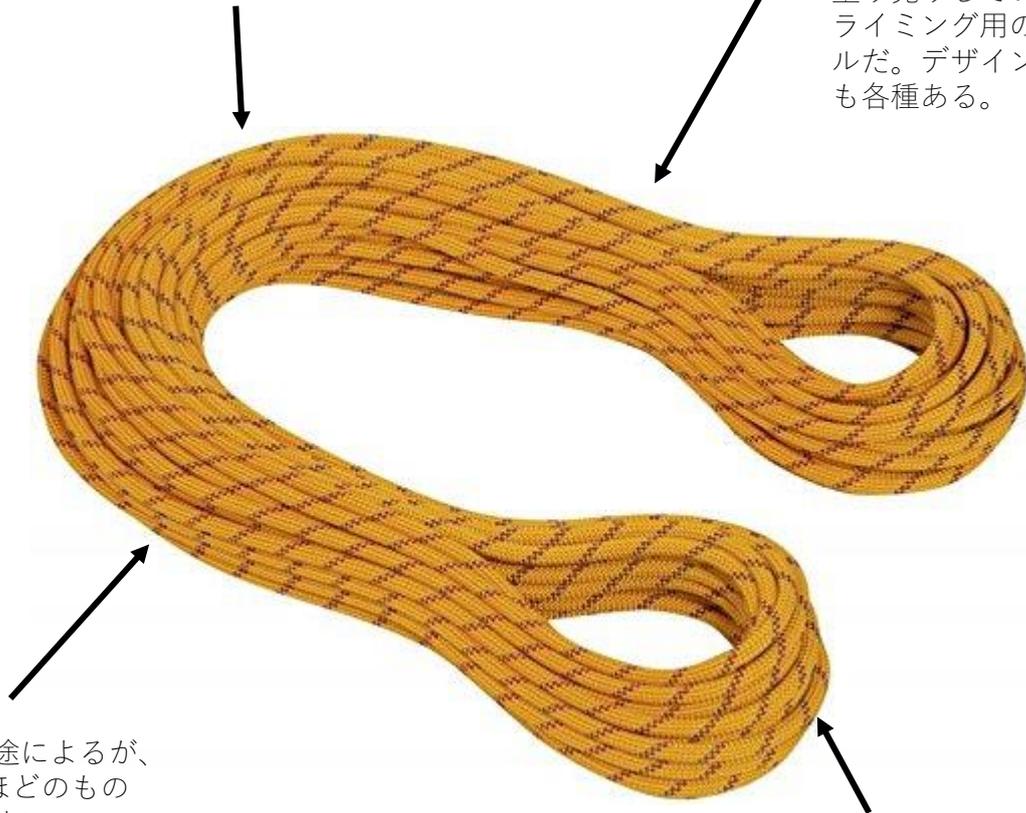
ただ、そうはいつても、最低限必要なものはある。あると便利なのは、①虫刺されの薬、②やけどの軟膏、③バンドエイド、④常備薬（下痢、風邪、頭痛などの薬）、⑤刺抜き、⑥小さなハサミ、⑦爪切り、⑧脱脂綿、⑨三角巾、⑩包帯、⑪安全ピンなどだろうか。

ちょっと本格的になると、毒虫（蜂やムカデ、蚊やぶよなど）に刺されたり、蛇に噛まれたときの毒液・毒針を吸引するポイズンリムーバーキットなどがあると便利だ。

昔はそういう薬も、英語表記になっているとなんだかとっても格好良く感じられ、わざわざ日比谷のアメリカンファーマシーまで、買い出しに行ったものだった。これらのアイテムを目立ちやすい色の防水バッグに入れて常に持参すれば、キャンプやツーリングなどでも安心できるというものだ。

しっかりしたロープ、特にザイルは、いろいろと役に立つ。

ロープも各種あるので、好きなものを選ぼう。これは長さで量り売りしているクライミング用のザイルだ。デザインや色も各種ある。



長さは用途によるが、2~3mほどのものが使いやすい。キャンプの際の物干しロープとしても有用だ。

太い物、細い物各種あるが、細ければテントやタープの補強に、太目であれば、オートバイの牽引などに使える。

○ GENESIS DRY 8.5 (MAMMUT)

ロープ

いざという時にあると便利なのがロープだ。いつもボーイスカウトの時には、腰から白いロープをぶら下げていたのを思い出す。

ロープは、何かを結ぶだけではなく、物と物を結ぶことで「固定する」、「ぶら下げる」、「引きずる」などの機能がある。

キャンプでは、タープやテントをより補強することもできるし、ツーリングなら、エンジンのかからないバイクなどを車や別のオートバイで牽引することもできる。

出来るだけ頑丈なロープがあるといい。最低でも人間の体を支えてくれるぐらいの強度のあるものを一本持っておくと、アウトドアライフのみならず、震災などの時にも役に立つ。そこで、僕は登山用のザイルを4mほど購入してある。IC石井スポーツやmont-bellなどに行けば、メーターの量り売りをしているので、必要な太さで必要な長さのザイルを購入することが出来る。

僕が昔から使っているのは、スイスのレンツブルクに近いディンティコンに伝統的なロープ



ロープワークの基本「もやいむすび」

工場があるマムントのザイルだ。150年以上の歴史のある信頼できるメーカーなのだ。

太さはその時々でいろいろだと思うが、普段使う場合は8.5mmあれば十分だろう。もちろんオートバイの牽引などには10mm以上のもの方がいいのは言うまでもない。

ロープの結び方はあれこれある。例えば、人を救助するときを利用する「もやい結び」は、輪を作る結び方のグループの中では基本中の基本の結び方で、「King of knots」(結びの王様)などとも呼ばれていて、覚えておくともとても便利。ロープワークは基本さえ覚えれば、案外簡単なのである。

アーミーナイフ並みの機能をもつスイスカード。様々なツールがコンパクトにまとまっている。



エマージェンシーホイッスル。何かあった時に思い切り吹くと助けを呼べる。



サバイバルシート。人が一人すっぽり覆えるぐらいの大きさがあり、保温性抜群だ。一枚あるといざという時に便利。



手動のチェーンソー。簡単な木ならすぐ切れる。薪の切断にも活躍する優れたもの。



防風力の強い協カライタは、いざという時に百万力なので、必ず一つは携帯しよう。

○ EMERGENCY TOOL 緊急用具

アウトドアで遊んでいると、いつどんなことが起こるかわからない。雪道が閉ざされて帰れなくなるなんてことも、大げさではなく発生することがある。そんな「いざ」という時に幾つかの道具を常に持っているとなんとも安心するものだ。これらの緊急用具は、震災の時にも役に立つし、普段からオフィスに備え置いておいても良いぐらいのグッズだといえる。

その代表的なものをあげてみると、次のようなものが考えられる。

サバイバルシート：エマージェンシーブランケットなどとも呼ばれるが、一般的にはアルミでできたシートで、体熱を反射させて体温を維持する。一枚あると寒さをしのげて便利だ。最近では特殊な素材「ヒートシート(R)」が使われているものもある。

ハンドチェーンソー：木を切るのに便利な、手動のチェーンソー。これはキャンプなどで薪を切ったりするのに使えるので、一つ持つておくとう便利だ。

エマージェンシーホイッスル：小型ながら大きな音が出るホイッスル。万が一の場合に人を呼ぶ際に利用する。緊急時の身元を記す丈夫な合成紙が中に入れられるようになっているので、常に首からぶら下げておけば、緊急時のアクシデントにも備えられる。

スイスカード：スイスアーミーナイフのようにマイナスドライバー、ピンセット、ツースピック、はさみ、つめやすり、ボールペン、ピン、クラフトブレード、スケール等様々なツールが一枚のカードに納まっている十徳グッズ。

強カライタ：火は重要だ。マッチで焚火に火がつけられるけれど、雨の日などはマッチでは心もとない。そんなときに防風仕様の強カライタはとっても心強い味方になる。

他にもティッシュやウエットティッシュなど、あると便利なものはあれこれあるが、出来る限り荷物を少なくしながら緊急グッズも備えておくことがとっても重要なのである。

鍋にあけ、湯を注ぐと、5分で美味しいパスタが食べられる優れたもの。



パスタの種類もいくつか選べるのが嬉しい。

カップヌードルのリフィルバージョン。このままシェラカップなどに開け湯を注ぐだけで、カップヌードルが食べられる。



カップ部分がないので、携帯に便利だ。シェラカップなどに入れて湯を注ぐだけ。

○ PACKED MEAL 携行食糧

僕らが高校生の時に、登山用の食料といえば、アルファ米にレトルトカレーか、インスタントラーメンと相場が決まっていた。1970年代にフリーズドライという技術が日本でもスタートし、多少なりともその恩恵は被ることが出来たのだが、それでも、その食事の範囲はかなり狭かったのを記憶している。

軽くて美味しく、腹を満たすものというのはなかなか難しい矛盾をはらんでいる。新鮮なものは水分が多くかさばるし重い。料理道具は最低限に留めるとなると、キャンプ地でちゃんとした料理をするというのは、長期間歩くようなバックパッキングやトレッキング、登山では望むべくもなかった。

たぶん当時は、「出来る限り美味しいものを頑張って持って行く派」と「食事は二の次、とにかく軽くしたい派」に二分していたのではなかったか。

あれから40年近くたった今では、美味しい物派も軽い派も両方を満たす携帯食料というのもずいぶん増えた気がする。

僕らも、最初は軽いけれど美味しいアウトドア用の食品をあれこれ探したものだ。当時宇宙食用に開発されたものなども話題に上がったが、実際にキャンプや山歩きに持って行ったことはなかった。

主にレトルトカレー（ハウスクレカカレーとボンカレーはどちらが旨いかなどという論争もしたことがあった。）やフリーズドライのスープなど（今ではたまごスープからオマールエビのビスクまで揃う。）がメインだった。

久しぶりにICI石井やmont-bellを覗いてみると、携帯食品のコーナーには、湯を注ぐだけの手軽でおいしいパスタやインスタントラーメンなどがあれこれ並び、どれを選ぶか目移りするほどだ。その中でもパスタには一過言有る僕が、これはいけると思ったのがソル・レオーネ エスプレッソパスタだ。沸騰した湯にそのまま中身を入れて温めれば出来上がりという手軽さなのに、なかなかいけるのが嬉しい。種類も豊富なので、非常用に購入する手もあるかもしれない。カップの無いカップヌードルもお勧めだ。

アウトドアを読む

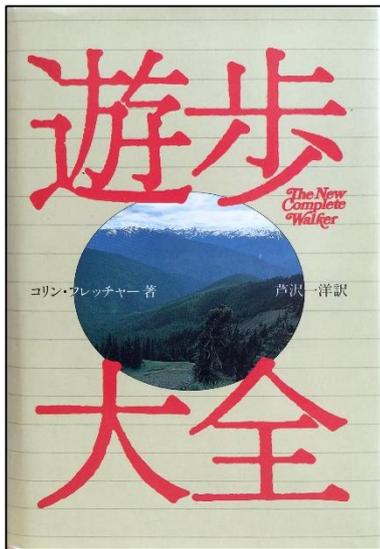
昔から、日本の登山家にはインテリが多かった。昭和になって山についていろいろ書かれた本は、木暮理太郎、尾崎喜八、今西錦司、浦松佐美太郎、串田孫一など、文化人類学者であったり、詩人であったり、哲学者であったりと、格調高い文章を書ける人たちが多く手掛けてきた。

一方、アウトドアライフに関する本は、米国から渡ってきたこともあり、ヘミングウェイの小説などを別にすると、どちらかというアウトドアライフ自体が若者文化を中心としたカルチャーだったため、文学的色彩を持つというよりも、ファッショナブルな文化論的様相を呈し、部分的に情緒的な要素はあるものの、どちらかというマニュアル的な内容のものが多く見受けられた。

だけど、どちらも甲乙つけ難いくらい僕には面白くて、様々な本を読み漁ったものだった。

そこで、バックパッキングを日本にもたらした『遊歩大全』から片岡義男まで、僕にとってのアウトドアを語る上で外せない本をここでは並べてみることにした。



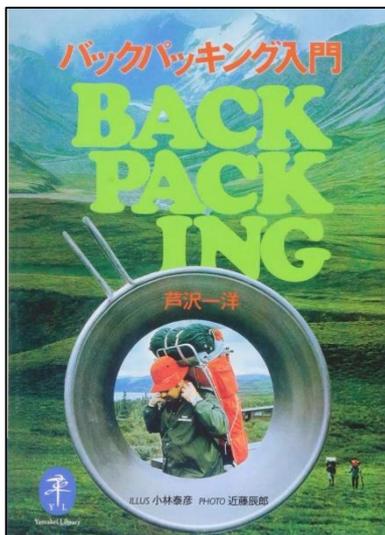


『遊歩大全』 コリン・フレッチャー著

日本にアウトドアライフを紹介したのがまさにこの『遊歩大全』(The New complete Walker)だった。著者のコリン・フレッチャーは、グランドキャニオンウォーキングなど、紀行文学で有名なイギリス人で、徒歩紀行の名手ともいわれていた。

『遊歩大全』は1968年に出版されると、米国で一躍人気を博したが、日本では芦澤一洋氏の翻訳で1978年に上下巻で発行され、その後、改訂版、復刻版と数回にわたり出版されている。約1,000ページに及ぶバックパックのハウツー本で、自然の中を歩く喜びそのものから始まり、ウィルダネスを歩き通すのに知識や道具などの紹介が続く。まさにバックパッキング、否、アウトドアライフそのものの教科書なのである。現在もヤマケイ文庫で入手可能。

発行：2012年12月
 出版：山と溪谷社
 ISBN：978-4635047524

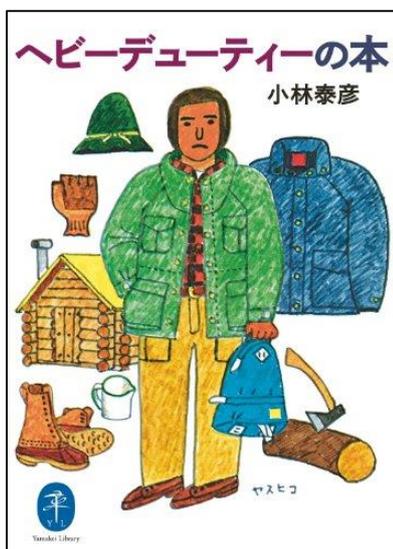


『バックパッキング入門』 芦澤一洋著

『遊歩大全』を翻訳した芦澤氏の、彼なりの遊歩大全がこの『バックパッキング入門』だ。今読んでもそこに流れるバックパッキングの基本精神は全く古びず今に至っている。もちろん、多くの頁が費やされている各種道具の数々は、今やもっと進化した魅力ある商品として僕らの目の前に登場しているが、それらのアイテムは、彼が並べて見せた道具類のDNAを受け継ぎ進化したものがほとんどだといえる。この本を含め、早くから山歩き、特にバックパッキングの魅力やフライフィッシングの楽しさを日本に伝えた芦澤氏の功績はとても大きい。

芦澤氏の本は、他に『アーバンアウトドアライフ』、『バックカントリーをめぐるっておきの14話』、『フライフィッシング全書』、『故郷の川を探す旅』など数多くあり、幾たびとなくこれらの頁をめくったものだった。

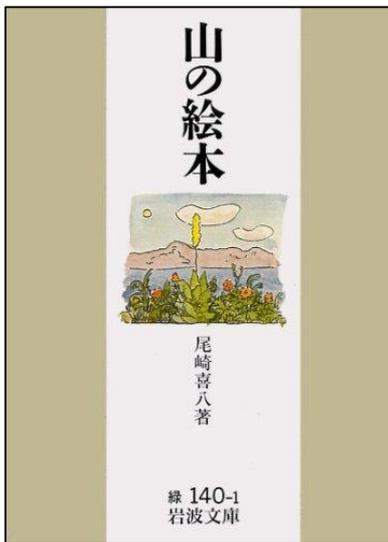
発行：1976年
 出版：山と溪谷社
 ISBN：978-4635048613



『ヘビーデューティーの本』 小林泰彦著

芦澤一洋氏の『バックパッキング入門』挿絵を描いたのが小林泰彦氏である。ポパイをはじめ、多くの雑誌にイラストを掲載し、アイビーにアウトドアファッションを組み合わせたヘビーデューティーファッションを世に知らしめた人として広く知られている。芦澤氏の本が、アウトドアライフの精神を説く本であるなら、小林氏の本は、まさにそれを実践して楽しむための工夫本だといえる。山を歩くからといって、機能のみを重視した服や靴ではなく、機能性はもちろんのこと、もっとお洒落なヘビーデューティーを山でも都会でも楽しんでしまおうという工夫が満載なのである。折しもハマトラ全盛の時代にあって、この本が一石を投じたヘビーデューティーファッションは、僕らにとってあこがれの的だったことは言うまでもない。

発行：1977年10月
 出版：婦人画報社（現在山と溪谷社から復刻）
 ISBN：978-4635047616



『山の絵本』 尾崎喜八 著

詩人尾崎喜八の名前は、今の若い人たちからは遠く忘れ去られてしまっているに違いない。彼はロマンロン、ヘルマンヘッセの著書を翻訳して日本に最初に紹介した詩人である。

1935年に出版された『山の絵本』は、『山小屋』などの雑誌等に連載された短文を集めたもの。木々や小鳥、雲の様子などを通じて水彩画のような情景描写だけの山行を静かなトーンで語る。その山行の多くが身近な低山徘徊である点に親近感も覚えるのだ。山をみの愉しみではなく、山に行くとこんないろいろな楽しみがあるんだということを、詩人尾崎はこの本に見事に表現しているのである。

発売：1993年5月
 出版：岩波書店
 ISBN：978-4003114018



『定本 野鳥記』 中西悟堂 著

我が家の本棚には古い一冊の本があった。『鳥の山旅』という1946年発行の中西悟堂の書いた本だった。低山徘徊の好きだった両親が、江古田の古本屋で見つけてきた本らしく、今では入手困難な本である。この本をばらばらとめくっているうちに、野鳥にかける愛情のあまりの強さから、中西悟堂がまるで野鳥界の南方熊楠のように思えて仕方がなかった。日本野鳥の会は、そんな彼が設立した組織だった。

芦澤一洋氏が『アーバンアウトドアライフ』で『定本 野鳥記』を取り上げているのを読み、本屋で全16巻を取り寄せてもらったのは、NYから戻って来た1991年のこと。当時はまだ本屋に在庫があったが、さすがに今は中古本しか出回っていないようだ。縁あって今はこの本は、知人の書庫に納まっているが、時々取り出してばらばらとめくりたくなる本である。

出版：1965年
 発行：春秋社

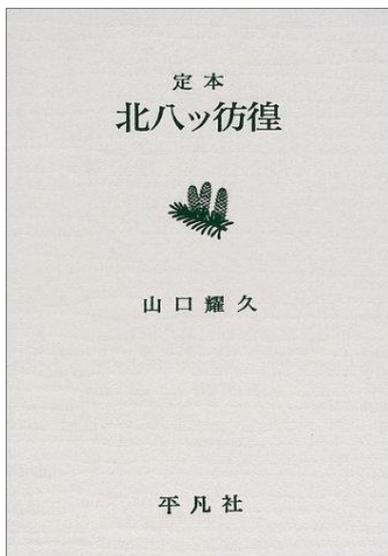


『山のパンセ』 串田孫一著

哲学者であり随筆家でもある串田孫一の代表的著作『山のパンセ』。初めて紐解いたのは、中学時代だった。ページをめくると山にまつわる思想、思索が美しい言葉で綴られていた。紀行もいくつか掲載されていて、いつか一人旅がしたいと思わせる内容だった。井上靖の『氷壁』を読んで、山の文学に惹かれ、あれこれ山関連の本を漁った記憶がある。その時に会ったのがこの『山のパンセ』だったはずだ。

この本は、1957年に実業之日本社から出版され、評判となり、62年『山のパンセII』、63年『山のパンセIII』が出版されたが、1972年には1冊に合本されて『山のパンセ』となり、集英社文庫、岩波文庫にも収まっているが、現在はヤマケイ文庫として復刻している。『葦の時間』とともに僕の愛読書だ。

発行：2013年9月
 出版：山と溪谷
 ISBN：978-4635047654



『北ハッ彷徨』 山口耀久

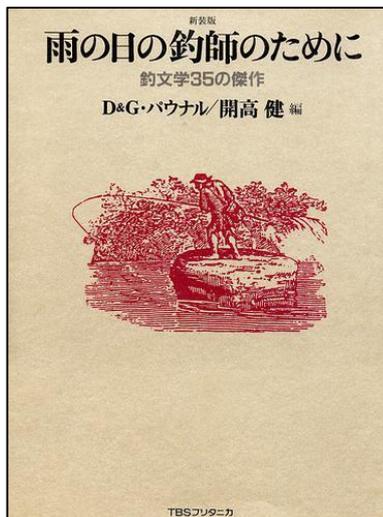
ドンキーハウスで加藤さんに「これは読んでみるといいよ」と勧められたのが山口耀久著『北ハッ彷徨』だった。

山の文芸誌『アルプ』の編集に参加し、串田孫一らと300号の終刊まで委員を務めた山口氏は、若いころから日本の山を登りまくったハードな登山家だったが、この本に登場する北八ヶ岳は、詩的で叙情的な景色を見せてくれる。静かな思惟の森を歩く時、いろいろなものに思いふけり、時には、そんな森で仲間と遊ぶ。情緒的、感傷的山行記録と毛嫌にする人もいるようだが、実際歩いてみればよくわかる。北八ツの朽ちた倒木や、古い岩石や湿っぽい土とまじったなつかしい苔の匂いは、まさに北八ツの森を彷徨する人間に思惟の時間を与えるのである。

主稜線を辿るだけでなく、裾野から稜線をめがけて、森を放つるように歩くことの楽しさを教えてくれる珠玉の一冊だ。

発行：1960年

出版：創文社（現在は、平凡社から出版されている。）



『雨の日の釣師のために』 D&Gパウナル 著

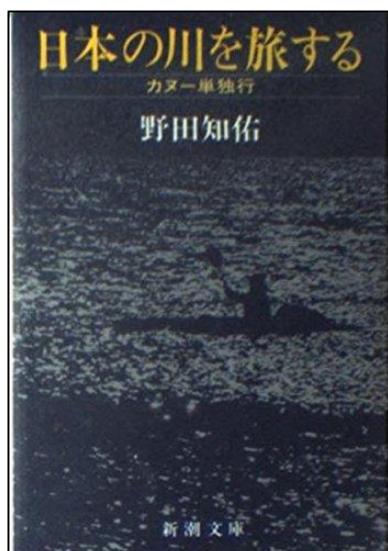
雨の日は外に出るのが億劫だ。でも、気持ち的にはそんな雨の中でも野遊びをしたくなる。そんなときのために編集されたのがこの『雨の日の釣師のために』という一冊だ。1980年にパウナル親子が65編の釣文学を集めロンドンで出版した本をベースに、開高健がその中から30編を選び、5編を追加して日本語版として出版させたものだ。雨の日にアームチェアに座って、香り高いコーヒーを飲みながら、釣りに出かけた気分になるのには打ってつけの本なので。

ちなみにこの本を手掛けた開高健の『オーパ!』や『フィッシュ・オン』などの各種釣り関連の本もお勧めだ。

発行：1991年9月

出版:ティビーエス・ブリタニカ

ISBN：978-4484911168



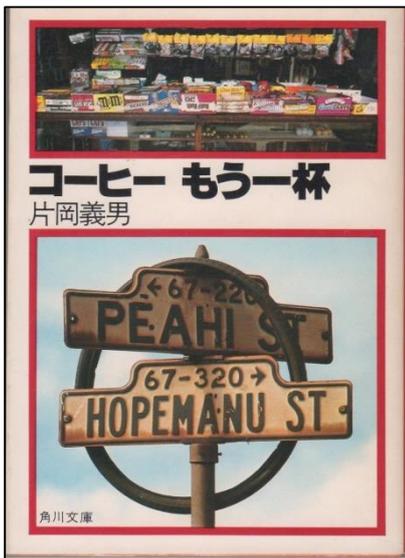
『日本の川を旅する』 野田知祐著

日本にファルトボートで旅することを広めた、カヌーの第一人者、野田知祐氏の日本の川をカヌーで下る旅行記だ。日本の自然保護の在り方、釣り人の偏屈さ、ダムを造りたがる行政への批判など、日本の川の素晴らしさとともに随所にそんな彼の思想が埋め込まれている。北は北海道の釧路川から、南は九州薩摩の川内川まで、日本の川をファルトボートで旅しながら、野田さんが何を思い、どのように暮らしたかの重要な記録なのである。あれから35年、日本の川はますますカヌーがしにくくなり、ダム建設の話は消えてなくなならない。自然のままの川を残すことが、なんで日本ではできないのだろうと、この本を読み返して改めて思ったりする

発行：1985年7月

出版:新潮社（文庫）

ISBN：978-4101410012



『コーヒーもう一杯』 片岡義男著

作家片岡義男という人の作品は、もしかすると、この一冊にすべてが圧縮されているのではないかと思うほど、様々な方向に向いたエッセイ集だ。珈琲のこと。ペーパーバックのこと。南の島のこと。オートバイのこと。ややセピアに染まったページをめくると、昭和の良き時代の、けれど少しも古びない乾いた風が吹く。テントから見上げる満点の星空や、雨の夜に読むヘミングウェイ。アリゾナの荒野に沈む太陽。

一番好きなのは、自分でブレンドした紅茶をティーバッグにして、それを持って郊外に出かけ、コンパクトストーブで丁寧に淹れ愉しむ。自分だけの熱い紅茶に口をつける時、いつも素敵な風が吹き抜けていくのは何故だろう、というこの本に収録された「風と紅茶の一日」という小品エッセイだ。

発行：1980年10月
 出版：KADOKAWA
 ISBN：978-4041371121

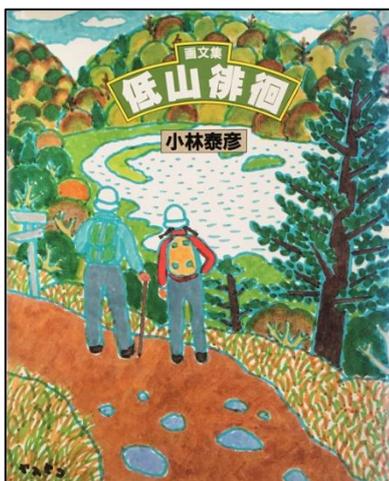


『われらは怪しい探検隊』 椎名誠 著

沢野ひとしとともに、一時期椎名誠には嵌ったものだった。なにしろこの表紙。沢野ひとし氏の傑作イラストである。この表紙からして、面白くないわけがないのである。

この『われらは怪しい探検隊』が僕にとっての椎名作品の原点だった。なにしろ、潮騒うずまく伊良湖の沖の神島で、「東日本なんでもケトばす会」ご一行様が「キャンプしたぜ!」というだけの、そんな話なのだ。しかし、その「キャンプしただけ」がやたらハチャメチャで楽しい。素人集団のキャンプ話がこんなに面白いとは思わなかった。仲間10人とキャンプで盛り上がりれば、確かに楽しいよなあという、その楽しいをこれでもかと文面に押し込めた、椎名文学の傑作なのである。

発行：1982年5月
 出版：角川書店
 ISBN：978-4041510018



『低山徘徊』 小林泰彦著

小林泰彦氏は、『ヘビーデューティの本』のところでも紹介したとおり、ポパイや芦澤一洋氏の本など、幅広く活動してきたイラストレーターである。しかし、彼自身もまた、アウトドアライフを深く愛する一人だった。

彼の出した画文集、『低山徘徊』は、全国の町から比較的近い「近郊の山」をぶらぶらと歩くためのガイドブックだ。低山徘徊の楽しみをワクワクと描いたイラストは、眺めているだけで、外に飛び出したような楽しさを味わうことができる。

発売：1984年02月
 出版：山と溪谷社
 ISBN：9784635770040

『カヌーで来た男』 片岡義男 野田知祐著

作家片岡義男氏と、片岡氏の文庫の表紙作品を撮影してきた写真家佐藤秀明さんのタッグは、『海から100マイル』という、八ヶ岳のドンキーハウスを舞台に行われた対談集で実現しているのだが、片岡氏とカヌーイスト野田知祐氏の対談に、写真は秀明さん、モデルにライダーの三好礼子さん（片岡作品の表紙モデル）というなんとも贅沢な作品が、この『カヌーで来た男』だ。

京都と東京で行われた対談で、野田氏の経歴やカヌーに対する思想、そして片岡さんの自然観などが明らかになる名著である。秀明さんの写真も美しい。

発行：1985年8月
出版：昌文社
ISBN：978-4794970152



『八ヶ岳の森から』 加藤則芳著

角川書店（現KADOKAWA）の編集者を退職し、八ヶ岳山麓でペンションを始めた加藤さんのエッセイ。第一弾は『ぼくのペンションは森の中』で、主にペンションを始めるまでのいきさつが描かれていたが、これは、ペンション開始後の10年の八ヶ岳の四季の中で遊び思ったことや加藤さんを巡る人たちの話が描かれている。写真家佐藤秀明さんと加藤さん家族、そしてその友人たちと、信濃川の源流でキャンプをした日のことも描かれているが、僕もここでは実名で登場する。あのキャンプの日の栗ご飯が美味しかったことを今でも思い出す。この続編の『森の暮らし、森からの旅』を出版されたのち、加藤さんはロングトレイルを歩き始め、アパラチアン・トレイルやジョン・ミューア・トレイルなどを踏破し、2013年病気で逝去するまで、多くの著作を残している。

出版：昌文社
発行：1990年4月
ISBN：978-4794958778



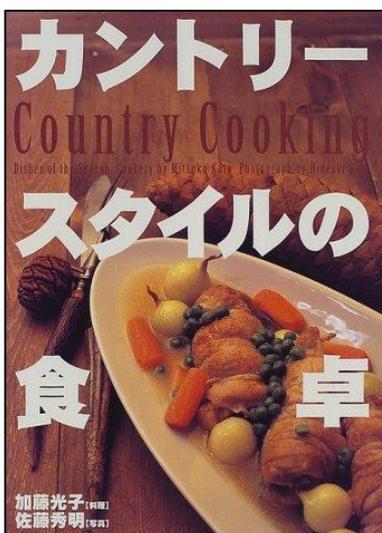
『カントリースタイルの食卓』 加藤光子著

加藤則芳さんとともにドンキーハウスを切り盛りし、美味しい料理の数々を僕らに食べさせてくれたミーコ（光子）さんのレシピ本。佐藤秀明さんの美しい写真とともに、暮らしにもっとナチュラル・テイストを取り入れるというコンセプトのもと、四季折々に合わせた料理から生活全般にわたってカントリースタイルの食卓を提唱する内容になっている。

ミーコさんはドンキーハウス、長野県富士見市乙事の森での生活を経て、則芳さんとは別の道を歩くことになり、東京で料理教室、国立でMKキッチンを開設したが、病気のため2016年11月に逝去。

まさに、僕にとっては料理の師匠だった光子さんのこの本は、教えてもらった数々のレシピと伴に、僕の大切な宝物だ。

発行：1997年11月
出版：地球丸
ISBN：978-4-925020-24-4



“Travel Photography”

旅の記憶を引き出すための旅の記録。

ヨセミテ

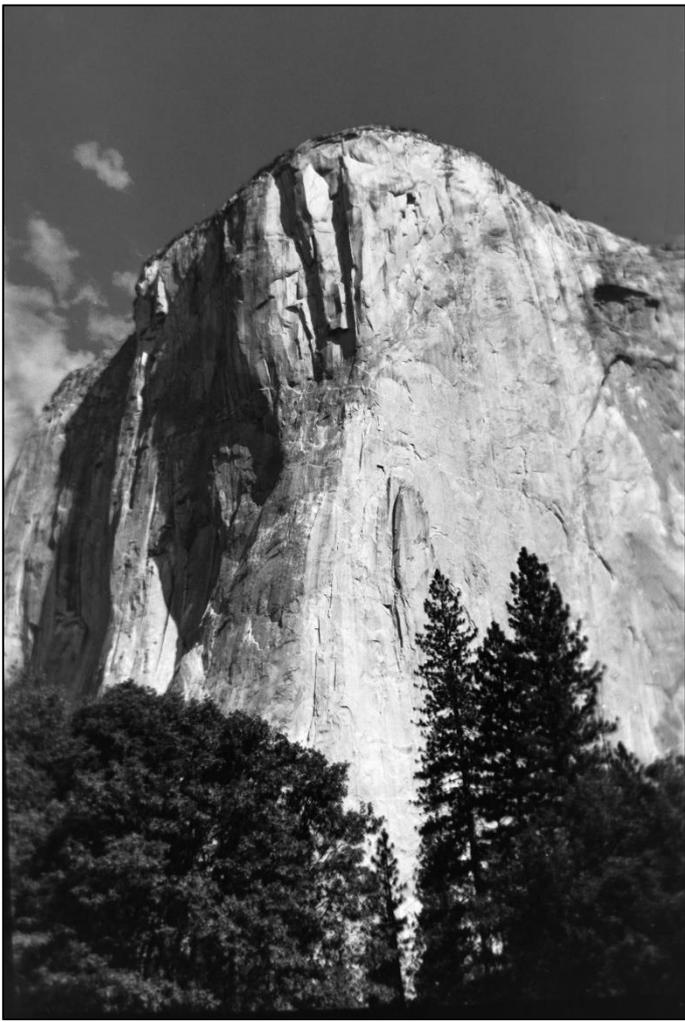


トンネルビューからヨセミテの山々を眺める。

ヨセミテ国立公園 Yosemite National Park

ヨセミテ国立公園（ヨセミテ）は米国カリフォルニア州にある国立公園。中心はヨセミテバレー（ヨセミテ渓谷：Yosemite Valley）とよばれる場所だ。敷地内は、無料の電気バスが運行していて、車は日本の上高地同様駐車場までで原則通行禁止。自然保護が行き届いている。

米国最大の落差を持つヨセミテ滝（Yosemite Falls）や、半円形の美しいハーフトーム（Half Dome）、花崗岩の一枚岩としては世界一の大きさを誇るエル・キャピタン（El Capitan）など、雄大な自然を楽しむことができる、バックパッカーやアウトドアピープルの憧れの地なのである。

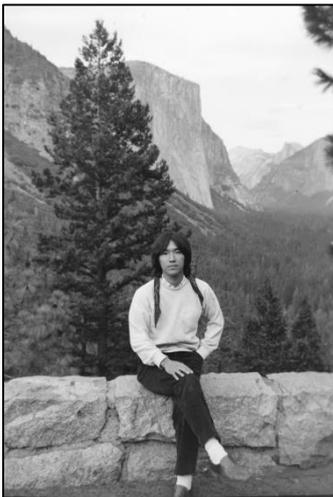


花崗岩の一枚岩として世界一の大きさを誇る
「エル＝キャピタン」

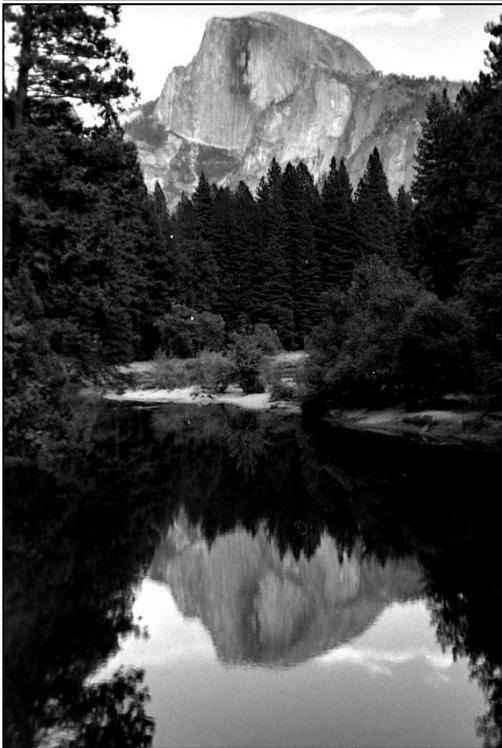
ヨセミテが国立公園として指定され、保護されてきた背景には、ガレン・クラーク (Galen Clark) やジョン・ミューア (John Muir) といった先達の貢献を忘れることはできないが、もう一人ヨセミテを語る時に忘れてはいけないのが、写真家アンセル・アダムス (1902-1984) だ。

アンセル・アダムスは、米国を代表する自然写真家で、カリフォルニア州ヨセミテ渓谷やシエラネバダ山脈を撮影したモノクロの作品は、“風景写真の古典”となり、今なお、多くの写真家をインスパイアしてやまない。

多くの人を魅了する彼のヨセミテを撮影したモノクロ写真は、ヨセミテ自体の魅力を広く世界中に伝えてきたといっても過言でない。かくいう僕も、彼の写真を見て、一度はヨセミテに行かなくてはならないと思っていた。



ブライダルベースフォール



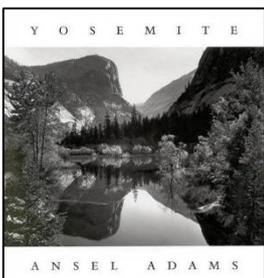
ヨセミテのシンボリック的存在である巨大な岩壁
ハーフドーム

ヨセミテを訪問できたのは、僕が大学3年の夏休みだから、今から37年も前のことだ。サンフランシスコからは車で約3時間半の距離にあるヨセミテは、広大なバックカントリー、数々の岩山群や雄大な滝、鱒などが泳ぐクリーク（マーセド川）などで形成されている。少し歩けば、野鳥や野生動物にも出会える、まさに自然動植物の宝庫だった。

当時のポジフィルムがまだ我が家に残っていたので、ひっぱり出してスキャンしたのがこれらの写真だ。当時の僕の写真がアンセル・アダムスのように撮れているわけもないが、その広大な自然の一端を、当時は友達に紹介できるぐらいには、撮れてたのではないだろうか。

かのApple Inc.の創設者のひとり、スティーブ・ジョブズは、アンセル・アダムスのファンだったといわれ、ヨセミテで結婚式を挙げている。

あれから37年、機会があったら是非またあの広大なヨセミテを歩いてみたいと思う。



アンセル・アダムスのヨセミテの作品は、『YOSEMITE』に凝縮されている。



軽井沢ハルニレテラス付近

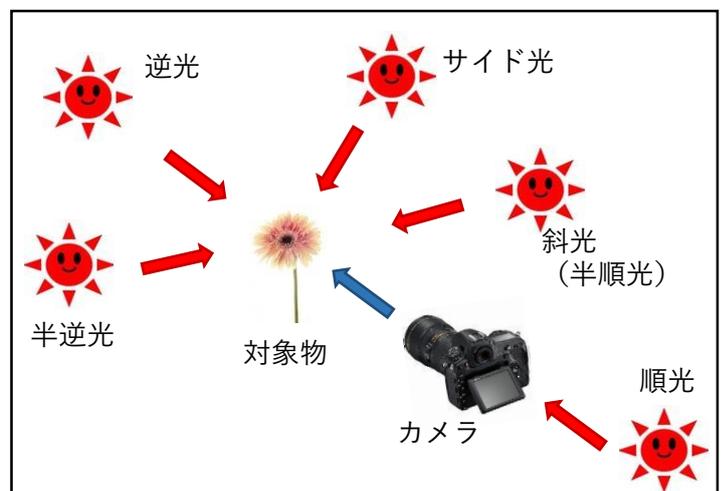
Nikon D800, Ai AF Zoom-Nikkor 24-85mm f/2.8-4D IF
ISO 100, aperture F5.6, shutter speed 1/250

スナップの楽しみ

太陽の位置を考える

アウトドアでスナップを撮る時、特に意識するものとして、太陽の位置がある。ふらふらと街を数時間スナップするのと違って、アウトドアライフは、基本一日中、外にいることが普通だ。

キャンプの朝、寝ぼけ眼でガスストーブに火を入れ、その日最初のコーヒーを飲むときの太陽の位置、オートバイを走らせ、峠を越えるときの太陽の位置、テントを張って、薪を拾い集めるときの太陽の位置、そして森の中の太陽の位置など、常に太陽の位置を考えることになる。



順光の最大の特徴は色が鮮やかに出ることだろう。地上の明暗差が少なく露出が決まりやすいという特徴がある。ただ、影が出来にくので被写体はフラットで印象の薄い写真になりやすい。その点、サイド光では陰影がはっきり出来やすくメリハリのある描写になる。写真に浮き立つような立体感が生まれるというメリットがある。さらに、逆光では写真により強いインパクトが生まれやすい。被写体の輪郭がよりはっきりして立体感も目立つので、積極的に狙いたい光となる。被写体をシルエットにしたり、葉っぱなどを透かしてみたり（透過光）、ストロボを使って日中シンクロしてみたりと撮影方法のバリエーションも豊かなのが嬉しい反面、背景（空）と地上の明暗差が激しくなるので撮影は難しいし、下手に太陽を入れるとゴーストやフレアが発生する。思い切り絞ったり、ハレ切りをしたり、フィルターを使うなど工夫をしよう。

アウトドアでこれらの太陽の位置を確認しながら撮るとして、最後にもう一つ、とっても重要なことがある。それは、どの方向の光を撮るにせよ、“朝方や夕方の時間帯の光”が適しているということだ。朝方夕方の傾いた太陽光は日中のキラキラした太陽光と比べて柔らかいため、陰影が出来過ぎることがなく、逆光やサイド光での撮影にはもってこいなのである。



Nikon D200, TAMRON 90mm F2.8 macro

[季節の花を楽しむための写真図鑑]

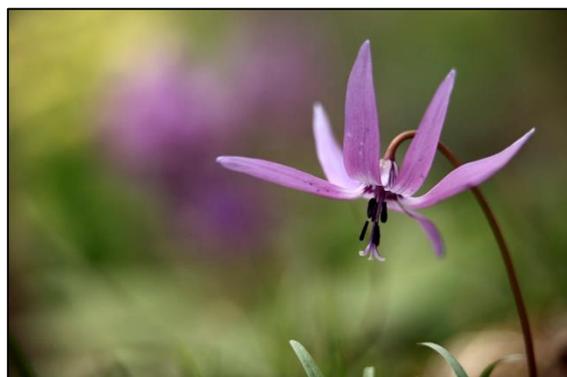
花図鑑 カタクリ

カタクリ（片栗、学名：Erythronium japonicum Decne.）は、ユリ科カタクリ属に属する多年草。古語では「堅香子（かたかご）」と呼ばれていた。

早春に10 cm程の花茎を伸ばし、薄紫から桃色の花を先端に一つ下向きに咲かせる。蕾をもった個体は芽が地上に出てから10日程で開花する。花茎の下部に通常2枚の葉があり、幅2.5-6.5 cm程の長楕円形の葉には暗紫色の模様がある。地域によっては模様がないものもある。開花時期は4-6月で、花被片と雄しべは6個。雄蕊は長短3本ずつあり、葯は暗紫色。長い雄蕊の葯は短いものより外側にあり、先に成熟して裂開する。

日中に花に日が当たると、花被片が開き反り返る。

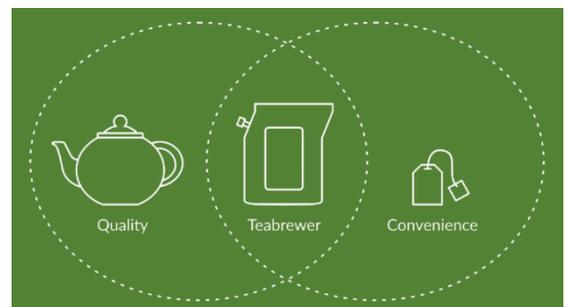
地上に姿を現す期間は4-5週間程度で、群落での開花期間は2週間程と短い。このため、ニリンソウなど同様の植物とともに「スプリング・エフェメラル」（春の妖精）と呼ばれている。（Wikiより）





[茶の快楽：その19]

TEA BREWER BAG



野外に行ってもお茶やコーヒーは飲みたいものだ。できれば妥協せずに美味しいものを飲みたいので、車やオートバイということであるのなら、日常で使っている道具とお茶やコーヒーをそのまま持ち込んでしまえばいい。

一方で、基本歩くという時は、出来る限り荷物を減らしたいので、コンパクトで軽い物をという選択肢になる。だからずっとトレッキングなどの際にはティーバッグの紅茶だったのだけれど、すっかり山歩きなどしなくなった最近になって、面白いものを発見した。

TEA BREWER BAGと名付けられたそれは、ティーバッグではないけれどとてもコンパクトに茶器を使わずに茶を淹れることができる優れたものだ。「ティーバッグのように手軽、ポットで淹れるほど美味しい」というコンセプトそのまま、20cm四方のバッグの中に、普通の茶葉が仕込まれていて、そこに湯を注ぎ、茶器を使った場合と同様に蒸らす。バッグの一か所に設けられている口を開けて、カップなどに抽出すると、かなり美味しいお茶を飲むことが出来るというわけなのである。

このTEA BREWER BAGは、デンマークのThe Brew Companyによって2013年に開発されたものだという。最初は、珈琲からスタートし同時にお茶用のものも開発。さらに2017年には有機ハーブも手掛けるようになったという。お茶の種類も複数用意され、茶器がなくともそれなりのお茶を淹れたいというアウトドアピープルには、まさに打って付けのアイテムだといえるだろう。

The Brew Company A/S

Kasmosevej 3, DK-5500

Middelfart, Denmark

<https://en.brew-company.shop/>



旅のcafe No.19

OTSU COFFEE

東京の鬼門を守る神田明神の鳥居をくぐって神門にたどり着く間の短い参道に居を構えるのがOTSU COFFEE（乙コーヒー）だ。ちょうど鳥居から神社方向に歩くとすぐ左手に趣のある店が佇んでいる。

昔ながらのガラスをはめ込んだ引き戸を開けて店内に入ると、古い商店をリノベーションし木をたっぷりと活用した暖かみのある落ち着いた雰囲気が目に入る。手前の厨房に面してカウンター席が数席。その席と背中合わせの壁際にもカウンター席が数席ある。そして一段高くなったところにテーブル席が何席か用意されているが、もちろん僕は厨房に面したカウンターの一番端に座って、珈琲とチーズケーキを注文した。コーヒーは、全てネルドリップで淹れられる。

メニューに並ぶ珈琲は、ガテマラ(中煎り)、コロンビア(深煎り)などと、どれもこだわりのありそうなものばかり。でも、僕は初めて来た店では、大抵ブレンドを頼んでみることにしている。その店のオリジナルブレンドは、その店を評価する基準になるからだ。ブレンドには深煎りの1番と中煎りの2番があるが、もちろん僕は1番を注文してみた。コクのある苦味の美味しいコーヒーだった。

チーズケーキだが、一言で言うと、プリンのように滑らかだった。クリーミーでとろけるような食感とでもいうのだろうか。コーヒーと良く合う美味しいチーズケーキだった。

店は女性三人で切盛りされていたが、とても丁寧な接客で好感が持てたのはうれしいことだった。



OTSU COFFEE（乙コーヒー）

電話：03-3253-4600

住所：東京都千代田区外神田2-18-13

営業：11:00～21:00(土・日・祝～18:00)

定休：火曜日



旅のSweets No.19 利久堂のゆきげ杏

僕の山遊びは、八ヶ岳周辺がメインだったが、志賀高原をオートバイで走り、戸隠でキャンプをし、上高地や北アルプス山麓をトレッキングするなど、長野を起点にした遊びもあれこれしたものだ。

何処に出かける場合でも、帰りに大抵自分に土産を買って帰るのだが、長野に行くとき毎回買うのが利休堂の「ゆきげ杏」か丸六商店の「杏しぐれ」だった。

杏というと、すぐ思い出すのは、3月から4月に咲くピンク色の桃や桜に似た花のこと。日本一と言われるのが長野県千曲市で、ここでは、例年10万本以上とも言われる杏の花が咲き乱れ里山を埋め尽くすのだという。そのため、千曲市森や長野市安茂里は、杏の里として知られるようになった。

利休堂は、その杏の実を主として、長野市に50年ほど前に創業した杏菓子専門店だ。杏の生ゼリーを種菓子に忍ばせたひとくちサイズの最中“あんず媛”、蜜をたっぷり含ませた干杏を紫蘇の葉で包み杏のエキスに漬け込んだ“しそ巻杏”、シロップ漬けの“森乃杏”など、各種の杏菓子を製造している。その中でも「ゆきげ杏」は、杏の里千曲市森の特産の干杏を独特な製法で丹精こめ練りあげた杏菓子だ。周りに雪を思わせる砂糖をまぶしてあり、杏のさわやかな甘酸っぱさと砂糖の甘さが、お茶請けとしても最適なのである。



利休堂（販売店）

住所：長野市間御所町1250-3

電話：026-267-5128

営業：10:00~18:00

定休：不定休

<http://www.rikyudo.jp/>



土堂の突堤@尾道
Nikon D200
TAMRON 28-75mm F2.8

今日一枚

若かりし頃は、山ばかり好きだった。山を中心に旅してばかりいた。

それが30代になると、南の島めぐりもそれなりに楽しめるようになった。例えば、バリ、キーウエスト、バハマ、沖縄などの素敵な海に出かけて行った。

でも、海はなんとなく山よりも怖い。どこがどうとは言えないが、その広さとか深さとかを、閉所&高所恐怖症の僕は、逆の意味で生理的に怖いとってしまう。

そんな海の中であって、瀬戸内海だけはなんとなく安心できる海という印象がある。もちろん海なのだから、荒々しい表情を見せるときもあるのだろう。それでも、海面をキラキラと輝かせながら、穏やかな表情を見せる海こそが瀬戸内海だ！という勝手な思い込みのせいで、ほっとできる海 "No.1"なのだ。

その原風景が、この尾道の土堂の突堤にある。



Voice From Editor

10代後半から30代半ばまで、アウトドアライフという言葉が、常に身近にありました。バックパッキングとかヘビーデューティーなどという言葉借りて、自然の中であれこれ遊んだ記憶は、今も鮮明に僕の中に存在しています。

丁度バブル期の巷がざわざわしていた時期でも、僕らは、都会の喧騒を嫌い、オートバイや車を駆って八ヶ岳の森などに出かけたものでした。

実は僕はゴルフをやりません。社会人で、それなりの地位の人間の多くは、ゴルフを通じて、さまざまな業界の人種たちとコミュニケーションを取り人脈を広げていきます。でも、自然の山を切り開き、除草剤をまき散らし、自然を壊して来たゴルフ場建設の片棒を担ぐような気がして、どうしてもゴルフをする気にはなれませんでした。それは、やっぱり、自分という人格を形成する時期に、自然の中で遊ぶことを知ってしまったからなのかもしれません。

そんな自然の中の遊びを通じて、多くの友達が出来、そして素敵な大人たちと出会い、多くのことを学んできました。この時代に多くの時間を共有した友人たちは、昔のように一緒に遊ぶことが少なくなっただけでも、どこかでつながっている

のが面白いです。

そんなことをあれこれ思い出しながら取り組んだ今回の特集では、昔愛用したアウトドアグッズを引っ張りだしたり、昔撮った写真のフィルムを再度スキャンしたり、楽しい時間を過ごしました。そして、昔よく読んでいた本をあれこれ読み返したり、アウトドアグッズの店を覗いたりしましたが、また、あの頃みたいに、自然の中をカメラを持って歩きたくなりました。そのうち、是非北八ツの森を彷徨したいものです。もっとも、そのためにはたるみ切った体をどうにか改造しなければいけません。・・・

さて、次号は6月末発行を目指して、新たにあれこれ画策することにします。乞うご期待！

企画・編集 平田公一



季刊 *Darjeeling Days*

バックナンバーのコンテンツは、
サイトからご参照いただけます。
<http://www.tearecipe.net/dd/>



戸隠キャンプ場

Pentax Super-A
KODAK Ektachrome 100

季刊 *Darjeeling Days*
Volume 19

発行日：2019年04月15日
発行人：平田公一
<http://www.tearecipe.net/dd/>
